

身受心法。是菩薩行。雖行四正勤。而不捨身心精進。是菩薩行。雖行四如意足。而得自在神通。是菩薩行。雖行五根。而分別衆生諸根利鈍。是菩薩行。雖行五力。而樂求佛十力。是菩薩行。雖行七覺分。而分別佛之智慧。是菩薩行。雖行八聖道。而樂行無量佛道。是菩薩行。雖行止觀助道之法。而不畢竟墮於寂滅。是菩薩行。雖行諸法不生不滅。而以相好莊嚴其身。是菩薩行。雖現聲聞辟支佛威儀。而不捨佛法。是菩薩行。雖隨諸法究竟淨相。而隨所應爲現其身。是菩薩行。雖觀諸佛國土永寂如空。而現種々清淨佛土。是菩薩行。雖得佛道轉于法輪。入於涅槃。而不捨於菩薩之道。是菩薩行。說是語時。文殊師利所將大衆。其中八千天子。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。

(文殊師利、疾有る菩薩は是の如く其の心を調伏して其の中に住せず、亦復た不調伏の心に住せざるべし。所以は何。若し不調伏の心に住すれば是れ愚人の法なり。若し調伏の心に住すれば是れ聲聞の法なり。是故に菩薩は常に調伏不調伏の心に住すべからず。此の二法を離るゝ是れ菩薩の行なり。生死に在りて汚行を爲さず、涅槃に住して永く滅度せざる、是れ菩薩の行なり。凡夫の行に非ず賢聖の行に非ざる、是れ菩薩の行なり。垢行に非ず淨行に非ざ

る、是れ菩薩の行なり。魔行を過ぐと雖も衆魔を降伏することを現する、是れ菩薩の行なり。一切智を求めて非時に求むること無き、是れ菩薩の行なり。諸法の不生なることを觀ずと雖も而も正位に入らざる、是れ菩薩の行なり。十二緣起を觀ずと雖も而も諸の邪見に入る、是れ菩薩の行なり。一切衆生を攝すと雖も而も愛著せざる、是れ菩薩の行なり。遠離を樂ふと雖も身心の盡くるに依らざる、是れ菩薩の行なり。三界を行すと雖も而も法性を壞せざる、是れ菩薩の行なり。空を行すと雖も而も衆の徳本を植ゆる、是れ菩薩の行なり。無相を行すと雖も而も衆生を度する、是れ菩薩の行なり。無作を行すと雖も而も身を受くることを現する、是れ菩薩の行なり。無起を行すと雖も而も一切の善行を起す、是れ菩薩の行なり。六波羅蜜を行すと雖も而も遍く衆生の心と心數の法を知る、是れ菩薩の行なり。六通を行すと雖も而も漏を盡さざる、是れ菩薩の行なり。四無量心を行すと雖も而も梵世に生ずるに貪著せざる、是れ菩薩の行なり。禪定解脱三昧を行すと雖も而も禪に隨ひて生ぜざる、是れ菩薩の行なり。四念處を行すと雖も畢竟して永く身受心法を離れざる、是れ菩薩の行なり。四正勤を行すと雖も而も身心の精進を捨てざる、是れ菩薩の行なり。四如意足を行すと雖も而も自在神通を得る、是れ菩薩の行なり。五根を行すと雖も而も衆生の諸根の利鈍を分別する、是れ菩薩の

行なり。五力を行ずと雖も而も佛の十力を求むるを樂ふ、是れ菩薩の行なり。七覺分を行ずと雖も佛の智慧を分別する、是れ菩薩の行なり。八正道を行ずと雖も而も無量の佛道を行ずることを樂ふ、是れ菩薩の行なり。諸法の不生不滅を行ずと雖も而も相好を以て其の身を莊嚴する、是れ菩薩の行なり。聲聞辟支佛の威儀を現すと雖も而も佛法を捨てざる、是れ菩薩の行なり。諸法の究竟淨相に隨ふと雖も而も所應に隨ひて爲に其の身を現する、是れ菩薩の行なり。諸佛の國土の永寂にして空の如くなることを觀すと雖も、而も種々の清淨の佛土を現する、是れ菩薩の行なり。佛道を得て法輪を轉じ涅槃に入ると雖も而も菩薩の道を捨てざる、是れ菩薩の行なりと。是の語を説ける時文殊師利の將ある所の大衆、其の中の八千の天子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したりき。

此に至つて一段の談論が一先づ終結を告げ以下は更に其の細説に移ることになる。此處には其の終結として菩薩の種々の方面が擧げられてある。種々の方面といつても歸する所は一である。即ち中道を得ることである。中とは不偏の義であるが單に二者を折衷して其の中邊を取るといふやうなことではない。中とは眞であり正であり、絶對の義である。偏するものは何れも眞ならず正ならぬものである。凡夫が其の欲望に動されて言ひ且行ふことは盡く中正の道に

背いて居るが、たとへ佛法を學ぶと雖も其の小乘を學ぶに止り、世間に遠ざかつて獨り清淨なる生活に甘んずるものも亦中正の道に背けるものである。天台の學に於ては實相即ち中道なりと説くのであるが、唐の妙樂は

一色一香も中道に非るもの無し。中道即ち法界にして、法界即ち止觀なり。

といつた。絶對の眞理を體得したる者から見れば、中道が萬有を支配して居るのである。一色一香も中道を示さざるものは無い。斯く觀することが即ち止觀である。止觀といふは妙智に名けたので、止とは正しく眞理と一致して動搖せぬこと、觀とは其の智力を以て萬有の眞相を觀ずることである。さればまた妙樂は

止の體は靜なり、觀の體は明なり。

といつた。眞に中道を體し得たものは活動無礙である。大乘を學ぶものは皆此の如くなることを期すべきである。

中を得るといふことは儒教に於ても殊に大切にして居るので、程子は『中は天下の正道、庸は天下の定理なり』といひ、朱子は『之を放てば六合に彌り、之を卷けば則ち退いて密に藏す』といつた。されば『中庸』には

中なるものは天下の大本なり、和なるものは天下の達道なり、中和を致して天地位し萬物育す。

とある。又孔子の言にも

道の行はれざるや我之を知る。知者は之に過ぎ愚者は及ばず。道の明ならざるや我之を知る賢者は之に過ぎ不肖者は及ばず。人飲食せざる莫し、能く味を知るは鮮し。

とある。是れは中を得るの難きを嘆じたのである。又同じく『中庸』に

苟くも至徳ならざれば至道凝らず。故に君子は徳性を尊びて問學に道る。廣大を極めて精微を盡す。高明を極めて中庸に道る。

ともいつてある。此等の語は今此處に維摩詰のいふ所と能く一致して居るやうである。要するに種々の弊は中道を得ぬ所から發生するものであるから、深く心を用ゐなければならぬ、山鹿素行は其の經驗を語つて、

我等事幼少より壯年まで専ら程子朱子の學筋を勤め……中頃老子莊子を好み玄々虚無の沙汰を本と存じ候。此時分は別して佛法を貴び候て諸五山の名知識に逢ひ悟道を樂み、隱元禪師へまで相着せしめ候。然れども我等不器用故に候や、程朱の學を仕候ては持敬靜坐の工夫に

陥り候て人品沈黙に罷成り候様に覺え候。朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性の作用天地一枚の妙用高く明なるやうに存ぜられ候て、何事も本心自性の用所を以て仕り候故滞る處これなく、乾坤打破仕候ても、萬代不變の一理は惶々洒落たる所疑ひなく存じ候。然れども今日の日用事物の上に於ては更に合點參らず候。……樹下石上の住居仕り閑居獨身になり世上の功名をすて候へば無欲清淨なる事言語に絶し、妙用自在なる所これあるべき様に覺え候。天下國家四民の事物に渡りては、大事なる事は言ふに及ばず、細事にても世上の無學なる者程參らず候。或は仁を體認せしむれば萬の間に天下の事相濟み候と存じ、或は慈悲を本に仕り候へば過去遠々の功德となり候と迄申し候て、實は世間と學問とは別の事にあり候。(配所殘筆)

といつて居るが、佛法を學ぶものは此の活學者の言に耳を傾くる所がなくてはならぬと思ふ。以下凡そ三十二條に分つて中道の重んずべきことを示されてあるのは、何れも吾等に取つて極めて適切である。

○其の中に住せず 自ら之を以て足れりとせず、進んで一切衆生の救護に力を盡すのである。

○不調伏の心 貪瞋痴等の念の充滿せる心である。之を以て足れりとする者は固より愚人にし

ていふに足らぬ。○聲聞の法 世を避けて獨り自ら潔くするものである。即ち慈悲の心の全く缺けたるものである。○生死に在りて 世俗の人と混じて共に住み漸く彼等を感化して佛道に入らしむることを志とするのである。○永く滅度せざる いつ迄も其の活動を續くるのである。『所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず』とは法華經の中に於て佛の自ら語りたまへる所である。佛事とは即ち一切衆生に救護を興ふることである。誰も皆佛の御心を以て吾が心としなければならぬ。○賢聖の行に非る 特に世間の人と異なる行ひを爲して自ら高うすることの無いのが眞の菩薩である。○垢行に非ず淨行にあらざる 世間の人と共に住みながら心は世間の生活より遙かに超越して居るのであるから、之を垢行と稱することは固より不可であるが、之を淨行ともいはれぬのである。○魔行を過ぐ 佛の正法を實行するのであるから、遠く魔行を超越して居るのである。○衆魔を降伏する 自ら魔行を超越し得たるを以て足れりとすることなく更に進んで凡ての魔界に在る者を降伏し、悉く佛法に歸依せしめんと努むるのである。○一切智を求め 菩薩の理想とする所は固より佛智を具ふことに在らねばならぬ。○非時に求むること無き 佛の境界に到達するためには努力に努力を重ねることを覺悟しなければならぬ。其の努力の結果の現はるゝ時節が容易に來ぬこと、希望を失ひ修行を怠るやうなことがあつては

ならぬ。僧肇は『一切智未だ成ぜずして中道に證を求むるを非時に求むると名く』と説明した。○諸法の不生 生滅變化してやまぬのは眼前の現象である。萬有の本體は固より不生不滅である。○正位に入らざる 正位とは覺を得たる地位のことである。菩薩はいつ迄も自ら覺を得たりと思はず、未だ足らずとして自ら鞭撻し、その修行を續けて居るのである。○十二緣起を觀ず 前にいつた通り十二因緣の中を脱し得ぬものが即ち凡夫である。其の果敢なき境界を觀じて、之より離るゝことが出來れば即ち聖者の列に入るのである。○諸の邪見に入る 邪見の者の群に入つて之と共に住むのである。邪見の者とは即ち凡夫のことである。凡夫と共に住み、彼等を教へ導くことに力を盡すのが菩薩の貴いところである。○一切衆生を攝す 前にいつた四攝法によつて盡く一切衆生を教へ導き佛法を信ぜしむることに力を盡すのである。○而も愛著せざる 自ら多くの人を教化し得たことに就て誇りを感じぬことである。僧肇が『四攝にして彼を攝するは慈悲の極なり。彼を觀ること猶ほ己の如く、而も能く著すること無きなり』といつたのは能く之を悉して居る。○遠離を樂ふ 一切の煩惱を除き盡し、凡夫の生活を離るゝことは固より菩薩の志である。○身心の盡るに依らざる 身心共に一切の累無きに至れるものが即ち身心盡る者である。斯くして初めて眞の遠離と稱せらるべきである。唯だ世間の生活を

離れて山林に住むが如きは眞の遠離ではない。僧肇が『小離は慣閑を離る、大離は身心盡く。菩薩は大離を樂ふと雖も而も依恃せず』といったのはまことに良い説明である。依らずといふは之を恃んで自ら世俗の人と區別することなく、常に世俗の人と共に住んで之を教へ導くことに力を盡すの意である。○三界を行ずと雖も 如何なる境界に在り、如何なる人と共に住むともといふ意である。○法性を壞せざる 羅什が『處して惑はざるなり』といったのは簡にして之を悉して居る。如何なる境遇に在つても之が爲に制せらるゝこと無く、常に自ら其の本性を全らし、心は遠く世俗の外に在るのである。○空を行ず 一切の差別と一切の變化を超越したる、絶對の眞理を求むるものである。○衆の徳本 一切衆生を救護することを志するが故に限りなき功德を積むことが出来るのである。○無相を行ず 凡ての差別相を離はるゝことが其の志である。○衆生を度す 衆生を教化するのに當つては種々の方便を用ゐなければならぬ。方便には無限の差別がある。而も結局は彼等をして等しく皆佛の境界に到達せしめんことを目的とするのであるから、平等を離れぬ所の差別である。○無作を行ず 菩薩は固より自他の別を離れ得失の外に在るべきものである。○身を受くることを現ず 而も善惡の業によつて一々其の報を身を受くべきものであるから、自ら其の身を以て衆生の範となり、衆生を教へ導くこ

とを怠らぬのである。○無起を行ず 離合變化の外に立ち寂然として不動なる絶對の理と一致する心をもたなければならぬのである。○一切の善行を起す 衆生を利益する所の凡ての行を勵むことである。自ら求むる所無きものにして初めて能く他を利益し得べきである。○六波羅蜜 即ち菩薩の六度である。之によつて凡夫の境界を離れ盡すことが出来るのである。○衆生の心と心數の法を知る 羅什は『自行既に足りて然して後に人を化す、人を化して乃ち衆生の心を知る』といったが、人を教化することに努むること漸く久しければ、愈々深く人々の心を知り得べきである。併しながら自身の心に曇りがあれば、如何に久しく經驗を重ねても正しく知ることは出来ぬのであるから、自己を完成することが元でなければならぬ。心數の法とは心の中に起つて来る種々の現象をいふのである。○六通を行ず 六通の中に於て漏盡通を最も重しとすることは前にいつた通りである。○漏を盡さざる 自ら煩惱を除き盡したりとて煩惱の衆生を隔てず、彼等と共に住んで彼等を教化することに努むるのである。○四無量心を行ず 慈悲喜捨の四心相應すれば其の功德は無量であつて、次の生には天上界に住むことが出来ると一般に信ぜられて居るのである。○梵世に生ずるに貪著せず 菩薩は一切衆生を救護せんことを志とするものであるから、天上界に生を受くべき身であつても自ら好んで穢土に住むのである。

○禪定解脫三昧を行ず 一切の惑を離れ、一切の縛を脱して、その心は常に清淨である。○禪に隨ひて生ぜざる 自己の心は清淨であるが、汚れたる世間の人と共に住むことを厭はぬのである。僧肇が『其の因を取つて其の果を取らず、自在の行と謂ふべきか』といつたのは大に味ふべき言である。其の因を取るとは自ら其の心を清淨ならしむるに努むることである。其の果を取らずとは獨り自ら潔しとせず、能く世俗に混ざることである。此の如き人こそは眞に自在といふべきである。○四念處を行ず 前にもいふ通り四念處は、吾等の身と吾等の周圍の事物との悉く無常にして恃むに足らぬことを明にするものである。されば四念處を知るものは一切の執著を去り得べきである。○永く身受心法を離れざる 無常を觀じて世を離れんことを求むるものは小乗の徒である。大乘を學ぶものは無常なる事物の中に常住不變の理を認むるのであるから、世間を離るゝ必要はない。身受とは此の身に受くる外界よりの種々の刺激である。心法とは此の心に起る種々の變化、種々の作用である。其等が皆一々正覺を成就すべき因となるのが眞の菩薩行である。○身心の精進を捨てざる 四正勤は前にもいふ如く、まことに貴いものであるが、是れだけで止つては小乗の版圍を出ぬ。更に精進して菩薩行を積まなければならぬ。○四如意足を行ず 如意足といふは要するに智慧と禪定とが共に具はつて、心の自在を得

たる境地をいふので、斯る境地に達するために修行を續くることを四如意足を行ずといふのである。(其の一々に就ては前にいつた。)○自在神通を得る 他の人々と共に修行をして居るけれども、實は其の心に既に神通力を具ふるまでになつて居るのである。○五根を行ずと雖も 五根は前にもいつた通り自己の修養の根本たる五ヶ條である、○衆生の諸根の利鈍を分別する 自己を完成することを以て足れりとせず、衆生を救護することに力を盡すのは固より菩薩の志でなければならぬ。人を救はんとするには其の機根の利鈍を一々に明かに見究むることが必要である。○五力を行ず 五根が具はつて能く一切の煩惱を打破る、その活動の力が即ち五力である。○佛の十力 其の一々に就ては前にいつたことであるが、要するに佛の世を救ひ人を導かるゝ一切の働さが此の十力に於て悉きであるとして宜いやうである。○七覺分 眞の覺を得るには中正の道に依らなければならぬ。其の爲の修行の方法を七條に分けたのであるから、又七等覺支ともいふ。等とは即ち偏せずして中を得るの義である。○佛の智慧を分別する 佛智を具へ得て初めて眞の覺を得たといへるのであるから、菩薩の理想はいつも其處に在るべきである。○八正道 言行一切が正理と一致するやうにするのは、抑々佛法を學び始むる時から努めなければならぬ所であるが、之を完全に具ふるは高德の菩薩と雖も難しとする所である。

○無量の佛道を行ずる 其の志は常に佛道を行じて無量の功德を積むことに在らねばならぬ。
○止觀助道の法 止觀のことは前にもいつたが、これは畢竟佛道を成就するためのものであるから助道の法といふのである。羅什は「初め心を係けて縁に在るを名けて止と爲し、止の相應せるを名けて觀と爲す」といつた。縁に在るとは正しき縁を離れぬこと、即ち正理と一致することである。○寂滅に墮せざる 如何なる場合でも一切衆生を救護することを忘れぬのである。○諸の不生不滅を行ず 常住不滅なる一理より種々無量の變化が生じ來るのである。此の一理と吾が心の一致することが菩薩道を修むる目的でなければならぬ。○相好を以て其の身を莊嚴する 心の徳が自ら其の相に現はるゝのであるから、相好を具へんとするには其の徳を積まなければならぬ。而して其の端嚴なる相がまた多くの人に感化を與ふるために大に役に立つのである。之を輕々しく思つてはならぬ。○聲聞辟支佛の威儀 佛戒を守つて一言一行を苟くもせず、坐作進退を慎むは聲聞緣覺の特に力を用ゆる所である。○佛法を捨てざる 決して聲聞緣覺の境界に自ら安んずること無く、いつも佛の境界に到達せんと希望をもつて精進するのである。○諸法の究竟の淨相に隨ふ 諸法とは萬有のことであるが、萬有の本體は一切の汚れを離れ、また一切の變化より超越したるものである。故に菩薩たる者は自己の心中一切の汚れを

去ることが即ち自己の本來の性質を全うする所以であることを能く知つて居るのである。○所應に隨ひて爲に其の身を現ずる 所應に隨ひてとは相對する衆生の程度に應じ境遇に應じてといふことである。相對する衆生の中には善惡賢愚種々の者があるから、一々それに相當なる教へを與へなければならぬ。故に獨り自ら潔くして超然たる態度を取つて居てはならぬのである。彼の觀世音菩薩が種々の身を現ずるといふのも此と同じ心である。○永く寂にして空の如しと觀ず寂とは不變化の義である。一切の人が盡く成佛し、一切の國土が盡く淨土となつてしまへば、何れの國土も全く同一であつて何等の差別の存すべき筈はない。これが究竟の理想である。○種々の清淨の佛土を現ずる 衆生を教化するためには佛土の清淨にして安穩なるさまを種々に説明して、彼等に菩提心を發さしむるやうに力を盡すのである。○涅槃に入ると雖も既に佛と異なること無きまでの身となつたことである。○菩薩の道を捨てざる それでも猶ほ自ら足れりとせずして、菩薩としての修行を止めぬといふのは、眞に貴むべきの至である。○八千の天子 文殊等の諸菩薩は既に大乘心を有せる者である。舍利弗等の大弟子も亦既に大乘の貴いことは能く知つて居る。其等に比べてはなほ程度の低かつた八千の天子も、以上の維摩の言を聞いて皆共に大乘を學び、成佛を期せんとの念を起したのである。維摩の感化力のいかに

偉大なるかを知るべきであらう。

此の一段の所説は前段の文殊との問答と比べて見て頗る平凡のやうに思はれるが、皆是れ維摩詰が其の身に實行し來つた所を語るものであるから、深く之を味ふと極めて大なる教訓が其の一句一語にも含まれて居ることを感ずる。凡て三十二條に分つて菩薩行のいかなる者なるかを説いてあるが、要するに中道の重んずべきを説いたにすぎぬことは前にいふ通りである。『調伏不調伏の心に住すべからず』といひ『凡夫の行にあらざ賢聖の行にあらざ』いひ、凡て一方に偏すべからざることが丁寧懇切に説かれてある。僧肇が

不謂伏の稱は愚人より出で、調伏の名は聲聞より出づ。大乘の行には本より名相無し。不調といはんと欲すれば則ち愚人に同じ、調伏といはんと欲すれば則ち聲聞に同す。二者共に離るれば則ち菩薩中に處するの行に應ず。

といつたのはまことに能い説明であるが、更に深く戒むべきは自ら大乘を學ぶ者と稱して、小乗の徒を輕視し、言行を慎むといふが如きことは深く顧慮するに及ばぬなど、妄想することである。苟くも佛法を學ぶものは常に自ら責め自ら戒め、自ら足らずとして精進しなければならぬ。千利休は茶道に於て第一の先輩と仰がれた人であるが、其の言に

客亭主互ひの心にかなふはよし、かなひたがるは惡し。

といひ、又

風流ならざる所却て風流、つとめて風流なるは風流ならざるなり。

とある。眞に味ふべきである。又

茶の湯とはたゞ湯をわかし茶を立て、飲むばかりなるわざにぞありける

といふ歌も傳はつて居る。客も亭主も互ひに世間の煩ひを忘れ、茶の味を楽しんで半日を過すのが眞の茶道である。世間の人を俗物と嘲つて、自ら風流がる者の如きは却て茶道の魔といふべきものである。近頃の人の茶會の記などを讀むと、釜が何であつたとか、水さしが何であつたとか、床の懸け物が何であつたとかいふことばかりで、茶を靜かに喫して樂む間の心持ちなどは全く除外されて居るやうである。佛教の方もそれと殆んど同様の状態である。

利休に就ては種々の逸話も傳はつて居るが、或る大名が利休に金を送り、『近日茶會を催すつもりであるが、その時客に笑はれるやうな事があつてはならぬ。此の金で當日の最も肝要な物を買つて送つてくれ』と頼んでやつた。やがて數日の後に利休から送つて來た物を見ると、茶巾に用ゐる奈良酒の布であつた。何か珍器を送つてくれるであらうと喜んで居たところであつ

たので、其の大名は驚きもし怒りもして、他日利休に逢つた時に語を烈しくして其の意を詰つたが、利休の答へは『茶巾の淨らかなのを用ゐるのが客に對する第一の用意で御坐る』とのみであつた。當時の大名やその他の貴人の中には珍器名畫を誇りあつて、風流の眞意に遠ざかつた者も多かつたので、利休は之を戒むるつもりで斯ういふ事をしたのであらう。凡て新奇を好み超俗を望んで、平凡な事を厭ふのが何の道にも有りがちな弊である。孟子が之を歎じて道は邇きに在り、而るに諸を遠きに求む。事は易きに在り、而るに之を難きに求む。人々其の親を親み其の長を長とすれば天下は平なり。

といつたのは古今同一轍ともいふべきことである。特に前に引いて山鹿素行の言にもあるやうに、佛教を學ぶものに此の弊の多いのは歎くべきことである。

佛教に於て解脱を旨とするこはいふまで無い。解脱とは一切の惑を去り一切の苦を離るゝことで、眞の解脱を得たものは即ち佛である。華嚴大疏に

解脱といふは作用自在なるを謂ふなり。

とある如く、眞に解脱を得れば、如何なる地位に在り如何なる境遇に在つても、其の心は常に自在にして、人に對し事に應ずるに於ていつも綽々として餘裕がある筈である。其の解脱にも

階段がある。先づ第一には凡夫の境界より解脱することである。

眼耳鼻舌身及び心の六は賊の媒となりて自ら家寶を劫む、(楞嚴經)

といひ、若くは

遊心の士は後に悔むること無し。心を恣にする禍は須彌よりも重し。(忍辱經)

といふ如きは何れも凡夫の状態を寫したのであるが、凡夫は常に其の周圍の境遇事情に制せられて片時も安きこと無きものであるから、先づ斯る境界より解脱することが大切である。されば佛も最初の説法に於ては主として此の事を教へられたのである。

此の凡夫の境界を脱し得たるものは聲聞とか緣覺とかいふ徒で(此の事に就ては前から屢々いつたから、此處では委しいことはいはぬ)之を二乗といふのであるが、此の二乗の境界より解脱することが又極めて大切である。世間の無常を觀じて之に囚はれぬやうになつたのは眞に貴いことであるが、宛も新に沐浴した人が再び塵土の中に混ずることを厭ふやうに、世間凡俗の生活に戻るのが何より厭はしくなるから、世を益することも人を救ふことも出来ぬ。これで終つてしまへば切角佛法を學んだかひは無い。嘉祥は法華經の疏に

聲聞は鹿の如し、但だ自身のみ見る、故に悲無し。緣覺は羊の如し、顧みて子を念ふ、故

に少しき悲あり。

といつたが、畢竟大同小異である。佛法を學ぶ者は是非とも佛の御心を以て吾が心としなければならぬ。佛は一切衆生を救護することを以て其の志とし、一切衆生の中に於て一人たりとも苦を脱し得ぬものがあれば佛の御心は安まらぬのである。

佛心とは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。(觀無量壽經)

とある通り、佛の慈悲は洪大無邊である。父の子を愛し、夫の妻を愛し兄弟朋友の相愛するのも良いことではあるが、此等は特別の縁ある者の中の愛である。佛は特別の縁ある人のみならず何人に對しても大慈悲の心を以て臨みたまふのであるから無縁の慈といふのである。斯る洪大なる慈悲心は佛ならぬ者の及ぶ所ではないけれども、之を理想として修行を勵まなければならぬわけである。彼の聲聞とか緣覺とかいふ程度の者は世間の苦を離れて、其の心が至て平和安靜のやうであるけれども、未だ眞の平和を得て居ないである。此等の人々は煩惱に充ちたる世俗の生活を厭ひ、自ら清淨の生活に入つたものであるが、世間に凡俗の非常に多いことは能く知つて居る。然るに世間は極めて複雑であり繁多であるから、たとへ自ら世俗の外に立つて己を潔くして居るつもりでも、如何なる事情によつて、其の凡俗の累ひが其の身に波及せぬと

も限らぬ。譬へば高い坂の上に立つて、坂下の町々の火に焼けて居るのを見て居るやうなもので、至て安全のやうではあるが、何時風向きが變つて其の火事が自分の方へ擴がつて來ぬとも限らぬから、安全といつても決して絶対の安全ではない。

それよりも遙かに安全な人がある。それは自分が有力なる消防隊を有し、それを指揮して坂下の火事を消しに行く人である。それに依つて火事が消えさへすれば決して自分の方へ燃えては來ぬのであるから、絶対に安全である。若し自分に世間の凡俗の人を感化して、其の淺ましい煩惱の生活を離れしむるだけの力があれば、其の心は常に安くして靜なるを得べきである。勿論肉體は何時世間の愚者や惡人から迫害を受けて、傷けられ若くは殺されぬとも限らぬ。併したとへ吾が身を害しても吾が心を如何ともすることは出來ぬと知り、更に彼等の如き不心得の者をやがて絶滅せしむることが出來ると知るが故に、心はいつも安らかなのである。宋の司馬桓魋が孔子を害せんとした時に孔子は

天徳を手に生せり、桓魋其れ子を如何。

といつた。桓魋の孔子を殺さんとした計畫は失敗したが、若し其の計畫がモット巧であつたなら孔子を殺すことが出來たかも知れぬ。併し孔子を殺すことは出來ても、孔子の志を枉げしむ

ることは出来ぬ。孔子の此の言あるはまことに尤もである。佛菩薩の世に處し人に對するは固よりいつも此の如くである。法華經の中に、此經を弘むるために力を盡す菩薩のことを讚めて遊行するに畏れ無きこと師子王の如く、智慧の光明日の照すが如くならん。

とある。遊行するとは如何なる境遇に在つても其の心の自在なることをいふのである。佛法を學ぶ者は誰も皆此の如くなることを志としなければならぬ。

人のために力を盡すことが即ち自身のためになるのである。自利と利他とは要するに離れられぬものである。天台大師の法華文句の中には

三業自ら軌するは即ち是れ自行の法なり。三業の教詔は即ち化他の法なり。

とある。三業とは身に行ふと、口にいふと、意に思ふとで、之を身口意の三業と名けてある。教詔とは他人を教へて三業に缺る所無からしむることである。此の自行と化他とは即ち自利と利他とのことで、自行と化他と相俟ち相助けて佛の境界にまで進んで行くのである。それは盡く一心の働きであるから宋の智覺の宗鏡錄の中には

一心の自行化他を了す。

とある。斯く菩薩道を勵むものは即ち二乗の境界を離れ得たもので、これは前段の解脱よりも

更に優れたる解脱である。併しながら此に至つて大に戒むべきは自ら大乘の徒たるに誇る心の生ずることである。法華經の中に末世に於ける比丘の弊を説いて、

未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。

とあるが、これは今日の佛法を學ぶ者に殊に適切なる訓戒である。

大乘の經典を讀んで、一通り其の意味が分つたとしても少しも誇るべきことでは無い。宗教は實行を詮とするもので、實行が出来なければ殆んど學んだかひは無いものである。前に引いた涅槃經の語にも

自ら其の意を淨くするは是れ諸佛の教なり。

とある如く、自身の心が淨くなつて初めて佛教を學んだものといへるのである。然るに自分の心が全く淨くなるといふことは容易でない。之が爲には極めて多くの努力を要するのである。如何に徳も識も共に高い身となつても、佛の境界に到達せぬうちは心の中の煩惱が全く掃ひ盡されたものではないから、何時いかなる過失が起らぬともいはれぬ。自ら顧みて深く之を恐れなければならぬ。又佛法を世に弘むることは即ち佛に代つて衆生を教化することであるから、説く所は全く佛の御心と一致して居なければならぬ筈である。釋尊は富樓那を稱讚せられて

具足して佛の正法を解釋して、大に同梵行者を饒益す。

と仰せられたが、此の如くにして初めて眞に弘法の任を果し得たものといはれやう。併しそれは普通の入には出来ぬことである。或は佛説の深意を充分に酌み取ることが出来なかつたり、或は自己の私意が混入したりして、聽く者に佛の御心の在る所を完全に傳へ得ぬ場合の多いことを常に深く恐れなければならぬ。若し自ら戒慎することを忘るゝに於ては、佛の化導を贊くるといふ大任を果し得ぬやうにならぬといはれぬ。それでは切角大乘を學んだかひの無いことである。

故に大乘を學ぶものは自ら大乘を學ぶことに得意を感じずるといふ弊を離るゝやうに、充分心を用ゐなければならぬ。此の事が出来れば、必ず佛の境界にまで進むことが出来るので、是れこそ最後の解脱ともいふべきである。『中庸』には天地自然の道と一致し得たる人の境界を説いて、

至誠は息むこと無し。息まざれば則ち久し、久しければ則ち微あり、微あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚なり、博厚なれば則ち高明なり。……此の如き者は見えずして章はれ、動かずして變じ、爲すことを無くして成る。

といつてあるが、是れ即ち眞の君子である。而も君子は常に自ら戒め自ら慎むことを忘れぬものであるから、

君子は其の暗えざる所に戒慎し、其の聞えざる所に恐懼す。隠れたるより見はるゝは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其の獨を慎む。

といつてある。大乘を學ぶ者も固より此の心を失はぬやうに努めなければならぬ。世間の多くの大乗を學ぶと稱する者が徒らに高遠なることを談論するにのみ專にして、此の邊の用意に於て缺くる所の多きは眞に歎すべきの至である。殊に吾が國に於ては大乗のみが行はれて居る。奈良朝に於て俱舍宗とか成實宗とかいふ小乗の教義が傳はつたけれども、それ等は皆法相宗とか三論宗とかいふ大乘の諸宗の人々が兼學したので、専ら小乗を弘むるといふ人は無かつた。されば日蓮上人の如きも

日本國は一向に大乘の國なり。

と斷定した。然るに佛法此國に傳はつてより既に一千數百年を経たる今日に至つて、なほ國民の大部分が佛法に對して、正しい信仰をもつて居られぬといふ有様である。是れは吾等の深く考へなければならぬことである

勿論世界の諸國では吾が日本のことを佛教國と呼んで居る。それは日本國民の大部分が其の祖先の墓を寺に托して居るためである。併し實際に於ては、佛教とはいかなるものなるかを知らぬ人が大部分である。父祖の命日には僧侶を頼んで來て經を讀んで貰つても、其の經の意味の分らぬのはいふまでも無く、何の爲に經を讀むのかといふことさへ全く知らず、唯だ習慣的に斯ういふことを續けて居るにすぎぬ有様である。此の如き有様でありながら、他國から『佛教國』など、呼ばるゝことは極めて耻かしい次第ではないか。秦の趙良が商鞅にいつたことの中に

其の位にあらずして之に居るを貪位といひ、其の名にあらずして之を有するを貪名といふ。とあるが、吾等も亦貪名の徒たるを免れぬものではないか。併し佛教が斯く廢れて居るのは佛教それ自身の咎ではなく、佛教を世に弘むる者が専ら高遠なる教理のみを説いて、自ら躬を以て實行の範を示すといふ點に於て足らぬ所があり、世間の多數の人々をして佛教といふものを誤解せしめた罪であると斷じなければなるまい。

支那の隋の代に於て天台大師が起り、法華經の弘通に専ら力を用ゐたことは前から屢々いつたが、大師はまた大乘戒を委しく説明し、其の門下の人々が之を嚴守すべきことを最も熱心に

勤められた。それは實行の最も重んずべきことを深く信ぜられたからである。大師は菩薩といふことを説明して

此人大道心有りて沮壞すべからず、猶ほ金剛の如し。初發心より終りは等覺に至るまで皆菩薩と名くるなり。又佛子とも稱す。紹繼を以て義と爲す。(梵網經義疏)

といつた。而して其の菩薩行が愈々進んで獨り佛法の教理を究め得たるのみならず、其の活用自在なるに至れるさまを説いては

圓觀稍熟し事理融せんと欲す。事は理を妨げず、理は事を隔てず。具に六度を具し、權實の二智究了通達す。治生產業皆實相と相違背せず。具足して佛の知見を解釋し、而も正觀に於て火に薪を益すが如く、力用光り猛し。

とある。前に紹繼とあるのは佛の化導を繼いで普く一切衆生を教化することである。而も之を口に説くのみならず、之を身に行ふのであるから、一切の言行が盡く世間の範となるのである。治生產業といへば實世間に於ける種々なる事業、種々なる活動のことであるが、其の何れに従事しても佛の教へられたる正理に違ふこと無きは、實に菩薩道を學んで怠らなかつた結果である。而して此の如き結果を得るに就ては謹んで佛戒を持つて敢て違背しなかつたことが其の重

なる原因となつて居るのであるから、大師は

聲聞の小行すら尙ほ自ら木叉を珍敬す。大士の兼懷なる寧ぞ戒品を精持せざらんや。内外の三途咸く皆敬奉し、王家庶衆質を委して虔恭す。斯れ乃ち極果に趣くの勝因にして、道場を結ぶの妙業なり。

といつたのである。木叉とは即ち戒律のことである。『戒律などに囚はるゝのは聲聞のことである、菩薩道を學ぶものは左様のことに頓着するに及ばぬ』といふ者の多いのを、大士は根本から打ち返して『聲聞すら戒を持つのに、菩薩道を學ぶものが戒を持ってぬ筈はない』と斷じた。眞に痛快なる言である。

元來戒を持つのは吾等が身心一切の働きの完全ならんことを期するがためである。四肢五體の一も缺くる所なきものが完全なる身體である。指が一本でも缺けて居ては不具者たるを免れぬ。吾等の言行に於て一も缺くる所の無いやうになつて、初めて眞の人である。戒を持ち言行を慎むは眞の人たらんとするが爲である。少しも窮屈なものでもなく、不自然なものでもない。されば又大師の言に

瓔珞經に云く、一切の聖凡の戒は盡く心を以て體と爲す。心無盡なるが故に戒も亦無盡なり

と。或は言く教を戒の體と爲すと。或は云く眞諦を戒の體と爲すと。或は云く願を戒の體と爲す、別に無作なし。

とあるが、要するに佛の戒を制せられたのは人の人たる本性に基き、其の本性を全うせしめんことを旨とせられたものであるとの意である。無作とは一切の差別を超越したる原理をいふのであるが、其の原理と戒とは決して別のものでないといつてある。此の梵網經の偈に

我今廬舍那として方に蓮華臺に坐す。

とあるが、廬舍那とは徧滿の義であつて、即ち佛の法身をいふのである。而して『今』といふは此の大乗戒を説かるゝ時をいふのである。其の蓮華臺に坐するといふ意を天台は説明して、本佛の華臺に坐するを以て戒は是れ衆徳の本たることを表するなり。

といつた。又同じ經に

我が佛戒を誦するを聽かば、甘露の門則ち開けん。

とあるのを、天台は説明して

譬へば甘露を服すれば人をして長壽不老ならしむるが如く、要らず此の戒に因つて涅槃常樂我淨に至ることを得るなり。

といつた。戒を持つのを小乗の徒のことであるとて輕んじてはならぬのである。

元來大乘の修行と小乗の修行とが全然ちがふといふわけでは無い。唯だ同じ事でも其の精神に於てちがひがあるのである。例へば『殺す勿れ』と戒むるのでも、小乗の方でいへば『殺すといふことは他の者の生命を奪つて自ら快しとすることであるから大なる罪である。人々互ひに殺しあへば人生は滅亡である』との意を以ていふのである。然るに大乘の方でいへば『吾等は互ひに他の者を活かし、他の者を安穩ならしめんが爲に力を盡さなければならぬのである。然るに殺すといふことは此の精神と全く相反する行ひであるから固く之を戒めなければならぬ』といふ意を以て之を制するのである。是れはたゞ其の一例にすぎぬが、此の外のことも之を以て推することが出来るであらう。故に小乗の經典の中に於て説かれてあることでも、深く之を味へば、大乘的の意義が其の中より酌み取らるべきである。前にも引いた語であるが、法華經の方便品には

我本誓願を立て一切の衆をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき。

とあり、更にまた

若し我衆生に遇へば盡く教ゆるに佛道を以てす。

とある。此處に『本』とあるのは抑々説法を始められた時からといふ意である。最初の説法は日常生活に關する卑近なる訓戒の類で、高遠なる哲理などは説かれて居ないのであるが、釋尊は斯ういふ卑近なことを説かるゝ際に『先づ之を端緒として此より次第に深きに入るやうに、彼等を教へ導いて行けば、結局は皆佛智をも具ふるに至るであらう』と考へられたのである。勿論多くの人の中には甚しき愚者もあり、恐ろしい悪人もあるにちがひ無いが、其等の者として皆佛性を具へて居るのであるから、其の道に入るの遲速はあつても、終には皆教へを求むるやうになるのであるから結局『天下に教ゆべからざる者無し』といつて宜いのである。されば釋尊は何人をも輕んぜず侮らず、又何人をも惡まず隔てず、いつも『後には必ず佛と成り得べきものである』といふ念を以て之に對せられ、其の教へを説かるゝに當つてはいつも『此者は必ず佛と成るべきものである、之を教ゆるに當つては常に此の大事を吾が胸中に置いて之を教へなければならぬ』と考へられたのである。維摩詰は釋尊の御心を充分に辨へて居る人であるから、其の一切衆生に對する態度は、いつも佛の御心に叶つて居たことゝ思はれる。されば自ら菩薩道を勵んで智も徳も非常に優れたる人になつて居ながら、最下の凡夫を決して疎んぜず又小乗の教へをも決して輕んぜず、其の言行はいつも中正を得て、佛法の流布に大なる役に立

つて居たものであらう。

以上を以て菩薩行に就ての一通りの談論は終りを告げたのであるが、若し此の如き精神を以て菩薩行を勵むならば、終局其の心自在なることを得て、如何なる境遇に在つても自在に活動し、一切衆生にいつも大なる利益を與へ得るのである。此の事に就て次の不思議品に於ては、極めて精細に又極めて力強く説かれてある。

不思議品第六

以上の長い問答の間、維摩詰は病牀に在り、文殊師利其他の人々は皆立つたまゝであつたと見える。茲に於て舍利弗は『何故態々慰問に來た吾等の爲に牀座の用意をせぬのか』との疑ひを起した。維摩詰は此の氣色を見て取つて『法の爲に來たのか。牀座の爲に來たのか』と問ひ、之に就て一段の問答がある。それより維摩詰が神通力を以て須彌相國より三萬二千の牀座を須臾の間に、その方丈の室に入るゝことゝなり、之を縁として不思議解脱に就ての説明となる。不思議解脱の力は高德の菩薩の具ふべきものであるが、その力とは如何なるものなるか、又其の力によつて菩薩は如何なる利益を衆生に與ふるか等に就ての所説が此の不思議品の眼目

となつて居る。『須彌山を芥子の中に入るゝ』といふことは今まで不思議なる力の例として、文學に於ても屢々引かれて居ることであるが、其の出處はこれである。其の外なほ多くの不思議の力が列擧せられ、菩薩道の洪大なることが充分明かになる。終に迦葉は驚嘆のあまりに舍利弗にむかひ

我等何すれぞ永く其の根を斷ち、此の大乗に於て已に敗種の如きや

といひ、其他の人々も共に深く大乘に歸依するの念を發するのである。

爾時舍利弗見此室中無有牀座。作是念。斯諸菩薩大弟子衆。當於何坐。長者維摩詰知其意。語舍利弗言。云何仁者。爲法來耶。求牀座耶。舍利弗言。我爲法來。非爲牀座。維摩詰言。唯舍利弗。夫求法者不貪軀命。何況牀座。夫求法者。非有色受想行識之求。非有界入之求。非有欲色無色之求。唯舍利弗。夫求法者。不著佛求。不著法求。不著衆求。夫求法者。無見苦求。無斷集求。無造盡證修道之求。所以者何。法無戲論。若言我當見苦斷集證滅修道。是則戲論。非求法也。唯舍利弗。法名寂滅。若行生滅。是求生滅。非求法也。法名無染。若染於法乃至涅槃。是則染著。非求法

也。法無行處。若行於法。是則行處。非求法也。法無取捨。若取捨法。是則取捨。非求法也。法無處所。若著處所。是則著處。非求法也。法名無相。若隨相識。是則求相。非求法也。法不可住。若住於法。是則住法。非求法也。法不可見聞覺知。若行見聞覺知。是則見聞覺知。非求法也。法名無爲。若行有爲。是求有爲。非求法也。是故舍利弗。若求法者。於一切法。應無所求。說是語時。五百天子。於諸法中。得法眼淨。

(爾の時に舍利弗、此の室中に牀座有ること無きを見て是の念を作さく、斯の諸の菩薩大弟子衆、當に何れに於てか坐すべきと。長者維摩詰其の意を知りて、舍利弗に語りて言く、云何ぞ仁者、法の爲に來れりや牀座を求むるやと。舍利弗言く我法の爲に來れり、牀座の爲にあらずと、維摩詰言く、唯だ舍利弗、夫れ法を求むる者は軀命を食らず、何に況んや牀座をや夫れ法を求むる者は色受想行識の求め有るにあらず。界入の求め有るにあらず。欲色無色の求め有るにあらず。唯だ舍利弗、夫れ法を求むる者は佛に著して求めず、法に著して求めず衆に著して求めず。夫れ法を求むる者は苦を見て求むること無く、集を斷ずるの求め無く、盡證修道に造るの求め無し。所以は何。法には戲論無し。若し、我當に苦を見て集を斷じ滅

を證し道を修すべしと言はゞ、是れ則ち戲論なり、法を求むるにあらざるなり。唯だ舍利弗法を寂滅と名く。若し生滅を行すれば是れ生滅を求むるなり、法を求むるにあらざるなり。法を無染と名く、若し法乃至涅槃に染すれば是れ則ち染著なり、法を求むるにあらざるなり。法は行處無し。若し法を行すれば是れ則ち行處なり、法を求むるにあらざるなり。法は取捨無し。若し法を取捨すれば是れ則ち取捨なり、法を求むるにあらざるなり。法には處所無し。若し處所に著すれば是れ則ち著處なり、法を求むるにあらざるなり、法は無相と名く。若し相に隨ひて識れば是れ則ち相を求むるなり、法を求むるにあらざるなり。法は住す可からず。若し法に住すれば是れ則ち法に住するなり、法は求むるにあらざるなり。法は見聞覺知す可からず。若し見聞覺知を行すれば是れ則ち見聞覺知なり。法を求むるにあらざるなり。法は無爲と名く。若し有爲を行すれば是れ有爲を求むるなり、法を求むるにあらざるなり。是故に舍利弗、若し法を求むる者は一切の法に於て求むる所無かるべしと。是の語を説ける時五百の天子諸法の中に於て法眼淨を得たり。)

此より菩薩の具ふべき不思議解脱の力を説かんとするに先つて、法を求むる者の心得に就て一段の談論がある。文殊師利をはじめ多くの人々は釋尊の命を受け、維摩詰の病を問はんが爲

に來たものであるから、相當な禮を以て迎へなければならぬ筈である。然るに維摩詰は一切其の用意をせず、來訪者に對して牀座を設くることもせず、久しい間立たせて置いたのであるから舍利弗が其の意の在る所を疑つたのも無理ではない。併しながら禮を盡して迎ふるといふことは、迎ふる方の人の心得べきことであつて、迎へらるゝ者は決して之を豫期するに及ばぬのである。若し禮を盡して迎へらるゝことを豫期して行き、その豫期が外れて不快を感ずるならば、切角好意を以て之を慰問したのが却て交情を疎却させる種となるであらう。故に慰問の爲に行くものは、唯だ其の慰問の意を果し得んことをのみ念とし、その他のことは一切期待せぬやうにしなければならぬ。佛法を學ぶ者も亦之と同じ心であらねばならぬ。佛法を學んで吾が心の煩惱を除くことが出來れば、心はいつも平和安穩であるから、佛法を學ぶことが大なる幸福の本となるのである。併しながら其の修行の結果が早く現はるゝやうにといふ期待を以て佛法を學ぶならば、其の結果の容易に現はれぬ場合に、必ず失望を感じ、其の信心が退轉して行くであらう。唯だ専ら佛法の貴いことを信じ、之を學ぶことに深き悦びを感じて少しも怠る心がないならば、今まで久しく心中に蟠つて居た煩惱も次第に其の影を没して行くやうになるにちがひ無い。求むる所無きものは自然に大に得る所のあるものである。

涅槃經の中に貧女が其の子と共に恒河に没して死んだといふ譬喩談がある。其の貧女は居べき家もなく扶養を受くべき人もないので、獨り諸國を流浪するうち宿屋で子を生んだのである。然るに至て貧しくて宿料を拂ふことが出來なかつたので宿主の爲に追ひ立てられ、産をしてから未だ久しからぬに、其の赤子を抱いて又漂流の旅に出た。途に於て風雨にあひ飢寒に苦められ、やがて恒河を渡らうとしたが、其の水の流れが非常に急なので身一つを全うすることすら容易でない、子を抱いて渡るのは猶更に困難である。併し其の子を捨つるに忍びずして母子共に溺れて死んだ。即ち

兒を抱きて渡るに、其の水漂疾なれども放ち捨てず。是に於て母子共に俱に没しぬ、是の如き女人慈念の功德により、命終の後梵天に生れぬ。

とある。此の貧女は梵天に生れんことを期待して其の子を捨てなかつたのではない、唯だ母としての愛情が強かつたのみである。併しながら其の慈念の功德によつて、次の世には梵天に生れて永く一切の苦を脱るゝことが出來たといふのである。釋尊は此の譬喩を説き終つて文殊菩薩に向ひ、

文殊師利若し善男子有りて正法を護らんと欲せば、彼の貧女の恒河に在りて子を愛念するが

爲に身命を捨つるが如くせよ。是の如き人は解脱を求めずと雖も解脱自ら至ること彼の貧女が梵天を求めずして梵天自ら至るが如し。

と仰せられた。吾等は法を學ぶことにも、法を弘むることにも常に全力を盡さなければならぬのであるが、如何なる際でも此の貧女の愛子に對するが如き念を以てするならば、必ず佛の御心と一致し得ることであらう。

○舍利弗此の室中に牀座有ること無きを見て 文殊等の諸菩薩は斯る疑ひを起さず、舍利弗が疑ひを起したに就て羅什は『法身の居士は身心倦むこと無し。聲聞結業の形心に法を樂ふと雖も身に疲厭有り。故に息止の想を生ずるなり』といつた。なほ其の外に、文殊等は維摩詰が空室に客を迎へたのには深き意あらんことを察して黙止し、舍利弗は其の智なほ文殊等に及ばぬ爲に此の疑ひを起したるものとも思はれる。○法の爲に來れりや 佛命を受けて病者を慰問するのは、法を求むる者の當に爲すべき所であると信じて來たと思ふのが如何と問うたのである。

○牀座の爲に非ず 牀座の爲にあらず、といひながら牀座の無いのに不滿を感じたのであるから、維摩詰の訶責を免れぬのも據ないことである。○軀命を食らず 法華經には『一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず』ともある。これが法を求むる者の志でなければな

らぬ。○色受想行識の求め 前にもある通り之を五蘊といふ、要するに身心一切の活動をいふのである。法を求むるはたゞ一身を安んじ困苦を免れんとを求むるのではない。○界入の求め 界入とは前にある通り十八界十二入のことで、即ち眼耳鼻舌身意に生ずる感覺と之に對する外界の刺激等をいふのである。法を求むるものは固より美色を見妙音を聞かん等の求めによつて動さるゝものでは無い。○欲色無色の求め 欲界色界無色界の何れにも求むる所はない。眞に法悦を有するものは如何なる世界に在るも累を受けぬのであるから、何れをも求めず又は何れをも避けぬのである。○佛に著して求めず 佛と成ることは固より菩薩行を勵む者の目的である。佛に成らずとも宜いなど、思ふものは無い。唯だ疾く佛に成りたいなど、いふ念が起つてはならぬのである。吾が當に努むべきことを努めて、自然の結果を待つべきのみである。○法に著して求めず 正法を體得せんことは固より望む所である。併し是れは如何に急いでも急に得らるべきことでは無い。努めて止まぬ者が自然に體得すべきのみである、○衆に著して求めず 衆生を救護することは固より菩薩の志である。併しながら衆生に歸依せられ衆生に尊信せられんことを求めて、自己の徳を養ふことに於て缺くる所があれば、眞に法を求むる者とはいはれぬことになる。○苦を見て求むる 佛法を學ばぬ者はいつも其の心に眞の満足がない、

即ち常に苦に充ちて居るのである。其の中に於て特に苦として目立つ事のみを苦と思ふのはまことに淺はかなる考へである。多くの人は重い病に罹るとか、親しい人に死別するとかいふ特殊の出来事にあつて、初めて人生の苦を感ずるのであるが、眞に法を求むる者は法を學ぶことによつてのみ眞の悦びの得らるべきことを知るが故に、特に或る出来事に出逢つて信心を起すといふことは無い。○集を斷ずるの求め 凡夫の心は煩惱の集つて居るものであるから、之を徹底的に教ゆるものが所謂『集諦』である。併したゞ煩惱を除かうと思つても容易に煩惱が除き盡さるゝものではない。譬へば日の光りに照されて、草木の葉に置く露が消えて行くやうに大乘を學ぶこと漸く久しく吾が心に智慧の光りが輝き來ると共に、次第に煩惱が消えて行くのである。○盡證修道に造るの求め 盡證とは煩惱を除き盡して證悟を得ることである。修道とは斯る證悟を得べき道を究むることである。これは四諦中に於ける滅諦と道諦とである。固より菩薩たる者は道を修めて證悟を得べきものであるけれども、其の功の現はるゝことの速ならんことを求むる心があつてはならぬのである。怠る者と急ぐ者とは共に道を得ることの難きものである。○戲論なし 如何に深く究めても、如何に精しく説いても、之を實行しやうといふ決心の之に伴はぬものは盡く戲論である。眞に道を求むる者は戲論を超越しなければならぬ。

○法を求むるにあらざるなり 唯だ至心以て法を求むるのが眞に法を求むるものである。言語に囚はれたり、形式に囚はれたりして居るものは、法を求むる者の如くに見えても、眞に法を求むるものではない。○寂滅と名く 一切の差別を離れ一切の變化を超越したるものが即ち絶對の理である。○生滅を行ずれば 一切の差別一切の變化を概稱して生滅といふのである。利害得失の打算に專なるものは固より生滅を行ずるものであるが、若し自ら學び得たる所ありとて之に就て得意を感じ、世間の愚者と自己とを差別せんと念を起すならば、これ亦生滅を行ずる者といふべきである。○無染 清淨にして何事にも染まず、何物の爲にも影響せらるゝ所なきものである。○法乃至涅槃に染すれば 自ら法を學び得たるを恃み、自ら涅槃の境界に達し得べきことに誇りを感じ、世間の凡俗と自己との別を立てんとするは即ち染著である。○行處無し 自ら吾が心と法との一致することを期すべきである。特に或る形式のみに執著すべきものではない。○法を行ずれば 自ら或る形式に執著し、之に依らざれば法を求むることを得ずと主張することである。世間に宗を分ち派を分つて相争ふもの概ね皆これである。○取捨無し 特に善法として擇み取り、惡法として捨て去るべきものも無い。如何なる事も皆道に入るの縁となるべきである。○處所無し 何れの處に於ても皆法を學ぶべきである。山林に在るも

可なり市中に在るも可なり、高士と共に居るも可なり凡俗と共に居るも可なり。唯だ恃むべきは吾が心一つの持ち方である。○無相 限られたる相があるのではない。無相即ち一切の相を包容するのである。○相に随ひて識れば限られたる外面の形相に囚はれて深く其の真相を究むることを爲さぬならば、いつまでも得る所無かるべきである。○住すべからず 執著を全く離れよといふのである。自ら得る所ありと思ふは、眞に得る所有る者ではない。○見聞覺知すべからず 見聞覺知に全く依らぬといふのではない。見聞覺知に止まらず更に深く入らなければ法を知ることが出来ぬのである。○無爲 限られず囚はれぬことである。涅槃といひ眞如といふも畢竟無爲の義に外ならぬのである。○求むる所無かるべし 求むる所なくして自ら得たるのが、眞に得たのである。

維摩詰は今より不思議の神通力を示し、更に不可思議解脱の力に就て説かんとするのであるが、それに先つて菩薩たる者は求むる所なき心を以て道を求むべきことを説いた。これは大に味ふべきことである。求むる所なき者ほど強いものは無い。求むる所なき心より無限の活動力が生み出さるのである。曾て明治天皇の御製を幾つか拜誦した中に、
うつにはは従ひながらいはほをもとほすは水の力なりけり

とあるのが特に感多く存せられた。水は至柔にして而も至剛である。水は方圓の器にしたがひ圓くもなれば四角にもなる。これほど柔順なものは無い。然るに此の水が集つて大海となり、怒濤を起して岸を打つ時には、如何に堅い巖石も之に敵することは出来ず、多くの穴が穿たるのである。水の力ほど強いものは無い。至柔にして而も至剛なるは、不思議のやうで而も少しも不思議ではない。水は至柔にして争ふこと無きが故に、何れの河から流れて來た水でも全く合一して大海となり巖石を穿つ力を作るのである。其の至柔の性が即ち至剛の力を作り出すのである。老子の中に

江海の能く百谷の王たる所以は、其の善く之に下るを以ての故に能く百谷の王と爲る。是を以て民に上たらんと欲すれば必ず言を以て之下り、民に先せんと欲すれば必ず身を以て之に後る。是を以て聖人は上に處りて而も民重しとせず、前に處りて而も民害せず。是を以て天下推すことを樂んで厭はず。其の争はざるを以ての故に、天下能く之と争ふもの莫し。

とあるのに思ひ合せて見ると更に一層の深意が味はるゝやうである。

舍利弗が『我は法の爲に來る、牀座の爲にあらず』といったのは、實際に思ふ通りをいつたものであらう。苟くも釋尊の十大弟子の隨一とも稱せらるゝものが、禮を盡して迎へらるゝこ

とを豫期して人を慰問するわけは無い。併しながら眼前に禮の具はらぬさまを見れば、疑惑の起らざるを得ぬのが人情である。けれども其處にはなほ文殊等の諸菩薩に及ばぬ所があるわけである。維摩詰が此の事を縁として懇ろに彼を訓戒し、眞に法を求むる者の心得を説いたのは、所謂朋友互ひに善を責むるの道であつて、舍利弗も深く之に感謝したことであらう。眞に法を求むる者は無爲でなければならぬ。無爲とは全く私を離れ盡して、限られず囚はれず、求めず恃まず、たゞ絶対の理と一致したる境地である。譬へば戸を閉ぢて、一室に引き籠つて居れば、其の身はたゞ一室の内のみ限られて居る。一たび戸を明け放てば室内の空氣と大空とは通じて一となる。その大空は何億萬里の遠くまで續いて居るのである。又何億萬里の遠くに在る日の光りも星の光りも此の室の中へ通つて來るのである。能く無爲になり得た人の境界も此の如くである。併し室の戸を明け放つことは容易であるが心の戸を取り去ることは容易でない。羅什は

若し相を取りて著を生ずれば心法を乖く。法を求むるものに非ざるなり。

といつたが、何事にも執著のないやうになるには非常なる努力を要するのである。書を讀めば其の書の字句に囚はれて、字句の外に深意を酌むことが出來ぬ。人の説を聽けば其の説の細節

に拘はつて、容易に之を脱却することが出來ぬ。自ら少しく覺る所があれば、その覺り得たる所に執著して更に此より以上に心を向けることが出來ぬ。大隈言道の歌に

今ひとへ雲をいづれば雲もなき空なるものを知らぬ月かな

といふのがある。今一重で雲のない空へ出られるものを、その一重の雲がなか／＼出られぬ。

その月を悶かしい心で吾等は眺めて居るが、吾等自身は其の月と同じさまなのである。

釋尊の御事はいかに吾等が語を盡して讚しても到底讚し得るものではないが、無量義經の中に於て諸菩薩が偈を説いて讚したのには、先づ劈頭に

大なるかな大悟大聖主、垢なく染なく所著無し。

とあつて、其の一切の執著を離れたまへることを第一に稱してある。なほ之に續いて

智恬に情泊に慮凝、靜なり、意滅し識亡して心亦寂たり。

とあるが、是亦一切の差別を超越して其の心が絶対の理と契合したるさまを稱したのである。

更に其の絶大の智慧と絶大の慈悲とを具へらるゝことを稱讚して

能く衆生をして歡喜して禮し、心を投じ敬を表して慇懃なるを成ぜしむ。

とあり、また

是れ自高我慢の除れるに因りて、是の如き妙色の軀を成就したまへり。

とある。自高我慢の念が無いといふのは、迷へる衆生と悟れる佛御自身との間に何等の隔てをも置かれぬことである。一切衆生の惱みは即ち吾が惱みである。一切衆生の悦びは即ち吾が悦びであるといふ御心で、自他の隔てを考へられぬのである。譬へば母親が赤子に乳を與へ、赤子が乳を飲んで満足してニコニコと笑つて居れば、母親も共に満足して笑つて居ると同様である。此の時の母親の心には暑さも寒さも何もない。佛の吾等衆生に對せらるゝ御心はいつも此の如くである。

斯く佛の御心は自他彼此親疎遠近の別を超越し、少しも限られず囚はれぬものであるから、自由自在なる働きが出来るので、

遍く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入りたまへり。是故に今自在の力を得、法に於て自在にして法王と爲りたまへり。

と諸菩薩が讚歎したのも道理である。併しながら佛とて最初から佛であつたのではなく、『遍く一切の衆の道法を學して』とある如く、心を盡し力を極めて學ばれたればこそ、絶大の智慧と絶大の慈悲とを具ふる身ともなられたのである。されば諸菩薩も

世尊往昔の無量劫に、勤苦して衆の徳行を修習し、我が人天龍神王の爲にし、普く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり。

といひ、更に

若し人刀杖をもて來りて害を加へ、惡口罵辱すれども終に瞋りたまはず、劫を歴て身を挫けども倦惰したまはず、晝夜に心を攝めて常に禪に在り。

といひ、之を收束して

我復た咸く共に俱に稽首して、能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

といつたのである。何事でも勤めずして成就するものではない。諸菩薩が釋尊の勤め難きを勤めたまへるに深く歸依したといふは、即ち自らも之を範として能く勤め難きを勤めんと志を立てたことを表白するものである。

若し一身の利害得失に重きを置き、名利を得んが爲に勤むるのであれば、途中にして廢することもあるであらうが、一切衆生を救ふべき力を具へんが爲に勤むるのであるから、如何なる困難にあつても其の努力を弛むることなく、終に其の目的を達するのである。苟くも佛法を學ぶ者は共に佛の歩みたまへる蹤を追ひ、共に佛の御心を以て吾が心として勤め勵まなければな

らぬ。同じく無量義經には、佛に従つて大乘を學び修行を重ねたる者のことを説いて
 遊戯して法の清渠に澡浴し、或は躍り飛騰して神足を現じ、水火に出没して身自由なり。
 とあるが、勤めて止まなければ、誰も皆斯ういふ境界に到達し得らるべきである。維摩詰が舍
 利弗に對して『夫れ法を求むる者は軀命を貪らず、何に況や牀座をや』といひ、而る後に懇ろ
 に法を求むる者の心得を説いたのは大に玩味すべき所である。

爾時長者維摩詰。問文殊師利。仁者遊於無量千萬億阿僧祇國。何等佛土有上好妙
 功德成就師子之座。文殊師利言。居士。東方度三十六恒河沙國。有世界名須彌相。其
 佛號須彌燈王。今現在。彼佛身長八萬四千由旬。其師子座高八萬四千由旬。嚴飾第
 一。於是長者維摩詰現神通力。即時彼佛遣三萬二千師子座高廣嚴淨。來入維摩詰
 室。諸菩薩大弟子。釋梵四天王等。昔所未見。其室廣博。悉皆包容三萬二千師子座。無
 所妨礙。於毗耶離城及閻浮提四天下。亦不迫迮。悉見如故。爾時維摩詰語文殊師
 利。就師子座。與諸菩薩上人俱坐。當自立身如彼座像。其得神通菩薩即自變形。
 爲四萬二千由旬。坐師子座。諸新發意菩薩及大弟子。皆不能昇。爾時維摩詰語舍利

弗。就師子座。舍利弗言。居士。此座高廣。吾不能昇。維摩詰言。唯舍利弗。爲須彌燈王
 如來作禮。乃可得坐。於是新發意菩薩及大弟子。即爲須彌燈王如來作禮。便得
 坐師子座。

(爾の時に長者維摩詰、文殊師利に問ふ。仁者無量千萬億阿僧祇の國に遊びて、何等の佛土に
 か好き上妙の功德成就せる師子の坐有りしやと。文殊師利言く、居士、東方三十六恒河沙の
 國を渡りて世界有り、須彌相と名く。其の佛を須彌燈王と號し、今現在に在せり。彼の佛身の
 長さ八萬四千由旬なり。其の師子の座の高さ八萬四千由旬にして嚴飾第一なりと。是に於て
 長者維摩詰神通力を現じ、即時に彼の佛三萬二千の師子の座の高廣にして嚴淨なるを遣はし
 て、維摩詰の室に來入す。諸の菩薩大弟子、釋梵四天王等。昔より未だ見ざる所なり。其の室
 廣博にして悉く皆三萬二千の師子の座を包容するに妨礙する所無し。毗耶離城及び閻浮提四
 天下に於ても亦迫迮せず、悉く見るに故の如し。爾の時維摩詰、文殊師利に語るらく、師子
 の座に就きて諸の菩薩上人と俱に坐したまはゞ當に自ら身を立すること彼の座像の如くなる
 べしと。其の神通を得たる菩薩は即ち自ら形を變じて四萬二千由旬と爲りて師子の座に坐す

諸の新發意の菩薩及び大弟子は皆昇ること能はず。爾の時維摩詰舍利弗に語りて師子の座に就かしむ。舍利弗言く、居士、此の座高廣なり、吾昇ること能はずと。維摩詰言く、唯だ舍利弗、須彌燈王如來の爲に禮を作さば乃ち坐することを得べしと。是に於て新發意の菩薩及び大弟子即ち須彌燈王如來の爲に禮を作し、便ち師子の座に坐することを得たり。

此に至つて愈々維摩詰が神通力を現はし、人々の爲に牀座を具ふることになるのである。其の一室を空しうして來訪者を待つたのは、決して佛の御使として來た人々を輕んじてのことではなく、之を縁として一段の問答を試み、人々に覺醒を與へんがためであつた。また是れ善巧方便の一であつた。既に其の事が終つたので、愈々此の大切なる賓客を迎ふるために其牀座をととのふる順序となつた。その牀座は尋常一樣のものであつてはならぬ。此の賓客は佛の命によつて維摩詰を慰問せんが爲に來たものであるから禮を盡して之を待たなければならぬ筈である。而も此の一行を代表するものは諸菩薩中に於て特に智徳共にすぐれたる文殊師利である。又之に隨從せる人々は何れも文殊と維摩詰との問答を聞いて益を得やうといふ熱心によつて態々隨つて來たのである。而も其の時菴羅樹園に於て釋尊と共に在つた人々が皆來たのではない其の中に於て自己の力の足らぬことを知る者は皆遠慮して一行に加はらなかつた。一行に加は

つたものは三萬二千の菩薩の中で八千にすぎず、八千の聲聞の中で五百に過ぎなかつた。實にこれは佛門の代表的人物とも稱せらるべき人々のみである。斯る人々を坐せしむべき牀座であるから、維摩詰は特に須彌燈王佛の御許より借り來つたる師子の座を以て之に充てたのである而して此の多くの師子の座が盡く維摩詰の方丈の室に入つて、少しも障りが無かつたといふところから、所謂不思議解脫の法門に關する所説となり、即ち此の『不思議品』の最も肝要なる一段となる。それは次の段のことであるが、それに先つて此處に菩薩と聲聞との差が明かに示されてある。文殊師利等の諸菩薩は維摩詰に勧められて直ちに師子の座に坐したけれども、同じく菩薩の中に於ても未だ徳の足らぬ者、及び舍利弗等の諸聲聞は師子の座があまりに高く之に坐することが出来なかつた。彼等は之によつて自分等と文殊師利等の高德の菩薩との間に非常なる等差のあることを知つた。而して彼等は如何にすべきかを維摩詰に問うた。維摩詰の答へは『須彌燈王佛を禮拜し、佛の加護を乞ふならば其の座に昇ることが出来やう』とあつた舍利弗等は教へらるまゝに須彌燈王佛を禮拜し、佛の力が加はつて初めて其の座に坐することが出來た。佛の力が加はれば、今まで出来なかつたことも出来るのである。

法華經の方便品に説かれてある所を、此の事と思ひ合せて見ると非常に意味深く思はれる。

法華經に於ては釋尊が言を盡して、佛の及ぶべからざる所を説きたまひ、

假使世間に滿つらん皆舍利弗の如くにして、思を盡して共に度量すとも、佛智を測ること能はず。たとひ十方に滿つらん皆舍利弗の如く、及び餘の諸弟子亦十方の刹に滿つらん、思いを盡して度量すとも、亦また知ること能はず。

とある。而して後に

舍利弗當に知るべし、諸佛は語異ること無し。佛の所説の法に於て當に大信力を生ずべし。

といひ、更にまた

若し人佛に信歸すれば、如來は欺誑したまはず。

とあつて、然る後に（此語は前にも度々引いたのであるが）

一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。

と仰せられてある。即ち信の力の至大なることが最も強く説かれてあるのである。佛に對して大信力を起し、佛の御力に頼り、佛の教へられたる所を守り、少しも違はず怠らなければ、結局は佛と同じ境界に到達し得らるのである。深く心に之を信じ、篤く身に之を行ひ、佛の御力が吾等の心に通ふに至つて、初めて佛法を學んだかひがあるのである。此の大切なことを忘

れて所謂戲論に陥らぬやう、吾等は常に自ら戒めなければならぬ。

○阿僧祇の國 阿とは無の意で、僧祇とは數の意である。されば無數の國といふことである。文殊の如き高德の菩薩は其の智慧の力が洪大であつて、十方世界の事一として知らざるは無きほどであるから、之を稱して遊行自在ともいふのである。○師子の座有りしや 是れは維摩詰が知らずして問うたのではない。羅什が『自ら知りて問ふは衆會をして信を取らしめんと欲してなり』といふのが能く當つて居る。○恒河沙の國 恒河は印度に於ける有名なる大河である。その河の沙の數は固より無限である。されば無限の國々といふ意に用ゐてある。○須彌相 須彌山といふは世界の中央に在る高山と考へられて居たので、漢譯して妙高といひ、或は安明ともいふのである。須彌相といふは其の國の莊嚴のさまを須彌山に擬して呼んだものであらう。○由旬 印度の里數の名で、種々の説もあるが一由旬を現今の約九マイルと見て大差ないやうである。○師子の座の高廣にして嚴淨なるを遣はして 僧肇が『維摩詰神力を以て往いて之を取らんと欲するも、彼の佛遣はずんば亦致すに由無からん』といったのは道理である。維摩の心と佛の御心の感應によつて初めて其の座を借ることが出来たのである。○其の室廣博にして 今までは方丈の室と見えただのであるが、忽ちにして二萬二千の師子の座を容れ得るやう

な廣さとなつたのである。吾等の心の力は固より時間空間等を超越し得る性質のものである。

○閻浮提四天下 古代印度の人々の間に信ぜられた所によると、中央に須彌山があり、之を繞つて四洲八海があり、其の外を鐵圍山が圍んで居る。これを一小世界といひ、之を千倍したものが一小千世界、之に千の二乗をかけたものが三千大千世界である。一佛の教化は此の三千大千世界に及ぶといふ。此の須彌山の東方に在るを東勝神洲といひ、南方に在るを南閻浮提（南瞻浮洲とも）いひ、西方に在るを西牛貨洲といひ、北方に在るを北瞿廬洲といふ。今吾等の住んで居るのは此の中の南閻浮提である。故に此處の文は『吾等の住む閻浮提も少しも狭くはならず、四洲の何れに於ても少しも狭くならぬ』といふ意である。○彼の座像の如くなるべし 彼の師子の座は八萬四千由旬といふ高さであるが、文殊菩薩等も彼の座の上に坐するならば、其身が之と同じく八萬四千由旬の高さになるであらうといふのである。是れは菩薩が漸く進んで佛の境界に到達し得べきことを現はすものである。元來師子の座といふものは佛の説法の時に坐したまふ所のものである。智度論に『是を號して師子と名くるも實は師子なるに非ず。佛は人中の師子たり。佛の所坐の處は或は床にても或は地にても皆師子の座と名く』とある。されば師子の座に坐するといふは佛の如くに法を説いて一切衆生に教化を興ふべき身となるといふ

意を現はすのである。○其の神通を得たる菩薩 一行の中の菩薩は八千人といふが其の盡くが皆文殊の如くに智徳共に優れたる者ではない。其の中には種々の段階がある。されば其の中の優れたる菩薩のみが直ちに師子の座に就くことを得たのである。○新發意の菩薩 大乘の教へを學んで後には佛と成らんことを期するものは皆菩薩と稱せらるべきである。佛と成らんといふは眞に大なる志であるから菩薩と稱して大士といふ。併しながら大乘を學ぶことに志してより未だ久しからぬものは智も徳も未だ足らぬのは據ない。其等々新發意の菩薩といふのである。○大弟子 舍利弗の如き人々のことである。これは未だ菩薩の境界に到らぬものであるから、たとへ大弟子といはるゝ身でも師子の座には登れぬのである。○吾昇ること能はず 大乘に於て教へらるゝ究竟の理は固より彼等の解し得る所ではない。故に更に多くの修行を重ねて後でなければ、佛の境界に近づくことは出来ぬのである。維摩詰が彼等に斯る自覺を興へたのは眞に親切の至である。此の自覺を得たる以上は、必ず進んで大乘の理を究めやうといふ大奮發心が起る筈である。羅什は之を評して『維摩が神力の制する所、衆をして大小乗の優劣此の若くに懸なることを知らしめんと欲せるなり』といつた。○禮を作さば 佛を禮するは即ち佛に歸依する心を表するのである。佛に歸依する心がいつ迄も續けば、其の人自身も漸く佛の境

界に近づいて行けるのである。故に佛に禮すれば師子の座に坐することを得るといつたのである。

維摩詰が文殊等を坐せしめんがために、特に須彌燈王如來の許より師子の座を借りて來たといふは深き意義ある事と思はれる。文殊等の諸菩薩、舍利弗等の諸大弟子は何れも釋尊に従つて教へを受けたものであるが、釋尊以外の佛にも縁のない者ではない。十方世界に佛の數はいかに多くとも、其の佛の具へたまへる智慧は皆同様である筈である。絶對の眞理が幾通りもあらう筈はない。其の佛智を具へらるゝまでに經て來られたる徑路はそれ〴〵に異るであらうが既に佛智を具へられた上は其の智に於て相異なることはあるまい。又諸佛が衆生のために說法せらるゝに當つては、種々の方便を以てそれ〴〵聽く者の機根に應ずる教へを與へらるゝであらうが、其の說法の目的は皆同一でなければならぬ。即ち一切衆生をして盡く佛の境界に到達せしめやうといふことで無ければならぬ。是れは吾等の憶測ではなく釋尊が自ら法華經の中に『一切の衆をして我が如く等しくして異なること無からしめん』と仰せらるゝと共に、更に他の諸佛の上にも言及せられて、

一切の諸の世尊も皆一乘の道を説きたまふ。今此の大衆皆疑惑を除くべし。諸佛は語異なる

こと無し、唯一にして二乘無し。

とあるに依つて明かである。斯く明言せられたればこそ、吾等は佛の教へたまへる所に絶對の信仰を捧ぐる事が出来るわけである。吾等は凡夫であるから、心に疑惑を懐くことを免れぬ。此の疑惑はたゞ佛を信ずることによつてのみ除き得らるゝのである。

吾等とても佛の教へられた所を深く味へば、いかにも貴く有難く思はるゝのであるが、佛の悟りたまへる所が果して如何なる事であるかは到底吾等の窺ひ得ぬ所である。此の事に就ては釋尊も

佛の成就したまへる所は第一希有難解の法なり。唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。

と仰せられた。譬へば吾等は大きな河の岸に立つて、此の河水がいかにも清くして且晝夜を休めず滾々と流れて居るさまを見て、之を感歎しては居るが、此の河の源を探り知ることが出来ぬのと同様である。然るに佛は吾等に向つて『汝の前に流れて居る河も、其の他の有らゆる河も唯一の源より流れ出したものである』と教へられ、又それと共に『汝等も終には此の源に遡つて來ることが出来るぞ』と仰せられたのである。吾等は此の教示を仰いで信ずるより外はな

い。諸佛の悟りたまへる所は皆同一である。而して諸佛は皆吾等衆生を教へ導いて佛の境界に到達せしめんことを志として居らるゝのである。吾等の住する所は娑婆世界であるが、此の娑婆世界の教主として出られたものが即ち釋迦牟尼佛である。吾等は釋迦牟尼佛の教化を受けて凡夫の境界を離れ、後には佛の境界にも到達し得らるゝのである。而も釋迦牟尼佛の御心と十方世界の諸佛の御心とは全く異らぬといふのであるから、吾等が釋迦牟尼佛に歸依するは即ち十方世界の諸佛に歸依するのである。吾等が釋迦牟尼佛の御教へを信ずることは即ち十方世界の諸佛の御心になふことである。故に釋尊は大乘を信奉する者を稱められて、若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり。是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり。

と仰せられたのである。今維摩詰が釋迦牟尼佛の御弟子を坐せしむるために須彌燈王佛の所から師子の坐を借りて來たといふは、まことに意義深きことである。

師子の座といふも實際師子の形を現はしたる座にあらず、佛を師子に比する故に佛の坐したまふ所を師子の座といふとは、前に引いた智度論の文によつて明かである。長阿含經に今佛は高座の上に在す。前に明燈あり、世尊は師子座に處し南面して坐したまふ。

とあり、又大品般若經にも

爾時に世尊自ら師子座を敷き、結跏趺坐したまふ。

とある。佛の説法を師子吼といふのであるが、師子は百獸の王であるが故に、佛が一切人天中に於て最も優れたる徳を具へたまへるを師子に比し、其の説法を師子吼と稱し、必ず一切の外道等が之に屈服するとの意であるとの説がある。例へば僧肇が

師子吼は無畏の音なり。凡そ言説する所群邪異學を畏れず、師子が一吼すれば衆獸之に下に喩ふ。師子吼とは法を演ずるを美とするなり。

とある如きは此の意である。然るにそれよりも更に深い意義が涅槃經の中には説かれてある。其の文には

師子王の如きは自ら身力を知り、牙爪鋒芒、四足を地に踞し巖穴に安住し、尾を振ひて聲を出す。若し能く是の如き諸相を具することあらば、當に知るべし是れ則ち師子吼することを。とあり、なほ其の師子吼の様を細叙して後に佛の説明に言及し、

衆生をして具足して尸羅波羅蜜に安住せしめんが爲の故に、故に師子吼す。師子吼とは決定説に名く。一切衆生は悉く佛性有り、如來は常住にして變易あること無し。

といつてある。此の經文に依ると師子吼とは單に師子が聲を出すといふだけの意ではない。師子が充分に身構へして、四方から如何なる敵が襲ひ來るとも更に驚かぬだけの覺悟を定め、身心の力を其の聲に籠めて一吼するのである。師子は百獸の中で最も勇猛であるのみならず、如何なる場合にも油斷せず、如何なる小敵をも侮らぬ故に決して敗を取らぬといふことが言ひ傳へられてある。それで『師子兔を搏つこと猶ほ象を搏つが如し』といふ語もある。今此の經文にも其の意が能く現はれて居る。佛の說法も亦其の如くである。佛は何人に對して法を説かるゝ場合でも『必ず此の人をして佛道に入らしめやう』といふ御心を以て、いつも極めて熱心に説かるゝのである。相對する者が愚人であればとて之を輕んぜらるゝことは無い、惡人であればとて之を憎まるゝことは無い。

佛の說法は一切衆生をして盡く尸羅波羅蜜に安住せしめんが爲であるといふ。尸羅とは前にも出た語であるが譯して清涼といふ。即ち堅固に佛戒を持つものは其の心に煩惱が無くなつて能く安穩清涼である。戒を持つといふことは隨分困難なことであるけれども、力を用ゆること久しきに及んでは、其の一言一行が盡く戒と一致するやうになり、少しも困難を感ずることなくして戒が持てるので、これが即ち戒の中に安住したる境界である。斯うなれば其の心の中か

ら一切の煩惱が掃ひ去られ、其の本來具有せる佛性が光りを放つて來るのである。何人も最初から斯ういふ境界には到れぬけれども、努めて已まなければ必ず此處まで到達し得らるべきである。『一切衆生は悉く佛性有り』と佛は明言せられた。既に佛性のある以上は其の佛性が何時かは開發せらるべき機會が來るにちがひ無い。而して佛は常住に在すことも亦佛の明言したまへる所である。吾等の眼の前に佛の姿の現はるゝ時もあり、又現はれぬ時もあるけれども、佛法は此の天地の間に永く傳はつて泯びず、佛の御力は此の天地の間に永く存して滅せぬのであるから、此の佛法を世に弘むることに力を盡すものが絶えなければ、一切の愚者、一切の惡人も皆佛法に歸依して、此の地上に佛の淨土の實現せらるべき時が必ず來るにちがひ無い。されば涅槃經の文の續きには

聲聞緣覺は如來世尊に隨逐すること無量百千阿僧祇劫なりと雖も、而も亦師子吼を作すこと能はず。十住の菩薩若し能く是の三行處を修行せば、當に知るべし是れ則ち能く師子吼すとある。小乗の教へを學んだのみでは佛の御志を繼ぐことは出來ぬが、大乘を學んで久しきに及び智徳共に秀でたる菩薩は佛の御志を繼いで佛法を世に弘むることが出来るから、其の說法は佛の說法と同じく師子吼と名けらるべきものである。『十住』とあるはたゞ佛法を信じたとい

ふのみでなく、其の信に安住することの出来るほどの境界に到つたものを十種に分けたのである。

師子座は即ち師子吼し得る者の坐すべきものである。今維摩詰を訪問したる人々の中には文殊の如き高德の菩薩も居るけれども、まだ左程の修行を積まぬ者もある。而るに維摩詰が之を迎へて師子の座を之に供したといふは、彼等と共に菩薩行を勵みさへすれば、後には必ず佛の境界にも到達し得べきものなることを認めたる爲と思はれる。それは法華經の中に出たる不輕菩薩が行きあふ人々を禮拜して

汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつたのと同じ精神であつたのであらう。而も舍利弗等は其の座に昇ることが出来なかつた舍利弗等は文殊等の諸菩薩が其の座に坐せるさまを眼前に見ながら、自ら其の座に昇ることが出来なかつたのであるから、今更ながら大小乗の懸隔せることを思ひ知つたであらう。舍利弗が維摩詰に向つて『此の座高廣にして吾昇ること能はず』といつた一言の中には、顧みて己が徳の足らぬことを耻づる意が含まれて居ると共に『此の座に昇るやうになるには如何したらよいか』と維摩詰の教へを乞ふ意も充分に含まれて居る。小乗を學んで涅槃を得たる者にして

自ら足らざることを知り、大乘の貴きことを知るに於ては、必ずや更に進んで大乘を學び、菩薩道を修めんとする奮發心を起すにちがひ無い。舍利弗の此の短い一言中には其の意が確かに現はれて居る。獨り舍利弗のみならず、餘の人々も必ずや同様であつたであらう。彼等をして斯る心を起さしめたのは實に維摩詰の慈悲心の曠大なるに依るものである。而して維摩詰は彼に答へて『須彌燈王如來の爲に禮を作さば乃ち坐することを得べし』といつた。舍利弗等も久しく釋尊の教化を受けて居たものであるから、佛を禮拜することを知らぬ筈はない。併しながら今現に文殊等の諸菩薩と自分達の差とは非常なることを眼前に示されたに就ては、自ら慚愧する念も非常に強くなつて居るにちがひ無い。此の際に於ける維摩詰の一言は強めて力強く彼等の心の底にまで響いたであらう。易に

同聲相應し、同氣相求む。水は濕へるに流れ、火は燥けるに就く。雲は龍に従ひ風は虎に従ふ。聖人作つて萬物觀ゆ。

とある如く、人々佛性を具へて居るのであるから、深く佛を敬信し、佛の御心を以て吾が心としやうといふ念が強くなれば、漸く進んで佛の境界に到るべき道もこゝに開かるゝことは疑ひを容れぬ所である。

舍利弗言。居士。未曾有也。如是小室乃容受此高廣之座。於毗耶離城無所妨礙。又於閻浮提聚落城邑。及四天下諸天龍王鬼神宮殿。亦不迫進。維摩詰言。唯舍利弗。諸佛菩薩有解脫。名不可思議。若菩薩住是解脫者。以須彌之高廣內芥子中。無所增減。須彌山王本相如故。而四天王忉利諸天。不覺不知己之所入。唯應度者。乃見須彌入芥子中。是名不可思議解脫法門。又以四大海水入一毛孔。不燒魚鼈鼉鼉水性之屬。而彼大海本相如故。諸龍鬼神阿修羅等。不覺不知己之所入。於此衆生。亦無所燒。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。斷取三千大千世界。如陶家輪。著右掌中。擲過恒河沙世界之外。其中衆生。不覺不知己之所住。又復還置本處。都不使人有往來想。而此世界本相如故。又舍利弗。或有衆生。樂久住世。而可度者。菩薩即延七日。以爲一劫。令彼衆生謂之一劫。或有衆生。不樂久住。而可度者。菩薩即促一劫。以爲七日。令彼衆生謂之七日。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。以一切佛土嚴飾之事。集在一國。示於衆生。又菩薩以一佛土衆生。置之右掌。飛到十方。遍示一切。而不動本處。又舍利弗。十方衆生供養諸佛之具。菩薩於一毛孔皆令得見。又十方

國土所有日月星宿。於一毛孔普使見之。又舍利弗。十方世界所有諸風。菩薩悉能吸著口中。而身無損。外樹木。亦不摧折。又十方世界劫盡燒時。以一切火內於腹中。火事如故。而不爲害。又於下方過恒河沙等諸佛世界。取一佛土。舉著上方。過恒河沙無數世界。如持針鋒。舉一棗葉。而無所燒。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。能以神通現作佛身。或現辟支佛身。或現聲聞身。或現帝釋身。或現梵王身。或現世主身。或現轉輪王身。又十方世界所有衆聲。上中下音。皆能變之。令作佛聲。演出無常苦空無我之音。及十方諸佛所說種々之法。皆於其中普令得聞。舍利弗。我今略說菩薩不可思議解脫之力。若廣說者。窮劫不盡。

(舍利弗言く、居士、未曾有なり。是の如き小室に乃ち此の高廣の座を容受するに、毗耶離城に於て妨礙する所無し。又閻浮提の聚落城邑及び四天下諸天龍王鬼神の宮殿に於ても亦迫進せずと。維摩詰言く、唯だ舍利弗、諸佛菩薩に解脫有り、不可思議と名く。若し菩薩にして是の解脫に住する者は、須彌の高廣を以て芥子の中に内るゝに増減する所無し、須彌山王の本性故の如し。而も四天王忉利の諸天、己が入る所を覺らず知らず。唯だ度すべき者は乃ち須

彌の芥子の中に入る事を見る。是を不可思議解脱の法門と名く。又四大海の水を以て一毛孔に入るに、魚鼈鼉龜水性の屬を燒まざす。而も彼の大海の本性故の如し。諸の龍鬼神阿修羅等己が入る所を覺らず知らず。此の衆生に於ても亦燒ます所無し。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩は三千大千世界を斷取すること陶家の輪の如し。右の掌の中に著けて恒河沙の世界の外に擲過するに、其の中の衆生己が住する所を覺らず知らず。又復た還りて本處に置くも、都て人をして往來の想有らしめず。而も此の世界の本相故の如し。又舍利弗、或は衆生有りて久しく世に住することを樂ひ、而も度すべき者には、菩薩即ち七日を演べて以て一劫と爲し、彼の衆生をして之を一劫なりと謂はしむ。或は衆生有りて久しく住することを樂はず、而も度すべき者には、菩薩即ち一劫を促めて以て七日と爲し、彼の衆生をして之を七日なりと謂はしむ。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩は一切佛土の嚴飾の事を以て、集めて一國に在きて衆生に示す。又菩薩は一佛土の衆生を以て之を右の掌に置き、飛びて十方に到りて遍く一切に示し、而も本所を動さず。又舍利弗、十方の衆生が諸佛を供養する具を、菩薩は一毛孔に於て皆見ることを得しむ。又十方國土の有らゆる日月星宿を一毛孔に於て普く之を見しむ。又舍利弗、十方世界の有らゆる諸の風を菩薩は能く口の中に吸著すれ

ども而も身は損ずること無し。外の諸の樹木も亦摧け折れず。又十方世界の劫盡きて燒くる時、一切の火を以て腹中に内るに、火事故の如くにして而も害を爲さず。又下方の過恒河沙等の諸佛の世界に於て、一佛土を取り、擧げて上方に著け恒河沙無数の世界を過ぐるに、針鋒を持ちて一粟葉を擧ぐるが如く、而も燒ます所無し。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩は能く神通を以て現じて佛身と作し、或は辟支佛の身を現じ、或は聲聞の身を現じ、或は梵王の身を現じ、或は世主の身を現じ、或は轉輪王の身を現す。又十方世界の有らゆる衆聲、上中下の音、皆能く之を變じて佛の聲と作さしめて、無常苦空無我の音を演出し、及び十方諸佛の説く所の種々の法を皆其の中に於て普く聞くことを得しむ。舍利弗、我今略して菩薩の不可思議解脱の力を説く。若し廣く説かば劫を窮むるとも盡さじと。

此に至つて不可思議解脱といふことに就ての説明となるのであるが、是れ皆佛菩薩の具ふる所の徳の外に顯はれたものに外ならぬのである。前段に於て維摩詰は舍利弗のために法を求むるの心得を説いた。而して其の結尾に於ては『一切の法に於て求むる所無かるべし』といった。若し一切衆生を救護することを以て己が任と爲し、此より外に全く求むる所無き者は、如何なる境遇に在つても其の境遇の爲に束縛せらるゝこと無く、其の心はいつも自在である。されば

僧肇は之を説明して、

夫れ不思議の迹の外に顯はるゝこと有るは、必ず不思議の徳の内に著はるゝもの有り、其の本を覆尋すれば權智のみ。

といった。權智とは即ち方便力のことである。其の心が煩惱の爲に蔽はるゝこと無きに至れば一切の事物の真相が一々に皆能く分るから、如何にして世を濟ふべきか、如何にして人を導くべきかを明かに辨へ知つて、何人にも適切なる教へを興ふることが出来る筈である。僧肇はなほ之に續けて

智は幽にして燭さざる無く、權は徳として修めざる無し。幽にして燭さざる無きが故に理極めざる無く、徳として修めざる無きが故に功就らざる無し。

といった。全く煩惱の爲に擾されぬ人の心は宛も澄み渡つたる鏡の如くである。鏡面に少しの曇りも無ければ之に對する物の形が巨細となく皆映る。吾が心に少しも私なく、少しも僻する所が無ければ相對する人の心の底までも能く見透すことが出来る。又物事の推移し變化して行く末の末までも洞見することが出来る。『幽にして燭さざる無し』とは此の事である。さて此の如く明かなる智慧を以て人に對すれば、何人にもそれ〴〵適切なる教へを興へ得るのであるが

自ら實行し得ぬことを人に對して説いても、決して人を動すことの出来るものではない。故に人を救はうとするものは先づ自ら救はなければならぬ。人に説かんとする者は先づ自ら之を其の躬に行はなければならぬ。自ら徳を修むることに怠らぬ者にして初めて眞の權智を具へ得べきである。徳が充分にあれば感化力も隨て洪大である筈である。『徳として修めざるなきが故に功就らざる無し』とあるは此の事である。

古來から名僧碩徳と稱せらるゝ人に就ては種々の奇蹟的の事が傳はつて居る。それは平凡な人の眼から見て不思議とも奇蹟ともいはれるやうな事が多々あつたには違ひあるまいが、其人自身に取つては何も不思議なことではなかつたのであらう。人を驚かさうといふやうな考へが少しでもあつては眞の教化の出来るものではない。僧肇が

智は萬物に周くして而も照すこと無く、權は衆徳を積みて而も功無し。冥莫無爲にして爲さざる所無き、此れ不思議の極なり。

といったのは能く其の意を悉したる語である。照すこと無しといふは『萬物を照せりとして吾が智を恃むことなし』との意である。功なしといふは『敢て功の大なるを望まぬ』との意である。無爲にして爲さざる所なしといふは『自然に世を益し人を濟ふことが出来る』ことである。宛

も親は強めて其の子を愛育しやうと努めずとも、自然の恩愛の情が發露して、其の子を養育するため力を盡きざるを得ぬのと同様である。又一室の中に數百燭の電燈を點すれば、自然其の光りが溢れて室外の物を照すのと同様のことである。人に示さうとも、人を驚かさうともせずして自然と人の仰ぐ所となるのは實に其の徳の然らしむるものである。其の徳に際限がなければ其の力の及ぶ所も亦際限がない。又其の救護の働きは決して一時に止まらず、永く後世の人々にまで其の感化を及ぼし、其の功德を遺すのである。蘇東坡は聖賢の徳を稱へて

匹夫にして百世の師たり、一言にして天下の法と爲る。是皆以て天地の化に參し盛衰の運に關する有り。

といつたが、一言は至て短い、天下の法となれば其の用は永く盡くる所がない。眞に時間をも空間をも超越したるものである。斯く考へて來ると、維摩詰の示したといふ不思議の働きも必ずしも不思議とはいはれぬ。一室の中に數萬の師子の座が入つても、一言にして天下萬世を動すに比べて見れば寧ろ怪むに足らぬことであらう。僧肇が之を評して

巨細相容れ、殊形並に應ず、此れ蓋し耳目の龜迹なり。遽に以て言ふに足らんや。然れども末に因りて以て本を示し龜に託して以て微を表はさんと欲するが故に、座を借るに因りて略

ぼ其の事を顯はすのみ。

といつたのは宜く當つて居る。固よりこれは佛菩薩の具ふる所の力の一斑を現はしたものにすぎぬのである。

要するに煩惱を掃ひ盡したる人の心は自在無礙である。何物にも縛せられず、何事にも囚はれぬのであるから、身を何れの地に置いても、悠々自適を得べきである。隨て其の世に對し人に接するに於て些かも障る所のあるべき筈はない。維摩詰の如きは其の典型ともいふべき人である。之を凡夫の生活に比べて見れば固より『不思議』と稱せらるべきものであらう。されば此の維摩經の如きも不思議を説いたものともいへるであらう。僧肇が

此の經は淨土に始まりてより法供養に終るまで、其の中に載する所の大乘の道、不思議の法にあらざる無し。

といひ、更に

解脱とは自在の心法なり。此の解脱を得れば凡そ作爲する所、内に行すれば外に應じ、自在無礙なり。此れ二乗の能く議する所にあらざるなり。

といひ、羅什が

夫れ爲さんと欲して能はざるを則ち縛と爲す。念に應じて能はざる無きを名けて解脱と爲す。能く然れども然る所以を知ること無きが故に、不思議といふなり。

といつたのは能く此間の關係を明かにし得たるものといふべきである。爲さんと欲して能はざるは煩惱に役せられて居るからである。念に應じて能はざる無きは煩惱を掃ひ盡したからである。但し煩惱を掃ひ盡さうと如何にあせるとも、急に掃ひ盡せるものではない。佛を信じ、佛法を學んで怠らぬ時には自然と煩惱が除かれ、自然と一切衆生を感化し得るやうな力も具はつて来る。『能く然れども然る所以を知ること無き』の一語はまことに能く之を説明して居る。

○妨礙する所無し 絶對の理は固より時間と空間とを超越するものである。大小相障ふることなきは當然である。○須彌の高廣 須彌山は此の地上に於て最も高廣なるものである。印度の古代に於て天地萬有が四大より成ると考へて居たことは前にいふ通りである。四大とは所謂地水火風である。四大の集散離合によつて萬物が形を成すのであるが、其等萬物は皆空間に存在するのであるから、地水火風空を併せて五大といふ。而して此等五大は無始の昔から無限の後世までの間に於て絶えず變化するので、一として時間の支配を受けぬものはない。然るに精神の力なるものは能く絶對の理と一致し、時間空間の制限を超越するのである。因て先づ最初

に地上に於て最も高廣なる須彌を擧げ、以下順次に水火風等を擧げ又時間空間の別を擧げ、凡て其等に支配されぬ所に佛菩薩の有する智力の特色の存することを説くのである。○度すべき者 佛菩薩の教へを受けて、後には自身も亦佛智を具ふるやうになり得べき者のことである。○鼈鼉 鼉とは龜の至て大なるもの。鼈とは鱷魚の一種である。○此の衆生 龍鬼神等のことをいふのである。○陶家の輪の如し 陶器を作るものが轆轤を幾度か廻すうちに鉢や皿の形が容易く出来るやうに、何の苦もなく全世界を其の掌中に收むるのである。○恒沙の世界の外 恒河の沙の如くに無限なる世界を隔てたる遠方へ投げ出すのである。○一切佛土の嚴飾の事 佛の住したまふ所は清淨にして種々の寶を以て飾られてあることが諸經に説かれてある。之を娑婆世界に住する衆生にも明かに示して、衆生をして宛も自ら淨土に在るが如き想有らしむるのである。○諸佛を供養するの具 香華飲食衣服を具へ或は音樂を奏しなどして佛を供養すること、諸經の中にも見ゆる所である。○一毛孔に於て 其の菩薩の身中の一毛孔を覗つて見れば、十方世界の衆生が佛を供養する有様が皆明かに見えるといふのである。○劫盡きて焼くる時 世界の終りに於て大火が起り、一切の物が皆焼き盡さるのである。併しこれで一切の終りとなるのでは無い。成住壞空の四劫が永久に反覆せらるゝのである。劫とは非常なる長

い歲月のことであるが、先づ第一は成劫。一切虚空であつた中から天地萬有が次第に形を成して来る時期である。第二には住劫。其の萬物が共に存し共に榮えて居る時期である。此の住劫の終る時のことを即ち『劫盡きて』といつてあるので、住劫の次は壞劫である。壞劫とは萬物の破滅して行く時期で、此の時に起る大火を劫火ともいふ。其の次には虚空の外に何物もない時期がある。即ち空劫である。其の次がまた成劫となり、以下四劫が幾度でもくり返さるゝのである。古代の印度に於ては此の事が一般に信ぜられて居た。○辟支佛 譯して緣覺といふ。緣によつて覺るといふ意である。小乗の教へによつて覺を得たる者に二種ある。其の一を聲聞といひ其の二を緣覺といふ。聲聞とは親しく佛の教へを聽聞して人生の無常を感じ、煩惱を掃ひ盡したものである。緣覺とは日々遭遇する事物に佛の教へを思ひ合せて、覺を得るものをいふのである。○世主 梵天王が世界を創造したといふ傳説によつて、之を世主と呼ぶのである。○之を變じて佛の聲と作し 如何なる者の聲でも菩薩の力が之に加はると、忽ち變じて佛の聲となるのである。世法を離れて別に佛法があるのではない。

此の一段に於て佛菩薩の具へらるゝ不可思議解脱の力が最も精彩ある文字を以て描き出されてあるのは、前段と對照して殊に興味多く感ぜらるゝのである。前段には法を求むるに就ての

心得が最も精細に説かれてある。眞に法を求めんとする者は如何なる艱難をも凌ぎ、如何なる困苦をも忍ばんとする決心がなければならぬ。『法を求むる者は軀命を食らず』とは即ち此の意である。華嚴經には

若し一句も未曾聞の法を聞きて大歡喜を生ずれば、三千大千世界の中に滿つる珍寶を得るに勝れり。

とある。又これは前にも引いた語であるが、無量壽經には
設ひ大火の三千大千世界に充滿すること有りと、要らず當に此を過ぎて此の經法を聞き、歡喜信樂し受持讀誦して説の如くに修行すべし。

とある。斯く勤めて道を求むるの念によつてのみ、眞の覺が得らるゝのである。此の確とした覺悟がなくては、假令萬卷の書を読むとも、終に得る所なかるべきである。大乘玄論の中に道に於て克獲する所無く、小兒の戲論の爲の如きのみ。

とあるのは能く當つて居る。自ら大乘の法を學ぶと稱する者にも戲論の弊に陥るものが極めて多い、吾等は尤に自ら戒めなければならぬ。宋の程子が

今人書を読むことを會せず。論語を読むが如きも、未だ讀まざる時は是れ此等の人。讀み了り

て後も又只是れ此等の人。便ち是れ曾て讀まざるなり。
といつたのは頗る痛快である。如何に多く讀むも又多く聽くも曾て讀まず曾て聽かざる人にして終るものが多いのである。

勤めて大法を求むるといふ念が最も大切である。釋尊の如きも有らゆる苦を冒して學ばれたるが故に成佛を得られたので、前に引いた無量義經中の諸菩薩の語にも、特に此の點が力說せられてある。釋尊御自身にも其の經驗を語つて、

情に妙法を存せるが故に身心懈倦無かりき。普く諸の衆生の爲に大法を勤求して、亦己が身及び五欲の樂の爲にせず。(法華經)

と仰せられた。其の大法を勤求するのは實に衆生を救はんと志に出るものであるから、如何なる困苦にも届することが無かつたのである。これは戲論の徒の到底窺ひ知る所ではない。されば最勝王經には

實際の性には戲論有ること無し。唯だ獨り如來のみ實際の法を證したまへり。

とある。實際の法を證するとは即ち絶對の理を覺つたことをいふのである。此の覺りの中から一切衆生に對して自在に法を説き、救護を與へらるゝ所の不思議の力が生み出さるゝのである。

今此の段に於て維摩詰が説く所の不思議解脱なるものも要するにこれである。

凡そ物質には大小遠近廣狹の別があるけれども、心の力は其等の制限を超越する。吾等は僅かに五尺の身を以て狭い地面に住んで居る。高く飛び上らうとしても限りがある、疾く走らうとしても限りがある。併し吾等の心は果てもなく遠い空の上までも翔ることが出来る。吾等の生命は百年に足らずして盡きる。併し吾等は極めて遠い昔から極めて遠い後の世のことまで想ひ見ることが出来る。易の文言に

夫れ大人は天地と其の徳を合し、日月と其の明を合し、四時と其の序を合し、鬼神と其の吉凶を合し、天に先ちて天違はず、天に後れて天の時を奉ず。天且つ違はず況んや人に於てをや、況んや鬼神に於てをや。

とあるが、眞に能く精神の力の偉大なることを説き現はしたものである。今此の一段に於て維摩詰の説いた所も能く之と一致して居る。須彌山を芥子の中に入るゝといふも、四大海の水を一毛孔の中に入るゝといふも、若くは七日を演べて一劫と爲すとか、一劫を促めて七日と爲すとかいふことも、時間と空間との支配より超越したる精神の力の靈妙なることを知る者には能く理解し得らるゝことである。固より物質的の欲望より外に何も知らぬ凡夫には到底解し得ら

れぬことであるが、『唯だ度すべき者は』云々とある通り、大乘の教へを學んで成佛を期する者は必ず能く解せらるべきことである。

又菩薩が十方の佛土の莊嚴のさまを盡く集めて衆生に示し、また十方の衆生が佛に供養する種々の有様をも集めて示すとあるが、是れも佛菩薩の説法の力が如何に大なるものであるかを知る者には能く解し得らるゝことである。佛の住したまふ所が非常に清淨にして且莊嚴であることは多くの經典の中に説かれてあるが、これは佛の具へたまふ御徳の然らしむるものである。此經の最初の佛國品に於て釋尊の教へられた所にも

淨土を得んと欲せば當に其の心を淨くすべし。其の心の淨きに隨ひて則ち佛土淨し。

とある通り、心が世界を作るのである。十方の世界に如何に多くの佛が在すとも、其の具へたまふ所の徳は固より同一であるべきである。隨て其の住みたまふ所の淨土の莊嚴なるさまも亦同様であるべきである。又衆生が佛に供養するのは前にも度々いつた通り、佛に歸依する心を現はすのである。佛に歸依するものは其の具有せる佛性が之によつて次第に開發せられ、次第に佛の境界に近づき得べきで、十方世界の衆生は無量無限であつても、其の佛に歸依する心は固より同様であるべきである。苟くも佛法を學ぶものは此の事をシツカリと心に銘して置かな

ければならぬ。

十方佛土の中には唯だ一乘の法のみ有り、二も無く亦三も無し。(法華經方便品)

と釋尊も明言して居らるゝのである。絶對の眞理に二種も三種もあり得べきではない。諸佛の説法に異同があらうとも其の歸する所は共に一でなければならぬ。されば吾等が一佛に歸依することは即ち十方世界の諸佛に歸依するのである。吾等は一佛に對して絶對に歸依して宜い。さすれば十方世界の諸佛は共に之に對して満足せらるゝに違ひない。

我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり、是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり。(法華經寶塔品)と釋尊の仰せられた所は能く此の意を現はして居る。高德の菩薩の説かるゝ所は固より佛の御心と能く一致して居るのであるから、其の教へを學ぶことによつて、十方の佛土の莊嚴なる有様も、又多くの衆生の佛に歸依する心をも知り得べきである。

次に菩薩が種々の身を現はすといふことが説いてあるが、是れは其の教化の力の非常に偉大であることを示すのであつて、他の經にも例のある事である。例へば法華經の普門品には觀世音菩薩が衆生を教化せらるゝ様を説かれて、

若し國土の衆生有りて、佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩即ち佛身を現じて爲に法

を説き、辟支佛の身を以て得度すべき者には、即ち辟支佛の身を現じて爲に法を説く。云々とあつて、所謂三十三身を現ずることが挙げられてある。斯く三十三身をも現ずることの出来るのは、其の具有せらるゝ大慈悲の力に依るものである。此の普門品の最初の所に

無量百千萬億の衆生有りて諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて一心に名を稱せば觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて、皆解脱することを得しめん。

とある。其の音聲を觀ずるとは、其の音聲によつて其の人の苦惱を知り、又其の人の解脱を求むる念を知ることである。何人に對しても此の如き心を以て臨むのが即ち大慈大悲である。斯る大慈大悲の力あるが故に、其の一切衆生に與へらるゝ所の救護の働きが自由自在なのである釋尊も

諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説きにき。(無量義經)

と仰せられた通り、人々の性質氣風はそれ〴〵に皆ちがひ、其の苦しみも亦それ〴〵に異なる所がある。故に一々之を教へて其の惑を除き其の苦を脱せしめんとするには種々無量の方が必要である。三十三身を現ずるといふも要するに、衆生の性質機根に應じて、それ〴〵に適當なる教へを與へらるゝことに外ならぬのである。斯く自在の善巧方便は皆大慈悲心より發し來る

ものである。今此處で維摩詰のいふ所も全くそれと同じ意である。

又十方世界の有らゆる聲を皆變じて佛の聲と作さしむるといふも、眞に貴い教化の力を形容して妙を極めたものといふべきである。吾等は日々に出逢ふ種々の事物を皆平凡なものに思つて居るけれども、それは吾等の心が愚痴であるからである。吾等の心が進歩しさへすれば何事にも一々皆深い教訓を味ひ得ぬことはない。前にも度々蘇東坡のことをいつたが、東坡が廬山で作つた詩の中に

溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身にあらずや。

といふ句がある。廣長舌とは佛の説法のことである。清淨身とは即ち佛身である。溪の水聲は即ち佛の説法の聲と思はれ、山の姿はそのまゝに佛の御姿と思はれたのである。斯る心をもつて一夜を廬山の僧院に明したのであるから、非常に得る所があつたものと見えて、其の續きの句に

夜來八萬四千の偈、他日如何を擧げて人に似さん。

とある。此の一夜に於て夥しい偈を聞いたやうに思はれて、心は頓に清淨になつたのであるが之を人に對して説かんとしても説き得られまいといふのである。獨り廬山の中のみならず、心

一つの持ちやうによつては、日々遭遇する一切の事より一々に皆貴い教訓を受くことが出来る筈である。

維摩詰のいふ所の如き高德の菩薩ならば、必ず衆生を教化して、如何なる聲を聞いても皆佛の聲を聞くが如くに感じ、如何なる事に出逢つても皆之より大なる教訓を受くことの出来るやうな境界に到達させることが出来たであらう。吾等が佛菩薩の教へを聴くのは唯だ之を實行して、吾等自身も佛菩薩の境界に進まんが爲である。されば聽き得たる所を一々身に行ひ、種々の出来事によつて自ら鍛へ自ら修め、一步一步と堅實なる歩を進めて行くことに努めなければならぬ。されば天台大師の『法華玄義』の中には

夫れ行は進趣に名くるも智にあらざれば前まず。智解の行を導くは境にあらざれば正しからず。智目行足にして清凉池に到る。

といつてある。進趣とは進んで佛の境界に到達せんがために勉め勵むことである。それが眞の修行といふものである。併し進むのには確とした目標がなければならぬ。吾等が佛の遺したまへる教法を學ぶのは即ち此の目標を知らんが爲である。學ぶこと久しければ漸く智を成ずることが出来る。其の智によつて導かれて行が進んで行くわけである。併しながら其の知り得た

る所を自己の日常の生活に於て一々實行して見なければ、正しく之を悟ることは出来ぬのである。智を目と爲し行を足と爲し、能く明かに見て又能く確かに歩み、一步一步と凡夫の境より遠ざかり行くべきである。その行きつく所は清凉池である。清凉池とは即ち佛の境界に外ならぬ。吾等は各自に職業をもつて居るから、四六時中佛を拜し、佛の教法を學んで居るわけには行かぬが、それは少しも悔むべきことではない。日々に出逢ふ所の實社會の出来事の中から絶えず佛の教訓を聴くやうに自ら努めさへすれば宜いのである。但し斯うなるまでは固より多くの修行を重ねなければならぬ。此の一段の維摩詰の説を深く味ふべきである。

是時大迦葉聞説菩薩不可思議解脫法門。歎未曾有。謂舍利弗。譬如有人於盲者前。現衆色像。非彼所見。一切聲聞。是不可思議解脫法門。不能解了。爲若此也。智者聞是。其誰不發阿耨多羅三藐三菩提心。我等何爲永絕其根。於此大乘。已如敗種。一切聲聞聞。是不可思議解脫法門。皆應號泣聲震三千大千世界。一切菩薩應大欣慶頂受此法。若有菩薩。信解不可思議解脫法門者。一切魔衆無如之何。大迦葉説是語時。三萬二千天子皆發阿耨多羅三藐三菩提心。

(是の時)に大迦葉、菩薩の不可思議解脱の法門を説くを聞きて未曾有なりと歎じ、舍利弗に謂へらく、譬へば人有りて盲者の前に於て衆の色像を現するも、彼の見る所に非るが如し。一切の聲聞の是の不可思議解脱の法門を聞きて解了すること能はざるも此の若しと爲す。智者是を聞きて、其れ誰か阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらん。我等何すれぞ永く其の根を絶ち、此の大乗に於て已に敗種の如きや。一切の聲聞は是の不可思議解脱の法門を聞きて、皆應に號泣し、聲三千大千世界に震ふべし。一切の菩薩は應に大に欣慶して此の法を頂受すべし。若し菩薩有りて不可思議解脱の法門を信解せん者は、一切の魔衆之を如何ともすること無けん。大迦葉是の語を説ける時、三萬二千の天子皆阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。

維摩詰のいへる所は菩薩道の貴むべきことを説き悉して眞に遺憾なきものであつた。迦葉は之を聞いて深く感歎した。菩薩が此の如き不可思議の力を具ふことは決して偶然ではない。斯る不思議の力を具ふるに至るまでには、菩薩は非常なる努力を積んだのであつて、是れは畢竟其の努力によつて得たる所の當然の報に外ならぬのである。其の努力は前段に委しく述べてある通り、専ら佛の御心を以て吾が心と爲し、佛の化導を賛けて一切衆生を救護すべき力を具へんが爲の努力である。決して自己一身のことを考へて居たのではない。今迦葉は此の事に思

ひ到つて非常に感動したのである。孟子は君子たる者は外部より如何なる迫害を受けても、更に之を以て憂とせぬことを説いて、君子は別に憂ふる所があるといひ、

君子は終身の憂有りて一朝の患無し。乃ち憂ふる所の若きは則ちこれ有り。舜も人なり、我も人なり。舜は法を天下に爲し、後世に傳ふ可し。我はなほ未だ郷人たるを免れず。是れ即ち憂ふ可きなり。之を憂へば如何せん。舜の如くせんのみ。……仁に非れば爲すこと無く、禮に非れば行ふこと無し。一朝の患有るが如きは君子は患へず。

といつたが、此の如くに高く志を立つることが學者に取つては最も大切な點である。菩薩は佛の境界に到達せんことを志とするものである。其の志極めて高さ故に、如何なる困苦をも冒すことが出来るのである。迦葉は此の點に就て大に悟る所があつた。故に言を盡して之を讚歎するのである。既に之を讚歎せる以上は、自ら之を實行せんと決心せることは勿論の義である。○舍利弗に謂へらく 迦葉は舍利弗と共に、佛の十大弟子中でも優れた人として知られて居たけれども二人共に未だ菩薩道を學んでは居なかつたのであるから、此に至つて迦葉は其の志を舍利弗に告げ、共に大乘を學ばうとの意を示したので、此の如きを眞の益友といふべきである。○解了すること能はざる 聲聞は一切衆生に對する慈悲の心が缺けて居る。以上維摩詰の説い

た不可思議の行は要するに慈悲の力の現はれたものに外ならぬのであるから聲聞には解し得られぬ筈である。○智者 眞の智とは佛の御心を知るものである。佛の御心を知るものは、自ら一切の事物の眞相を知り得べきである。○永く其の根を絶ち 慈悲の心が缺けて居ては佛と成るべき種が無いのであるから、如何にしても維摩詰のいつたやうな働きは出来ぬに極つて居る。○皆應に號泣し、聲三千大千世界に震ふべし 自ら小乗によつて覺を得たるに安んじて居るのを、深く悔む悲むのである。併しながら僧肇が『乖く所の重きが故に、假に號泣すべしといふのみ。二乗の憂悲永く除かるれば尙ほ微泣だに無し、況んや三千に震はんや』といつたのは道理である。小乗の徒と雖も更に志を立て大乘を學び、菩薩道を勵んで怠らなければ、後には維摩詰の説いたやうな不思議な力をも具へ得べきである。徒らに號泣するは愚の至である。○一切の魔衆 菩薩の高徳なる者は魔を降すべき力をもつて居るのであるから、魔衆に惱まざるゝことのあるべき筈はない。

佛法を學ぶものは、前にも度々いつた通り、必ず佛の境界に到達し、一切衆生を救ふべき力を具ふるに至らんことを理想としなければならぬ。其の理想が實現せらるゝまでは決して努力を緩めてはならぬ。若し多少の智解を得たりとも、之を以て自ら足れりとして、更に進んで求

むる心の無いものは其の一生を誤るのみならず、自ら其の周圍の人々に感化を及ぼして、懈怠の習はしを作らせることになる。其の罪まことに輕からぬものである。孔子は自ら其の志とする所を語つて、

其の人と爲りや發憤して食を忘れ、樂みて以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らず。

といひ、更にまた

我生れながらにして之を知る者にあらず、古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり。

といひ、なほ又

抑も之を爲して厭はず、人に教へて倦まざるは則ち爾りといふ可きのみ。

ともいはれた。敏にしてとは即ち懈怠の無きことである。孔子は自ら終生此の如くに努めて止まなかつたればこそ、其の弟子達も皆孜孜として怠らなかつたのである。佛法を學ぶ者は固より斯くなければならぬ。

小乗の教へと雖も固より佛の説きたまへる所であるから、貴い教へには違ひない。併し小乗のみを學んで自ら足れりとするは、佛の御心と一致せぬものである。佛が小乗を説いて吾等をして貪瞋痴等の諸惑を除くことに力を用ひしめられたのは、更に進んで一切衆生を救護すべき

者とならせたいと思召されたからである。自ら他に對して求むる所の無い者にして、初めて他を救ふことに力を盡し得らるゝのである。然るに自ら諸惑を除き盡して、清淨なる生活を爲し得るに満足して、更に進んで大乘を學ばんといふ志の無いものは、切角佛法を學んだかひの無い者であるから、華嚴經には

二乗は無爲廣大の深坑に墜つ。

といひ、又

非器の衆生は大邪見貪愛の水に溺る。

といつてある。非器とは佛法を弘むべき器にあらざる者のことである。衆生の心は貪愛の念に充ち、其の貪愛に溺れて多くの罪を作るのである。聲聞と緣覺とは斯る過失を免れて、所謂無爲の境界である。無爲とは求むる所なく、貪る所なく、清淨の生活を以て自ら安んずることである。併し之を以て自ら足れりとして、世の爲にも人の爲にも力を盡さぬから、いつ迄も佛の境界に進むことは出来ぬ。即ち『無爲』といふ深い坑の中に墜ちてしまつて、出ることの出来ぬものである。又大集經には

二種の人有り必ず死して活さず、畢竟して恩を知り恩を報ずること能はず。一には聲聞、二

には緣覺なり。

とある。何人も一切衆生の恩を受けて居る。又佛法を學ぶ者は特に佛の恩を受けて居る。然るに自ら一身を潔くして、一切衆生の爲に力を盡さず、佛の化導を賛くことも出来なければ恩を知らず、恩を報ぜぬものといふべきである。又方等陀羅尼經には、文殊が後に必ず佛と成るべきことを釋尊より許されたのを（之を受記といふのであるが）舍利弗が喜んだのに對して、

文殊は

枯樹の如きは更に華を生ずるや不や。山水の如きは本處に還るや不や。折れたる石は還りて合ふや不や。焦れる種は芽を生ずるや不や。

と問ひ、舍利弗が否と答ふるを聞いて、文殊は彼に

若し得べからずんば、云何ぞ我が菩提の記を得たるを聞きて心に喜歡を生ずるや。

といつたと記してある。即ち聲聞や緣覺は決して佛と成れぬといふことを言を極めていつたものである。

斯く小乗の徒は佛と相距ること甚だ遠いものであるから、菩薩の不思議の力を具ふることを聞いて、自ら遠く及ばぬことを知り、號泣するといふも道理である。併しながら斯くまでに自

己の足らぬことを深く知れる上からは、必ずや進んで大乘を學び、菩薩道を勵むであらうからやがては一切衆生を救護すべき力も具はるやうになるであらう。

前心惡を作ること雲の日を覆ふが如く、後心善を起すこと炬の暗を消すが如し。

と未曾有經にある。又

百年の垢衣も一日に於て瀚ひて鮮淨ならしむべきが如く、是の如く百千劫の中に集むる所の諸の不善の業も、佛法の力を以ての故に善く順ひて思惟せば、一日一時に於て悉く能く消滅すべし。

とは大集經の中に説かるゝ所である。此等は未だ佛法を學ばずして多くの罪を犯した者が懺悔した場合をいふのであるが、佛法の中に於て小乗より大乘に移るものも亦此の如くであるべきものである。大乘を學んで眞の智慧が心中に輝くやうになれば、一切衆生を救護する所の大善事を爲すことが出来る。さすれば今迄いかに多くの罪を作つて居ても、之によつて償ふことは無論出来る筈である。されば觀普賢經には次の如くに説いてある。(此の語は前にも引いたが、此處に極めて適切であるから再び引く。)

若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如く、慧日能く消除す。

心中に智慧の光りが輝いて來れば、衆罪は霜露の消ゆるが如くに消え去るべきである。迦葉等も皆今より此の大なる悦びを味ひ得べきことは明かである。

爾時維摩詰語大迦葉。仁者。十方無量阿僧祇世界中。作魔王者。多是住不可思議解脫菩薩。以方便力。教化衆生。現作魔王。又迦葉。十方無量菩薩。或有人從乞手足耳鼻。頭目髓腦。血肉皮骨。聚落城邑。妻子奴婢。象馬車乘。金銀琉璃。磈磈。珊瑚琥珀。眞珠珂貝。衣服飲食。如此乞者。多是住不可思議解脫菩薩。有威德力故。現行逼迫。示諸衆生。如是其堅固。所以者何。住不可思議解脫菩薩。有威德力故。現行逼迫。示諸衆生。如是難事。凡夫下劣。無有力勢。不能如是逼迫菩薩。譬如龍象蹴蹋非驢所堪。是名住不可思議解脫菩薩智慧方便之門。

(爾の時に維摩詰大迦葉に語るらく、仁者、十方の無量阿僧祇の世界の中に魔王と作る者、多くは是れ不可思議解脫に住せる菩薩なり。方便力を以ての故に衆生を教化し、現じて魔王と作る。又迦葉、十方無量の菩薩に、或は人の從ひて手足耳鼻、頭目髓腦血肉皮骨、聚落城邑、妻子奴婢、象馬車乘、金銀琉璃、磈磈、珊瑚琥珀、眞珠珂貝、衣服飲食を乞ふもの

有らんに、此の如く乞ふ者多くは是れ不可思議解脱に住する菩薩なり。方便力を以て往きて之を試み、其をして堅固ならしむるなり。所以は何、不可思議解脱に住する菩薩は威徳力有り、故に逼迫を行じて諸の衆生に是の如き難事を示す。凡夫は下劣にして力勢有ること無し。是の如く菩薩を逼迫すること能はず。譬へば龍象の蹴踏するは驢の堪ゆる所に非るが如し。是を不可思議解脱に住する菩薩の智慧方便の門と名くと。

此に至つて維摩詰の説は更に一步を進めたのである。人を教化するには種々の方法があつて或は之を奨め或は之を戒め、或は之を勵まし、或は之を鍛ふる等其の人に應じ、その場合に應じて變化窮まりなかるべきである。彼を導いて其の窮境を服せしむるは固より大なる恩恵であるが、時としては彼を窮境に陥れて其の自ら發憤するを促すことも大なる教訓となる場合がある。其の窮境を脱し得て後に之を顧れば、却て其の困苦災厄に對して感謝しなければならぬと感ずるであらう。獨逸のクルツプ製鐵所を創設したる初代クルツプは多くの負債をして、其の事業が未だ充分發達せぬうちに死んだ。二代目クルツプは多病の少年の身で父の後を嗣ぎ、その夥しい負債に惱みながら銳意以て其の事に當り、終に彼の大鐵工所の基礎を固くすることが出来た。彼は晩年に至つて其の半生を回顧し『少年の身で父に別れたことも、病弱であつたこ

とも、父が多くの負債を遺して行つたことも、盡く自分を勵まし自分を戒めて、事業の大成を期せしむる大なる力であつた。自分は今日から顧みて、凡てに對して唯だ感謝するの外はない』といつた。此の一言は能く大乘佛教の意と一致するものといふべきである。

維摩詰は高德の菩薩が種々の身を現じて、一切衆生のために法を説くことを語つたが、此に至つて更に其の教化に別の一面のあることを語つた。それは彼に迫害を興へ、彼を窮地に陥れて、彼をして發奮せしめ努力せしむることである。それは『方便力を以ての故に衆生を教化する』のであるといひ、又『方便力を以て往きて之をして堅固ならしむる』のであるといひ、又之を『菩薩の智慧方便の門と名く』といつた。眞にこれは深く味ふべき言である。吾等は一切の障礙を『菩薩の智慧方便』であると解し、此の障礙に打克つことに全力を注ぐべきである。今後の世間に立つ者は特に此の心懸けがなければならぬ。

○魔王と作る者 前に迦葉は不可思議解脱を得たる菩薩を稱めて『一切の魔衆之を如何ともすること無けん』といつた。それは悪魔と佛菩薩とを相對立したものと考へての言である。因て維摩詰に更に一步を進め、其の魔なる者も佛の化導を贊くるものであると説き、大乘の教への洪大なることを一層深く感銘せしめんとするのである。○往いて之を試み 大乘を學ぶ昔にし

て布施の大切なことを知らぬものは無い。併しながら屢々乞はれてもなほ嫌厭の念を生ぜぬやうになるのは容易でない。故に之を試みんとするのである。○堅固ならしむ 布施は慈悲心の現はれたものに外ならぬ。布施行が徹底的に行はるゝ人は即ち慈悲心の深い人であつて、菩薩道に於て缺くる所なきものとも稱せらるべきである。併しそれは多くの鍛錬を経て初めて出来ることである。法華經には『其の志念堅固にして大忍辱力有り』とあるが、此の如くであれば眞の布施行が出来る。○威徳力 威とは他に大なる感化を及ぼすことをいふのである。高德の菩薩は必ず、其の周囲の人々に大なる感化を及ぼすことが出来る。これ其の威徳力である。○諸の衆生に是の如き難事を示す 羅什は之を説明して『其の惜むこと無き心を盡して具足堅固ならしめ、また衆生をして其の堅固なることを知らしめ、また其をして自ら堅固なることを知らしむ』といつた。布施の行を徹底的に實行するのは大なる難事であるが、それが難事であるだけに其の功德も莫大である。故に菩薩が特に或る人に壓迫を加へて強めて布施を爲さしむことは難さを人に強ゐるもので、一見して甚しく無慈悲のことのやうであるが、實は彼をして大なる善根を積ましむるのである。又一切衆生に此の如き難事を敢てするのが實は大功德であることを知らしむる所以である。且其人自身にも吾が行の堅固なることを知つて大なる満足を感

じ得べきである。○菩薩を逼迫すること能はず 凡夫は大なる力のない者であるから、他に逼迫を加へやうとしても、大なる逼迫は加へられぬ。凡夫の加へるくらゐの逼迫ならば、苟くも菩薩道の實行に志す者にして堪へられぬといふことはない。然るに菩薩は彼に大なる逼迫を加へ、彼をして大なる難を忍ばしむることが即ち大なる慈悲であると知るが故に思ひ切つて大なる逼迫を加へることが出来るのである。○智慧方便の門 智慧が最もすぐれて居るから、此の如き方便を案じ出すことも出来るのである。僧肇は『智慧は遠く通じ方便は近く導く』といつた。

或は惡魔となつて現はれ、或は布施を強要して苦を興ふるものを盡く是れ高德の菩薩が形を變へて現はれたものであると解するに至つて、菩薩の有する不可思議解脱の力が全く遺憾なく説き現はされた。以上の文を讀み行く間に、思ひ合さるゝのは釋尊が提婆達多の恩を稱へられ、善知識と稱せられたことである。法華經の提婆品には釋尊が前生に於て檀王といふ名君であつて、阿私仙人に事へて修行せられたことが説かれてある。其の大體のことは前にも引用した。然るに釋尊は此の事を語られて後更に言を改めて、

佛諸の比丘に告げたまはく、爾の時の王とは則ち我が身是なり。時の仙人とは今の提婆達多

是なり。提婆達多だいばだつたが善知識ぜんちしきに依るが故に我をして六波羅蜜はちみつじ慈悲喜捨ひきしや…神通道力じんつうだうりきを具足ぐそくせしめたり。等正覺とうしやうかくを成じて廣く衆生しゆじやうを度すること、提婆達多だいばだつたが善知識ぜんちしきに因るが故なり。

と仰せられた。前生に於ける檀王と阿私仙人とは師弟の關係であつた。今生に於ける提婆達多だいばだつたは佛法の怨敵である。然るに釋尊は其の怨敵たる提婆は前生に於て師であつた阿私仙人の再生であると仰せられたのである。前生に於て阿私仙人に仕へて薪を拾ひ水を汲み、種々の苦行をしたるが故に佛智を成就したのであるが、今生に於て提婆の迫害を受くることも全くそれと同じ意義をもつて居る。提婆の迫害が絶えずあつたが爲に心は愈々堅固になり、廣く一切衆生を救ふ所の大功徳を立て得られたのであるから、提婆の恩恵は前生に於ける阿私仙人に譲らぬものである。故に釋尊は之を善知識と稱せられたのみならず、此の功徳によつて來世には佛に成るであらうとまで仰せられた。釋尊の如くに寛い御心をもたるゝことは、吾等凡夫の到底及びもつかぬ所であるけれども、吾等も共に仰いで之を師としなければならぬと思ふ。吾等が如何なる魔障にも屈せず、吾等の道を貫いて行くことが出来るならば、その時初めて『魔と見たのは魔ではなくて、吾が善知識であつた』と思ひ知るであらう。

又菩薩道を學ぶ者をして布施を行じ善根を積ましむるために種々の壓迫が加へらるゝといふ

例は多くの經論に出て居るのであるが、今最も有名なる一例を引かう。これは賢愚經に出て居るものである。遠き昔に尸毗王といふ名君があつて慈悲の念厚く、菩薩道を行じて缺くる所なき人であつた。時に毗首羯摩びしうかま（これは帝釋天に仕へ、工藝を掌る所の神と傳へられて居る。）が此の王の事を悉く知つて帝釋天に申上げた。帝釋天は之を聞かれて毗首羯摩に向ひ、是の若き菩薩ならば當に先づ之が至誠たるや否やを試むべし。汝は化して鴿かと爲れ、我は變じて鷹たかと爲り、急に汝が後を追ひ、相逐ひて彼の大王の坐所に至りて便ち擁護ようごを求め、此を以て之を試みば眞偽を知るに足らん。

といはれた。毗首羯摩は『彼の如き善人を苦むることは宜くあるまい』といつたが。帝釋天は之に答ふる爲に偈を説き

我亦惡心われまたあくしんにあらず。眞金の試むべきが如く、此を以て菩薩を試み、至誠たりや否やを知らんとす。

といはれた。茲に於て毗首羯摩は化して鴿となり、帝釋天は變じて鷹となり、鴿を捕へて食はんとするさまで其の後を追うた。鴿は恐れて王の宮殿に入り、王の背後に隠れた。鷹は進んで王の前に至つて其の鴿を求めたが、王は之を拒絶して

吾本誓願すらく、當に此に來りて我に依るものを救ふべしと。我終に汝に與へず。

といつた。鷹はなほ王に迫つて『今我は甚しく飢ゑて居る、その鵠を食はなければ死ぬより外はないのである』といひ、

大王今一切を救はんといふ。若し我が食を斷てば我が命濟はるゝを得ず。我の類は一切にあらずとするか。

と詰つた。王は理に責められて、『然らば鵠の肉でなくても他の肉でも宜いのではないか』と問うた。鷹は『死んだばかりの未だ熱氣の失せぬ肉でなければ食はぬ』と答へた。

王は自ら其の身の一部分を割いて鵠に代へんことを決心し、之を鷹に問うたが、鷹は『それでも宜しい』と承知した。王は自ら刀を取つて其の股の肉を割き、之を鵠の代りに充てやうとしたが鷹は『此の肉は鵠の全身よりも少い』といつて肯かなかつた。王は又臂の肉を割いて之に加へたが、それでもまだ足らなかつた。王は臣下に命じて秤を持ち來らせ。その秤の一方の皿に鵠を乗せ、自ら他の一方の皿に上り、鵠の目方に相當するだけ自分の身の肉を切り取らせることにした。王は傷を幾つも負うた爲に出血が甚しく殆んど氣絶しやうとしたが、自ら其の心を責めて、

我久遠より來未だ曾て福を爲さず。今は是れ精進して行を立つるの時なり。懈怠の時にあらず。

といひ、自ら勵まして秤の一方の皿の上に身を横たへた時に、非常なる歡喜を覺えた。此の時天地之が爲に動いたとある。即ち經文には

是の時天地六種に震動し、諸天の宮殿皆悉く傾搖す。乃至色界の諸天同時に來下し、虚空の中に於て菩薩が難行を行じ、軀體を傷壞して心に大法を期し、身命を顧みざるを見て、各共に啼泣して涙は盛雨の如く、又天華を雨らして以て供養す。

とある。其の時に帝釋天は本の姿に復して王の前に進み、其の難行に堪へたことを稱讚して、さて後

今是の如くに及び難き行を作して、何等を求めんと欲するか。

と問うた。王は之に答へて
我が求むる所は三界尊榮の樂を期せず、作す所の福業を以て佛道を求めんと欲す。

といつた。此の如き善業の報により、王は後に佛と作ることを得たとある。
此の傳説を文字通りに解釋すれば隨分不合理のやうでもある。或る生物學者が之を批評して

『佛教の中には此の如き不合理の説が多いから、科學的智識の普及した今日には到底行はれぬ。鴿の代りであるから股とか肱とかの肉を割くのですんだが、モット大きな動物の代りであつたら、全身の肉を割いて終に死んでしまつたであらう。貴い王の身として一の動物を救ふために身命をすてるといふのは愚の至である。それが慈悲だといふならば、慈悲ほど愚なことはない』と評したことがある。これは一應尤もな説であるが、此の如き寓話を文字通りに解するのが抑々間違ひである。是れは慈悲の心の貴いことを示さんが爲に極端なる例を取つたので、凡ての人をして此の例の如くに實行せしめやうといふ意ではない。一の鴿といふ小鳥を救ふ爲にさへ其の身を割くことを惜まぬ人ならば、一切衆生を救ふ爲には如何なる艱苦をも辭せぬであらう。此の心が即ち成佛の因となるのである。

さて以上の問答によつて菩薩道の何者かを明かにすることを得たが『菩薩は衆生を救護することを志とする』といふ以上は、衆生なるものに就て徹底的に知つて居なければならぬ筈である。衆生を知らずして衆生を救ふことの出来やうわけは無い。又衆生は修行次第で菩薩ともなり、佛ともなり得らるゝものであるから、決して之を輕しめてはならぬ。因て文殊は更に維摩詰が衆生を如何に觀ずるかを問ひ、維摩詰が之に答ふることになる。それが即ち次の觀衆生品

である。

觀衆生品第七

一切衆生を教化して、其の凡夫の境界を脱することを得しむることが、即ち佛菩薩の志である。一切衆生悉く佛性ありと雖も、佛菩薩の教化に依らずして其の佛性を長養し開發することは出来ぬ。一切衆生は切角に貴い佛性を具へて居ながら之を自覺せず、佛とか菩薩とかいへば全く自分達と類のちがふものであると思ひ、唯だ之を畏れて居る。羅什はその有様を譬喩を以て説いて、

一の癡人路を行きて遇ま遺たる匣を見る。匣の中に大鏡有り。匣を開き鏡を觀て自ら其の影を見る。謂へらく是れ匣の主なりと。稽首し歸謝して之を捨て走るが如し。

といつた。如何にもこれは適切なる譬喩である。佛も菩薩も畢竟吾等の共に本來具有せる佛性を開發せしめたものに外ならぬことを知らず、唯だ之を畏れ憚つて、自ら佛となり菩薩とならうとは努めぬのである。又羅什は多くの人が何等かの困苦にあふと忽ち道をも教へを忘れて、淺ましい行ひをすることを、同じく譬喩を以て説いて

一の盲人道を行く中に遇ふ國王の子に遇ひ、堅く抱きて捨てず。須臾にして玉の官屬至りて極めて楚痛を加へ、強逼して之を奪ひ、然る後に放捨するが如し。

といつた。國王の子を抱いて捨てぬといふは貴い佛法を學んで之を信ずるに喩へたのである。官屬の爲に苦を與へられて其の王子を捨つるといふは、世間の迫害にあつて、其の信仰を擲ち去るのに喩へたのである。是れが凡夫の常態である。併しながら凡夫の中でも信心の強いものは次第に凡夫の境界を離れ、聖者の列に入ることが出来るのである。菩薩たるものは凡夫の中から一人も多く此の如き人を出すやうに、常に力を用ゐて其の教化に當らなければならぬ。此の觀衆生品に於ては其等の問題に就て極めて精細なる證明が加へられてある。

爾時文殊師利問維摩詰言。菩薩云何觀於衆生。維摩詰言。譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生爲若此。如智者見水中月。如鏡中見其面像。如熱時燄。如呼聲響。如空中雲。如水聚沫。如水上泡。如芭蕉堅。如電久住。如第五大。如第六陰。如第七情。如十三入。如十九界。菩薩觀衆生爲若此。如無色界色。如焦穀牙。如須陀洹身見。如阿那含入胎。如阿羅漢三毒。如得忍菩薩貪恚毀禁。如佛煩惱習。如盲者見色。如入滅盡定。出入息。如空中鳥跡。如石女兒。如化人起煩惱。如夢所見已寤。如滅度者受

身。如無烟之火。菩薩觀衆生爲若此。

(爾の時に文殊師利、維摩詰に問ひて言く、菩薩云何か衆生を觀ずると。維摩詰言く、譬へば幻師の所幻の人を見るが如し。菩薩の衆生を觀ずること此の若しと爲す。智者の水中の月を見るが如く、鏡中に其の面像を見るが如く、熱時の燄の如く、呼聲の響の如く、空中の雲の如く、水の聚沫の如く、水上の泡の如く、芭蕉の堅さが如く、電の久しく住するが如く、第五の如く、第六の陰の如く、第七の情の如く、十三入の如く、十九界の如し。菩薩の衆生を觀ずること此の若しと爲す。無色界の色のごとく、焦穀の芽のごとく、須陀洹の身見のごとく、阿那含の入胎の如く、阿羅漢の三毒の如く、得忍の菩薩の貪恚毀禁の如く、佛の煩惱の習のごとく、盲者の色を見るが如く、滅盡定に入るもの、出入の息の如く、空中の鳥の跡のごとく、石女の兒の如く、化人の煩惱の如く、夢に見る所の已に寤めたるが如く、滅度の者の受身の如く無烟の火の如し。菩薩の衆生を觀ずること此の若しと爲すと。)

此の觀衆生品の劈頭に於て、維摩詰が衆生の存在の殆んで無意義なることを説いて居るのは大に注意すべきことである。一切衆生は悉く佛性を具有して居る。併しながら其の自覺をもつて居る者は殆んど稀である。之を自覺しなければ、切角に貴い佛性を具有して居ても何のかひ

も無いことである。自ら貴い佛性を具有せることを覺らず、専ら外界の刺激によつて動かされ、其の境遇によつて役せられ、營々として毎日を送るのが衆生の實狀である。智度論の中に、
夢中には實の善事無きも而も善あり、瞋るべき事無けれども而も瞋あり、怖るべき事無けれども而も怖あるが如く、三界の衆生も亦斯の如し。無明の眠の故に瞋るべからずして瞋り、悲むべからずして悲む。故に知んぬ。心外に別境なしと雖も迷情をもつて妄りに染境を見るのみ。

とあるが眞に適切である。染境とは吾等が煩惱を起す因となるべき周囲の事物をいふのである。吾等は視るもの聴くものに就て一々煩惱を起すのであるが、煩惱の爲に昏んだ心を以て其等の事物に接するが故に何事に關しても其の真相を明かにすることは出来ぬ。斯くして吾等の生涯は意味の分らぬものになつてしまふのである。菩薩は此の如き無意義なる生活の中より吾等を救ひ出さうとして苦心せらるゝのであるが、それは吾等が切角貴い佛性を具有しながら、無意義なる生活に没頭して居ることを哀愍するの情に出るものである。菩薩の慈悲の洪大なることを知らんとするには、先づ菩薩が如何に無意義なる生活の哀むべきことを痛感して居るかを知らなければならぬ。維摩詰が先づ衆生を觀じて殆んど無意義なる存在としたのは、まことに

に深き意義あること、いふべきである。

○幻師 幻術を以て種々の形を現はし、人を驚かすことを業とするものである。○幻人 幻術によつて現はされたる人であるから、その形はあつても其の實體は無い。凡夫の生活も亦其の通りである。何の確信もなく何の主義もなく毎日の業を營んで居るのであるから、言ふことにも爲すことにも何等の根柢もない。唯だ生きて居るといふ形を具へたのみで、全く空虚なる生活である。○智者の水中の月を見る 痴者は水中の月を實の月なるかの如くに思ふから、天上の月を見やうといふ考へもない。智者は天上の月を知つて居る故に、水中の月には心を惹かれぬ。菩薩は凡夫の生活の空虚なることを知る故に、凡ての人を導いて眞實の生活に入らしめんとするのである。○芭蕉の堅き 芭蕉を脆いものゝ例として擧げたのは經論中に多くある。○電の久しく任する 如露如電といふのは世のはかなき物の例として常に用ゐらるゝ語である。○第五の大 地水火風の四大を以て凡ての物が成立つのである。第五の大といふものは實際存在せぬ。○第六の陰 身心一切の作用は色受想行識の五陰を以て盡きて居る。第六の陰といふものは實在せぬ。○第七の情 六情以外に第七の情なるものは實在せぬ。六情とは六根といふも同じもので、即ち眼耳鼻舌身意である。此の六根よりして種々の心情の作用を生ずる故

に之を六情根といひ、或は略して六情ともいふ。○十三入 眼耳鼻舌身意に色聲香味觸法の感ぜらるゝのを十二入といふ。此の外に第十三の入なるものは存在せぬ。○十九界 以上の色聲香味觸法を感じたのみならず之をシツカリと把握し統一するは心の作用である。因て更に眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六を立て合せて十八界といふのである。此より外に第九界なるものは決して存在せぬ。○無色界の色 色とは形體のことである。無色界とは形體なく唯だ精神のみの存在する世界である。○焦穀の芽 穀物を火で焦してしまへば芽の出やう筈はない。○須陀洹の身見 小乗の教へによつて覺を得たる者に四種ある。一に須陀洹、二に斯陀含、三に阿那含、四に阿羅漢で、之を聲聞の四果といふ。果とは修行の結果として覺を得たことである。其の最初のもの須陀洹であつて、譯して入流といふのである。入流とは聖者の流に入ることの出来たものといふ意で、兎も角も凡夫の境界を離れ種々の惑を除き得たものなのである。身見とは小き自己の利害得失を本として一切の事を解釋することである。須陀洹であれば固より身見のあらう筈はない。○阿那含の入胎 阿那含は譯して不來といふ。再び欲界に歸り來らぬといふ意である。阿那含が再び凡夫の胎内に入つて、凡夫として生れて來やう筈はない。○阿羅漢の三毒 阿羅漢は譯して殺賊といふ、煩惱の賊を殺し盡したる者との意であ

る。これは小乗の教へによつて覺を得たるもの、最上位である。されば其の心に貪瞋癡の三毒が影ばかりでも残つて居やう筈はない。○得忍の菩薩の貪恚毀禁 忍とは變化せぬことである。菩薩道を勵むこと漸く久しくして、其の行ひが決して途中で變ることの無いといふ確信を得たものが即ち得忍の菩薩である。此の如き菩薩が或は貪欲とか瞋恚とかの念を起し、或は佛の禁戒に違背するやうなことをする筈はないのである。○佛の煩惱の習 煩惱を除き得ても、煩惱の餘習がまだ心の底に残つて居るものが少くない。併し佛は完全に煩惱を除き盡して居らるゝのであるから、其の餘習たりとも存すべき筈はない。○滅盡定に入る 人生の一切の關係を離れ盡したものをいふのである。即ち少しも心残りなく現世の關係を離れ、宛も薪盡きて火の滅するが如くに入滅した者のことである。○化人の煩惱 化生したるものは一切肉體の欲望と關係のないものであるから、如何なる煩惱も起らう筈はない。○受身 滅度を得たるものが再び凡夫の身を受けやう筈はない。

前の方便品に維摩詰のことを記して『人を度せんを欲するが故に、善方便を以て毗耶離に居す』とある。人とは一切衆生のことである、即ち凡夫のことである。又『四衢に遊びて衆生を饒益す』とも『護世中の導として諸の衆生を護る』ともいつてある。されば維摩詰が衆生に救

護を興へんことを畢生の志願として居たことは明かである。然るに此處では衆生の生活の全く無意味なることを頻りに説いて居る。それは何故であるか。衆生は皆佛性を具へて居る。その佛性を發揮し得て初めて生れて來たかひがあるのである。折角に佛性を具へながら煩惱に役せられて一生を送るのは、生れて來たかひの無いことである。而もそれが殆んど萬人に共通なる生き方である。佛菩薩は之を哀愍するのあまりに彼等を教へて、疾く此の如き無意義の生活より脱出せしめんと力を盡すのであるが、其の之を教へ導くに當つて、些かなりとも彼等が之に對して感謝すべきことを期待したり、或は其の教化に力を盡すがために世間的の地位とか名譽とかの興へらるべきことを期待するならば、眞に慈悲を行ずるものとはいはれぬのである。それでは凡夫を教へ導かうとして、却て自ら凡夫の群に入ることになる。

孔子は三十にして志を立て、王道を當世に行はんがために天下を周遊して明主を求めたが、何れの國にも容れられず、六十八歳にして其の故郷たる魯に歸り、此より七十三歳にして卒するまで、専ら弟子の教育に力を盡し、悠悠自適の中に其の晩年を送られた。

學んで時に之を習ふ亦説しからずや。朋有り遠方より來る亦樂しからずや。人知らずして慍らず亦君子ならずや。

とは其の時の述懐である。眞に其の道を樂むの念と其の自ら學び得たる所を他の者に傳ふることの悦びとより外は何も胸中に存せぬやうである。其の六十八歳苦辛の痕は少しも其の心に留まらず、たゞ悠悠として其の樂みを改めぬのである。程子が之を評して

樂みは説ぶによつて得らる。樂むに非れば以て君子を語るに足らず。

といつたのは能く孔子を知る者といふべきである。今維摩詰が衆生の生活の無意義なことを説くのも、衆生をして其の無意義なる生活を脱せしめんとする念に出るは勿論であるが、又一方には衆生を救護せんが爲に力を盡すものが、其の努力の久しくしてなほ酬らるれざるが爲に倦厭の念を生じ、自ら衆生を救護せんことを志としながら却て衆生と同様なる卑劣の心を起すこととの無いやうにと、深く心を用ゐたものと思はれる。羅什が

諸法の空を觀ずるは即ち是れ眞實の慧なり。眞實の慧の事にして無縁の慈を生ずるを眞の慈を爲す。

といつたのは大に味ふべき言である。其の慈といふことに就ては次の段に於て詳説せらるゝのである。

文殊師利言。若菩薩作是觀者。云何行慈。維摩詰言。菩薩作是觀已自念。我當爲衆

生説如斯法。是即眞實慈也。行寂滅慈。無所生故。行不熱慈。無煩惱故。行等之慈。等三世故。行無諍慈。無所起故。行不二慈。内外不合故。行不壞慈。畢竟盡故。行堅固慈。心無毀故。行清淨慈。諸法性淨故。行無邊慈。如虛空故。行阿羅漢慈。破結賊故。行菩薩慈。安衆生故。行如來慈。得如相故。行佛之慈。覺衆生故。行自然慈。無因得故。行菩提慈。等一味故。行無等慈。斷諸愛故。行大悲慈。導以大乘故。行無厭慈。觀空無我故。行法施慈。無遺惜故。行持戒慈。化毀禁故。行忍辱慈。護彼我故。行精進慈。荷負衆生故。行禪定慈。不受味故。行智慧慈。無不知時故。行方便慈。一切示現故。行無隱慈。直心清淨故。行深心慈。無雜行故。行無誑慈。不虛假故。行安樂慈。令得佛樂故。菩薩之慈爲若此也。

(文殊師利言く、若し菩薩是の觀を作さんには云何か慈を行せんと。維摩詰言く、菩薩是の觀を作し已りて自ら念ず、我當に衆生の爲に斯の如き法を説くべし、是れ眞實の慈なり。寂滅の慈を行ず、所生無きが故に。不熱の慈を行ず、煩惱無きが故に。等の慈を行す、三世に等しきが故に。無諍の慈を行す、所起無きが故に。不二の慈を行す、内外合せざるが故に。不壞の慈を行す、畢竟盡の故に。堅固の慈を行す、心毀ること無きが故に。清淨の慈を行

ず、諸法の性淨きが故に。無邊の慈を行す、虚空の如くなるが故に。阿羅漢の慈を行す、結賊を破るが故に。菩薩の慈を行す、衆生を安んずるが故に。如來の慈を行す、如相を得るが故に。佛の慈を行す、衆生を覺せしむるが故に。自然の慈を行す、無因にして得るが故に。菩提の慈を行す、等しく一味なるが故に。無等の慈を行す、諸愛を斷ずるが故に。大悲の慈を行す、導くに大乘を以てするが故に。無厭の慈を行す、空無我を觀するが故に。法施の慈を行す、遺惜無きが故に。持戒の慈を行す、毀禁を化するが故に。忍辱の慈を行す、彼我を護るが故に。精進の慈を行す、衆生を荷負するが故に。禪定の慈を行す、味を受けざるが故に。智慧の慈を行す、時を知らざることを無きが故に。方便の慈を行す、一切示現するが故に。無隱の慈を行す、直心清淨なるが故に。深心の慈を行す、雜行無きが故に。無誑の慈を行す、虛假ならざるが故に。安樂の慈を行す、佛樂を得しむるが故に。菩薩の慈此の若しと爲す。)

維摩詰は言を極めて衆生の生活の無意義なることを説いた。是れ彼等に救護を與へ、彼等をして共に意義ある生活に入らしめんとする慈悲心の發露である。衆生皆共に貴き佛性を具有しながら之を開發し長養すべき途を辨へざる爲に、いつ迄も其の無意義なる生活より脱却し得ざ

るを見て、菩薩は深く之を哀愍し、之に救護を與へんが爲に力を惜まぬものである。されば華嚴經にも

菩薩は諸の衆生の惡業を造作して重苦を受け、此の障を以て佛を見たてまつらず法を聞かず僧を識らざるを見て慈悲心を起し、諸の惡道中に於て衆生に代りて種々の苦を受け、衆生を解脱せしむ。菩薩は衆生に代りて苦毒を受くるに、精勤して之を捨てず、避けず驚かず怖れず退かず、疲るゝこと有ること無し。

とある。又

菩薩は常に此の念を爲す、我常に十方の衆生の爲に無量劫に住し、衆生を成就して心に疲厭なく、共に止住して捨離することなかるべし。

ともある。凡そ菩薩が衆生のために力を盡すこと種々無量であるが、要するに其の洪大なる慈悲心の發露したものに外ならぬのである。文殊は維摩詰の心を察して居る故に、直ちに進んで『云何か慈を行ぜん』と問ひ、維摩詰は之に答へて慈を行ずるに就ての心得を説くのである。吾等凡夫でも人の苦み惱めるを見て之を救ひたいといふ念は起るのであるが、眞によく之を救うて其の苦境を脱せしむることは容易に出来ぬ。それには最も深き思慮分別の力がなければな

らぬことである。又吾等が他人に慈悲を施しても必ず彼よりして感謝せらるゝとは定まらぬ。時としては感謝されぬばかりで無く、却て恨まれたり惡まれたりすることさへ起るのである。その時に憤慨して慈悲の行を中絶するやうなことでは、徹底的に慈悲を行ずることの出来るものではない。又吾等には各々性僻があるから妄りに親疎を分ち愛憎を起すことを免れぬ。それで自己の好む者の爲には大に力を盡しても、自己が好ましからぬと感ずる者の爲には力を盡さぬといふやうな場合が少くない。斯くては眞の慈悲を行ずることの出来やう筈がない。維摩詰が慈悲を行ずるに就て説いた所は一々吾等に大なる教訓を與ふるものである。孔子の言は今までも幾度となく引いたが、孔子が

唯だ仁者能く人を好み能く人を惡む。

といはれたのに游氏は解釋を加へて、

善を好みて惡を惡むは天下の同情なり。然れども人毎に其の正を失するものは、心に繋る所有りて自ら克つこと能はざればなり。惟だ仁者は私心無し、能く好惡する所以なり。

といった。眞に私心無きものにして初めて能く人を愛することも出来、能く人を惠むことも出来るのである。涅槃經には

慈は即ち如來、如來は即ち慈なり。

とあるが、其の大慈悲は即ち佛の具へたまへる洪大なる智慧より出る所の力であるから華嚴經には

如來の心意識は測り難し、譬へば虚空の如く一切の依る所と爲る。…譬へば大海の水の四天下の地に潛潤して流るゝが如く、如來の智は清淨明了平等無二にして分別あること無しといつてある。吾等も漸く修行を重ね一步より一步と佛の境界に近づくに隨ひ、眞の慈悲を行ふことが出来るやうになるであらう。大に勉め勵まなければならぬ。

○斯の如き法を説くべし 衆生の空虚なる生活が全く無意味であることを説いて、其の覺醒を促さうといふのである。○眞實の慈 覺醒を與へて、空虚の生活を脱し眞實の生活に入らしむることが眞の慈悲である。是れが即ち彼に眞の生命を與ふるのである。夢の如くに生きて居るのは『生命』とはいはれぬのである。○寂滅の慈を行す 寂滅とは人生の有らゆる變化を超越したることである。即ち生死の外に立つことである。此の心あつてこそ自他の別に囚はれず平等の慈を行ふことが出来るわけである。○所生無きが故に 生死の變化に累はされぬのが即ち菩薩の心である。此の心あるが故に常に寂滅の慈を行じ得るのである。○不熱の慈を行す

熱とは愛著のことである。自己の好む所に愛著すること無く、全く無私無欲にして初めて眞の慈を行じ得らるゝのである。○煩惱無きが故に 一切の煩惱は小さき自己に執著するのが元となつて起るのである。菩薩は固より煩惱無きが故に愛著を離れ盡して眞の慈を行じ得るのである。○等の慈を行す 何れの場合、如何なる人に對しても平等に慈を行ふことが出来るのである。○三世に等しきが故に 自己の生命は現世に止まらず、三世に亘るものなることを知ると共に、他の人々の生命も亦同様であることを知る。隨て吾等相互の關係は現世に止まらず、三世に亘つての深き因縁であることを知るのである。此の心が慈を行ずるの元となるのである。○無諍の慈を行す 慈を行ふことに深き悦びを感じ、之によつて何等かの報を得やうといふ念が無ければ鬭諍の起らう筈はない。斯くして眞の慈を行じ得らるゝのである。○所起無きが故に 菩薩の心は平等無私であるから親疎好惡等の別の起るべきやうは無い。されば他人に慈を行じて、他人が之を感謝するも感謝せぬも一切心に止まらぬのである。○不二の慈を行す 慈を施す我と慈を受くる彼等との間に區別を立てぬのである。これが眞の慈である。○内外合せざるが故に 内とは内に存する慈心である。外とは其の慈心の外に現はれたる結果として生ずる種々の善行である。合せざるとは執著する所なきことをいふのである。所謂内外共に空な

るものである。○不壞の慈を行ず。眞の慈悲行を妨礙し破壊するものは決して無い。『仁者は敵無し』といふは此の事である。○畢竟盡の故に 畢竟とは永久にといふ意である。盡とは差別を離ることである。如何なる場合でも、又如何なる人に對しても常に慈を施すのが即ち畢竟盡である。無縁の慈といふも同じ意である。此の如き大慈悲は何者によつても妨げられぬのである。○堅固の慈を行ず 如何なる事情があつても變ずること無く、又退轉することなく常に慈を行ずるのである。○心に毀るゝこと無きが故に 其の心に深く信ずる所が減退したり損傷したりすること無く、いつも同様であるから堅固の慈を行ずることが出来るのである。○清淨の慈を行ず 慈を行ずることを樂むといふより外には全く他念なく、一切名利の念を離れ盡したことをいふのである。○諸法の性淨さが故に 諸法とは一切の事物、一切の條件をいふのである。吾が心が清淨であれば、吾が周圍の一切の事物は盡く皆吾をして大慈を行ぜしむべき便となるのである。○無邊の慈を行ず 一切衆生を漏るゝ所無く救はうといふ念を以て世に立つのである。○虚空の如くなるが故に 虚空は一切の物を蔽ふ。美しい物も醜い物も、大なる物も小なる物も一として蔽はぬものは無い。佛菩薩の心も亦其の通りである。○阿羅漢の慈を行ず 阿羅漢は一切の煩惱を除き盡したものである。斯く清淨なる心を以て慈を行ずるのが即ち阿羅

漢の慈である。○結賊を破るが故に、賊とは即ち煩惱のことである。種々の煩惱が結合して心中に蟠つて居るのを結賊といふ。自ら有らゆる煩惱を離れ得たるものは、又自ら周圍の人を感化して煩惱を去ることを得しむるので、これ眞に大なる慈悲である。○菩薩の慈を行ず 佛の御心を以て吾が心とし、常に衆生の救護に力を盡すものが即ち菩薩である、自ら菩薩行を勵むの志を以て慈を行ずるのが菩薩の慈である。○衆生を安んずるが故に 衆生の苦を抜き各安穩ならしむることが實に菩薩の志である。○如來の慈を行ず 如來とは如實の道に乘じ、來りて一切衆生に臨むの義である。如實とは絶対に眞實なることである。如來の洪大なる智慧よりして洪大なる慈悲の行が自ら發し來るのであるが、菩薩は皆之を理想として相勵むのである。○如相を得るが故に 如とは永恆の意、不變の意である。如相とは萬有の實相のことで、之を覺り得れば即ち佛智を具ふことが出来るのである。○佛の慈を行ず 佛は一切衆生をして盡く佛の境界に到達せしめやうといふ御心を以て吾等に對せらるゝのである。是れ即ち佛の慈である。菩薩の理想とする所も固より此に在る。○衆生を覺せしむるが故に 衆生が佛の覺られた通りに覺れば即ち佛の境界に入る。佛の常に念とせらるゝ所はこれである。○自然の慈を行ず 各自の具有せる佛性が次第に開發せられて行くに隨ひ、自ら慈悲の念が湧き出るのである。こ

れ即ち自然の慈である。○無因にして得るが故に 佛の教へを學ぶによつて覺るには違ひないが佛の力を以ても無よりして有を生ぜしむることは出来ぬ。人々が皆佛性を具へて居ればこそ覺を得るやうにもなれるのである。要するに各自の具へ得たる本性が外から與へられたる教へによつて開發せられたに過ぎぬ。其の根本の因は吾に在つて他に在るのではない。無因にして得るとは吾より外に因あるに非ずして得るといふ意である。○菩提の慈を行す 菩提とは即ち覺のことである。覺を得たるによつて自ら慈悲の行が發するのを即ち菩提の慈といふのである。○等しく一味なるが故に 何人も佛性を具へざる者なきが故に、何人も皆覺を得らるべき筈である。而も覺を得る者の至て少いのは、教へが世に普及せず、人々多くは覺を得べき縁にあはぬが故である。佛菩薩は其の言と其の行とによつて世の人を教へ導き、疾く一切衆生をして共に覺を得しめんとて常に力を盡さるのである。○無等の慈を行す 無等とは『何者も之と同等にはなれぬ』といふこと、即ち最上第一の義である。眞の慈悲の行は有らゆる行の中に於て最上第一である。○諸愛を斷ずるが故に 愛とは愛著の義である。愛著は私心よりして起るものである。愛著を斷じ盡して、平等の念を以て一切衆生に臨む者は眞の慈を行ずることが出来るのである。○大悲の慈を行す 一切衆生が苦惱の中に沈淪して居る有様を見て深く之に

悼み之を其儘に打棄て置くことは出来ぬと考へるのが即ち大悲の念である。大悲の念が發して救護の行となるのが即ち大悲の慈である。○導くに大乘を以てするが故に 一切衆生盡く煩惱あるが故に、自ら種々の苦の因を作るのである。其の煩惱が絶えなければ其の苦は除き盡さるゝものではない。假令或る苦を一時除いても之に代つて他の苦が生ずるに極つて居る。眞に有らゆる煩惱を除き盡すの途は、大乘の教へを學ぶより外に斷じて無い。故に佛菩薩は大乘を世に弘むることに全力を盡すのである。○無厭の慈を行す 慈を行するに當つて更に倦厭の念を生せず、絶えず一切衆生の救護に力を盡すのが即ち無厭の慈である。○空無我を觀するが故に空とは差別を超越したること、無我とは我に執著する念の全く無いことである。若し彼此親疎等の差別に囚はれ、我に執著する念を去り得ぬならば、慈を行すること久しくして、彼より感謝せられぬやうな場合には必ず倦厭を生ずるであらう。空を觀じ無我を觀する者にして初めて無厭の慈を行じ得べきである。○法施の慈を行す 財施も法施も共に貴ぶべきものではあるが衆生は佛の正法を學ぶことに依つてのみ其の心の煩惱を除き得べきものであるから、法施は特に貴いものと思ふべきである。○遺惜無きが故に 吾が知り得たる限りを盡く人に教へ、少しも惜むこと無きは佛菩薩の貴い御心である。法華經の中に於て釋尊は『自ら無上道大乘平等の

法を證して（證するとは悟ることである）若し小乘を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事爲めて不可なり」と仰せられ、それに續いて「一切の衆生をして我が如く等しくして異なる所なからしめんと欲しき」と仰せられた。自ら苦勞を重ねて得たる所を惜んで容易に人に與へぬのが凡夫の情である。佛菩薩は全くそれと異つた心をもつて居らるのである。○持戒の慈を行す 佛戒を守るものは其の心の諸惑が盡く除き盡され、常に少しの煩惱も無き故に、持戒を名けて『清涼』といふのである。此の如き心を以て衆生を救護せんが爲に力を盡すのが即ち持戒の慈である。○毀禁を化するが故に 衆生は佛の禁戒を守らぬ故に種々の惑を起し、隨て種々の苦を生ずるのである。菩薩は之を教化して其の苦を脱せしめんと力を盡すものである。故に自身に持戒を重んずべきは勿論のことである。自ら實行し得ぬことを人に勧めても、それは決して行はれぬ。○忍辱の慈を行す 他人に對して慈を行ずるに當つては、往々にして些かも感謝せられず、却て迫害を受くることさへある。若し之が爲に瞋恚の念を生ずれば、慈悲の念は之が爲に全く打壞されてしまふ。此の場合に瞋恚の念を生ぜず、唯だ彼の無智なることを深く哀愍するの念を生ずるならば、いつ迄も其の慈悲を行すことが出来る。これ即ち忍辱の慈である。○彼我を護るが故に 慈を行するによつて他人に救護

を與ふるは勿論のことであるが、常に慈を行するものは其の心に貪慾卑慢の念等が少しも起らず、いつも明るく晴々とした心をもつて世に立ち得るのであるから、慈を行するは自己を護る所以ともなるのである。能く此の事を明にする者は常に忍辱の慈を行すことが出来るのである。○精進の慈を行す 佛の境界に近づかんことを理想とし、懈怠なく修行を續くのが即ち精進である。此の心を以て一切衆生に慈を施すものは、彼よりして其の報を得やうなどいふ念の起らう筈はない。○衆生を荷負するが故に 吾が背に一切衆生を負ふ心を以て之に慈を行するので、其の勞の多きによつて其の功德も亦大なるはいふまでもない。○禪定の慈を行す心が散亂して居れば五慾の爲に役せらるゝを免れぬ。心に禪定を得て一切の私慾を去り盡したものは眞の慈を行すことが出来る筈である。○味を受けざるが故に 味とは慾望の満足といふのである。吾が慾望を満足させやうといふ念がなければ、人の爲に充分力を盡すことは必ず出来る。○智慧の慈を行す 眞に智慧を具へたものは一切衆生が如何に苦むかを一々に委しく知り、又其の苦の因由する所を委しく知ることが出来るから、之に對して救護を與へ得るのである。○時を知らざること無きが故に 久しく苦心して修行を積んだ結果として智慧が具はるやうになるのである。若し其の努力が足らぬうちに智慧の具はることを望むならば、それは全

く時を知らぬものである。菩薩には決してさういふ過はない筈である。○方便の慈を行ず 其の人々の性質境遇に應じ、それ／＼に適當なる教へを與へ其の惑を去り其の苦を濟ふのが所謂善巧方便である。方便の力によつて眞の慈を行することが出来るのである。○一切示現するが故に 高德の菩薩は種々の人の前へ現はれて、それ／＼に適切なる教訓を與へ、其の進むべき路を示してやるだけの力を具へて居るのである。○無隱の慈を行す 無隱とは自己の過失を覆ひ隠さず、速かに懺悔することである。懺悔すると共に其の過失の因たる煩惱が掃ひ去られ、明かなる智慧が照り輝いて來るから、隨て洪大なる慈悲を行ずる力も自ら具はつて來るのである。○直心清淨なるが故に 其の心が質直であるから、速かに自己の過失を認むることも出來一切の煩惱を掃ひ去つて清淨なる身となることも出来るのである。○深心の慈を行す 深心とは佛法を學んで深く之を信する心をいふのである。深く佛法を信するものは其の心が自ら佛の御心と一致する故に、慈を行する力も具はるわけである。○雜行無きが故に 佛法を信する以外に雜念が交らぬから、其の行ふ所も自ら佛の御心と一致するやうになるのである。○無誑の慈を行す 其の心に信せぬ所を形に現はすのは、即ち世を欺き人を誑すのである。世間の名利を求むるが爲に慈悲を行する者は皆是れ人を誑惑するものといふべきである。菩薩は全く其等

と類を異にし、眞實の心から慈を行するのである。○虛假ならざるが故に 菩薩の一言一行は盡く其の心の形に發するものである、一として虛假なるものは無い。○安樂の慈を行す 眞に慈を行するものは他の人に安樂を與ふると共に、自己の心中も常に安穩快樂である。故に他人より報を得ることなどは全く望まぬわけである。○佛樂を得しむるが故に 苟くも大乘の教へを信するものは自ら佛の境界に到達すると共に、一切衆生をして共に佛の境界に到達することを得しめ、此の地上に寂光淨土を實現することを理想として菩薩行を勵むべきである。慈を行することの極致は此に在るべきものである。

菩薩は佛の御心を以て吾が心とするものであるとは屢々いつたことであるが、佛の御心は大慈大悲といふより外にない。法華經の中には

大慈大悲にして常に懈倦無し。

とある。此の大慈大悲といふ意を智度論の中に説明して、

大慈は一切衆生に樂を與へ、大悲は一切衆生の苦を抜く。……佛の大慈大悲は眞實最大なり。

とある。此の大慈大悲の心は宛も虚空が一切の物を蔽ふが如く一切衆生を蔽ふものである。されば觀無量壽經には

佛心とは大慈悲是れなり、無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。

といつてある。佛はたゞ特別の縁ある者にのみ慈悲を垂れらるゝのではない。苟くも生ある者にして佛の慈悲を蒙らぬといふものは無い。是れ即ち無縁の慈である。慈は與樂を旨とし悲は拔苦を旨とすること、智度論にいふ所の如くであるが、苦を抜くは即ち樂を與ふるの前提となるものであるから、慈が根本である。悲は慈の中に含まるゝとも見て宜いのである。されば涅槃經には

大慈大悲を名けて佛性と爲す。

とあると共に、また前にいふ通り

慈は即ち如來、如來は即ち慈なり。

ともいつてある。菩薩道を勵むものは何よりも先に慈心の徹底を期すべきである。

維摩詰は久しく菩薩道を勵み、佛に近い徳を具へ得たものである。殊に文殊等の慰問を受けた最初に於て「一切衆生病めるを以て是故に我病む。若し一切衆生病まざることを得ば則ち我が病滅せん」といひ、更にまた「菩薩の疾は大慈を以て起る」といつたのであるから、彼が常に一切衆生を救護することを志として居ることは明かである。然るに彼は今言を極めて衆生の

生活の無意義なことを説くのである。其の言の極めて辛辣なのは、即ち其の彼等を哀愍する念の極めて切なることを表はすものである。文殊師利は之を察して、菩薩その者は如何にして慈を行するやと問うたのであるが、維摩詰の之に答ふる所は最も徹底的である。慈を行することは即ち吾等が本來具有せる佛性の發露に外ならぬのであるから、吾等は常に慈を行することが出来て、初めて眞に此の世に生れたかひがあるといふべきである。法華經には迦葉等が大乗の法を聞いて深き悦びを感じ、釋尊に對して誠心から感謝したことが記されてある。迦葉等は今まで小乗を學んで覺を得、聲聞の中に於て最も重んぜられて居たのであるが、釋尊は之に對して必ず大乗を學び、菩薩道を勵むべきことを極めて懇ろに勧められ、今までの修行も菩薩道を行する基礎として役に立つものであることを明され「必ず菩薩道を勵んで佛の境界に到達することを期せよ」と教へられたのである。それ故に迦葉は

我等今日佛の音教を聞きて、歡喜踊躍して未曾有なることを得たり。

といつた。眞に菩薩道を行せんと志をもつ者は、誰も皆迦葉の如く大なる歡喜を有すべきである。

維摩詰の慈を行するに就て語れる所は能く此の意に一致して居る。慈を行するは即ち吾等の

本性の發露であるから、吾等自身が次第に進歩して佛の境界に近づいて行きさへすれば、強いて慈を行じやうとしないでも、吾等の言ふことも爲すことも、盡く一切衆生に利益を與ふこととなるわけで、維摩詰は此の點に就て最も懇切に説いて居る。己を正しくせずして人を正さんとし、己を救ひ得ずして人を救はんとするも到底出來ることではない。論語の中に孔子が子路の問に答へて、君子を説かれた語が出て居る。

子路君子を問ふ。子曰く、己を修めて以て敬す。曰く、斯の如きのみか。曰く、己を修めて以て人を安んず。曰く、斯の如きのみか。曰く、己を修めて以て百姓を安んず。己を修めて以て百姓を安んずるは堯舜も其れ猶ほこれを病めり。

とある。己を修むるといふことは有らゆる善行の根本である。眞に己を修むることが出來れば其の感化は必ず周圍に及び、百姓を安んずることも出來るのである。堯舜の理想とする所も此より以上には出なかつた。程子は之を説明して、

君子は己を修めて以て百姓を安んじ、篤恭にして天下平なり。唯だ上下恭敬に一なれば則ち天地自ら位し萬物自ら育す。氣和せざる無くして四靈畢く至る。此れ信を體し順に達するの道、聰明睿智皆是よりして出づ。

といったが、眞に能く其の意を悉して居る。光りあるものは其の周圍を照さずしては止まぬ。熱あるものは其の周圍を温めずしては止まぬ。内に養ふ所は必ず外に發するのである。舜は聖帝として聞えた人であるが、孔子の言には
無爲にして治むる者は其れ舜か。夫れ何をか爲せりや。己を恭しくして正しく南面せるのみ。

とある。其の徳が具はつて居れば、正しく南面するのみで天下を平にすることが出來るのである。されば又孔子の言に
君子はこれを己に求め、小人はこれを人に求む。

ともある。己を修むることが即ち世のためであり人の爲であると知るならば、瞬時も之を忽且に附することは出來ぬ筈である。

今此處に慈を行ずるに就て維摩詰の列舉したる所は、一として己を修むるを本とするの意に出ぬものは無い。中庸には
誠は自ら成すなり、道は自ら道くなり。誠は物の終始なり、誠あらざれば物無し。是故に君子は之を誠にするを貴しとす。誠は自ら己を成すのみにあらず、物を成す所以なり。己を成

すは仁なり、物を成すは知なり。性の徳なり。外内を合するの道なり。

とあるが、維摩詰のいふ所も眞に外内を合するの道である。自己の徳が高くなれば自ら周囲の人々に利益を與へる。又周囲の人々に利益を與へんと志があれば、是非とも自己を完全にしなければならぬと考へるやうになる。利他と自利とは斯くして相伴つて進むのである。此の如き心をもつ人が次第に多くなれば、世の中は自然と明るくなり、幾多の不祥な出来事は次第に影を潜むるやうになる。即ち穢土が漸く淨土に近づいて行くのである。『自ら己を成すのみにあらず物を成す所以なり』といふ語が能く此の事を説明して居る。其の源となるものは心一つの働きであるが、その流れの末は永く世をも人も潤ほすのである。

若し一句未曾有の法を聞きて大歡喜を生ずれば、三千大千世界の中に滿つる珍寶を得るに勝れり。

と華嚴經にあるのも、まことに道理である。

文殊師利又問。何謂爲悲。答曰。菩薩所作功德。皆與一切衆生共之。何謂爲喜。答曰。

有所饒益。歡喜無悔。何謂爲捨。答曰。所作福祐。無所希望。

(文殊師利又問ふ、何をか謂ひて悲と爲すと。答へて曰く、菩薩所作の功德は皆一切衆生と之

を共にすと。何をか謂ひて喜と爲すと。答へて曰く、饒益する所有れば歡喜して悔ゆること無しと。何をか謂ひて捨と爲すと。答へて曰く、所作の福祐希望する所無しと。)

既に慈心に就て説かれた以上は、悲心等に及ぶのが自然の順序である。併しながら悲心等に就ての説明は至て簡單である。何となれば慈心が徹底すれば悲心等も自ら其の中から生じ來るべきもので、慈心が根本であるからである。さて此の慈悲喜捨の四心を四無量心といふことは前にもいつたが、俱舍論の中には其の意を説明して、

無量といふは、無量の有情所縁と爲るが故に、無量の福を引くが故に、無量の果を感ずるが故に。

とある。有情とは即ち人のことである。此の四心によつて有らゆる人々が一致し協和することが出来るのである。又無量の果を感ずるとは凡夫の境界を脱して漸く佛の境界に近づき得ることといふのである。

○一切衆生と之を共にす 僧肇が『彼の長苦を哀み自ら身に積む所の衆徳を計らず、一切に與へんことを願し、人を先にし己を後にするは大悲の行なり』といつたのは最も之を悉せる説明といふべきである。要するに自ら世間に對して求むる所のあるものは、世間の人の苦を濟ふこ

とは出来ぬ筈である。○歡喜して悔ゆること無し 他人の苦を濟ふために力を盡すだけの親切な心があつても、彼が其の苦境を脱して、却て吾よりも幸福な境界になると、妬ましく思ふのが凡夫の情である。その爲に最初の親切が却て怨恨を構ふる様になることさへ往々にしてある。菩薩は固より此の如き邪念の全くない者であるから、吾が力によつて他人に利益を與へた場合には、心から之を喜ぶのである。『衆と同じく歡喜し、彼と己とに於て俱に法悅を得る、之を喜といふ』と僧肇はいつた。○悵望する所無し 道生が「若し能く功德の報を望まざるは捨の極なるものなり」といつたので能く其の意は悉されて居る。

此の四無量心を又名けて四等心ともいふが、等とは自他等しく其の慶を受くるの義である。羅什は此の四心に就て「現世に恩を求めず未來に報を求めざるなり」といつて居るが、眞に慈悲を施すことが自分の悦びであれば、之に對して報を求むる念は起らぬ筈である。但し吾等凡夫と雖も他人の苦み惱めるを見て之に對する同情は起る。又何とかして其の苦惱を脱せしめてやりたいといふ念も起るのである。併しながら之に對する慈悲の行を徹底的に果すことが甚だ困難である。それは畢竟喜捨の二心が足らぬ爲である。喜捨の二心の足らぬのは要するに慈悲心が不充分であるが爲である。老子は天の道を以て人の道の本とすべきことを説き、天が萬物を

を生じて、而も其の萬物を生じたるを以て己の功とせず、萬物をして自ら榮えしめて居るのが實に吾等の範であると説き、或は

生じて有せず、爲して恃まず、功成りて居らず。夫れ惟だ居らず、是を以て去らず。

といひ、或は

上善は水の若し。水善く萬物を利用して而して争はず、衆人の惡む所に處る。故に道に幾し。

といひ、或はまた

聖人は一を抱きて天下の式と爲る。自ら見さず、故に明なり。自ら是とせず、故に彰はる。自ら誇らず、故に功あり。自ら矜らず、故に長し。夫れ惟だ争はず、故に天下能く之と争ふもの無し。古の所謂曲なれば則ち全しとは豈に虚言ならんや。

といつたが、眞に喜捨の二心の貴きことを能く説明して居るものゝ如くである。

凡夫の習ひとして、何事に於ても他人の己に勝れるを妬むものであるから、折角善事を爲しても、それが却て紛争の種となることが少くない。又自分よりも後輩の者が自分より世に知られ人に認めらるゝやうになつた時、心から之を悦ぶ者は甚だ少い。四無量心の貴いことを充分辨ふる者が多くなつたなら、種々の累ひが除かれるに違ひない。論語の中に面白い話が出て居

る。孔子が或時子貢に向つて「汝と顔回とはいづれが勝れるか」と問はれたが、子貢は大に恐縮した様子で之に答へて、

賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞て以て十を知る、賜や一を聞て以て二を知る。

といった。之に對して孔子の言は

如かざるなり。吾と汝と與に如かざるなり。

とある。孔子自身も顔回には及ばぬといはれたので、徂徠が之を評して「聖人が賢を好むの誠なり」といつたのは能く當つて居る。而るに孔子の爲に斯くまで稱讚せられたる顔回は、孔子の到底及ぶべからざることを讚嘆して、

立つ所有りて卓爾たるが如し、之に従はんと欲すと雖も由るなきのみ。

といつて居る。此の師弟の間は實に貴ぶべく羨むべきの至である。又是れは後のことであるが孟子の弟子なる公孫丑が孟子より浩然の氣の説を聞いて「夫子は既に聖なるか」といへるに對し、孟子は慌てゝ之を叱り、

惡是れ何の言ぞや。……夫れ聖は孔子すら居らず、是れ何の言ぞや。

といつた。孔子が其の後進を導くに大慈悲の心を以てし、其の後進の美點を認むるに吝ならざ

りしにより、其の後進者も孔子を推尊せること至れり盡せりともいふべき有様であつた。釋尊と諸弟子の間は申すまでもなく、永く吾等の仰いで範とすべきものであつた。

吾が國の維新以前に長崎の高島秋帆は西洋流の砲術を研究し、其の門に江川坦庵等を出したが、秋帆は謀叛の嫌疑を受け天保十四年から嘉永六年まで十一年間も獄に繋がれた。併し其の冤罪であることが明かになつて赦され、擧げ用ゐられて兵制の改革に力を用ゐることになつた。

此の間に江川坦庵の方は伊豆の代官であつて幕府の信用を得て居たから、絶えず砲術やら西洋式の軍隊教練やら種々の研究を續けて居た。それで秋帆は獄を出ると共に坦庵に「君は十年餘も研究を積んで、今日では自分よりも遙かに進歩して居るにちがひ無い。自分は君の部下に屬して大に勉強しやう」といつたが、坦庵は之を肯かず、秋帆を待つに賓客の禮を以てしたといふ。此の兩高士の風はまことに欽すべきものである。更に舊い例をいへば支那の春秋時代に於て齊が覇業を成したのは管仲の功であるが、管仲の未だ志を得なかつた時に其の保護者たり恩人たる人は鮑叔であつた。管仲は之に感激して「我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なり」といつた。然るに後に至つて鮑叔は管仲を桓公に薦めて齊の宰相とし、自ら甘んじて其の部下に屬し、共に國事に盡した。此等の人々は大乗佛教を學んだものではないが、其の爲す所は大

乘の精神と能く一致する者と稱すべきである。

文殊師利又問。生死有畏。菩薩當何所依。維摩詰言。菩薩於生死畏中。當依如來功德之力。文殊師利又問。菩薩欲依如來功德之力。當於何住。答曰。菩薩欲依如來功德力者。當住度脫一切衆生。又問。欲度衆生。當何所除。答曰。欲度衆生。除其煩惱。又問。欲除煩惱。當何所行。答曰。當行正念。又問。云何行於正念。答曰。當行不生不滅。又問。何法不生。何法不滅。答曰。不善不生。善法不滅。又問。善不善孰爲本。答曰。身爲本。又問。身孰爲本。答曰。欲貪爲本。又問。欲貪孰爲本。答曰。虛妄分別爲本。又問。虛妄分別孰爲本。答曰。顛倒想爲本。又問。顛倒想孰爲本。答曰。無住爲本。又問。無住孰爲本。答曰。無住則無本。文殊師利。從無住本。立一切法。

(文殊師利又問ふ、生死に畏有り、菩薩當に何れをか所依とすべきと。維摩詰曰く、菩薩生死の畏の中に於て、當に如來功德の力に依るべしと。文殊師利又問ふ、菩薩如來功德の力に依らんと欲せば、當に何れに於てか住すべきと。答へて曰く、菩薩如來功德の力に依らんと欲せば、當に一切衆生を度脱するに住すべしと。又問ふ、衆生を度せんと欲せば當に何をか除くべきと。答へて曰く、衆生を度せんと欲せば其の煩惱を除くべしと。又問ふ、煩惱を除かんと欲せば當に何をか行する所とすべきと。答へて曰く、當に正念を行すべしと。又問ふ、云何か正念を行せんと。答へて曰く、當に不生不滅を行すべしと。又問ふ、何の法か不生なる、何の法か不滅なると。答へて曰く、不善は不生なり、善法は不滅なりと。又問ふ、善と不善と孰れをか本と爲すと。答へて曰く、身を本と爲すと。又問ふ、身孰れをか本と爲すと。答へて曰く、欲貪を本と爲すと。又問ふ、欲貪孰れをか本と爲すと。答へて曰く、虛妄分別を本と爲すと。又問ふ、虛妄分別孰れをか本と爲すと。答へて曰く、顛倒の想を本と爲すと。又問ふ、顛倒の想孰れをか本と爲すと。答へて曰く、無住を本と爲すと。又問ふ、無住孰れをか本と爲すと。答へて曰く、無住は則ち本無し。文殊師利、無住の本より一切の法を立つと)

以上に於て菩薩の行の貴いことが段を重ねて説かれてあるが、これは皆高德の菩薩の行である。いかに大乘を學ぶとも、此處まで到達するのは容易の業ではない。されば大乘を學ぶこと未だ久しからぬ者(之を稱して新發意の菩薩といふのであるが)は、自分等の日々行ふ所とあまりに懸隔のあるのを見て勇氣を失ひ、中途にして廢するの恐れがある。文殊師利は之を察し

て維摩詰に問を發し、新發意の菩薩と雖も實行し得べき道を示さんことを求め、維摩詰は之に答ふるので、まことに此の二大士の親切懇到なることは感嘆に堪へぬ次第である。其の道といふは即ち『佛の功德の力に依ること』であるが、たゞ佛に依るといふのみで大乘の修行が出来るものではない。自ら佛の御心を以て吾が心と爲し、努力を續くるといふ大決心がなければならぬ。佛の御心を以て吾が心と爲すものは、一切衆生を度することに力を用ゐなければならぬ。即ち吾が身を衆生の前に現じて之が救護に努めなければならぬのである。此の身は斯る善事を積むための身であるから最も大切なものであるが、種々の惡業を積むのも亦此の身である。眞に厭ふべく惡むべきは此の身である。

是の身を苦の本と爲し、餘の苦を枝葉と爲す。(心地觀經)

といふも決して誇張の言ではない。善を積み得べき身が如何にして惡業の元となるか。たゞ心の顛倒せるが爲である。其の顛倒を根本より治するのが大乘の大乗たる所以である。

○生死に畏れ有り 生死とは前から度々いふ通り、人生に於ける凡ての變化のことである。其の變化は際限なく、時々刻々に移つて行くのである。それが一々に吾等の心に刺激を與へ、動搖を生ずるのである。之を『畏れ有り』といつてある。佛や高德の菩薩は固より斯る状態を超

越して居らるのであるが、たとへ大乘を學んでも其の初步の者は容易に此の畏れを去ることが出来ぬのである。○何れをか所依と 自己に未だ充分其の力がないのであるから、何かの力に依つて生死の累ひに遠ざからなければならぬのである。羅什は之を説明して、『未だ畏れ無きこと能はざれば、必ず所依有りて然る後に能く大業を終ゆ』といつた。大業とは菩薩としての修行を終つて佛の境界に達することである。○如來の功德の力に依るべし 佛を信じ、佛の教へを學び、常に佛を念することによつて、自身も次第に佛に近づくのである。羅什は『一心に佛道を求め直進して廻らざれば則ち衆苦自ら滅し、恐畏斯に除かる。亦念を以て依と爲し、亦求趣を以て依と爲す』といつた。求趣とは佛の境界に近づくことを志とし、之を進み求めて止まぬことである。○何れに於てか住すべき 自分の心の置き所を問ふのである。心に定まる所もなく、たゞ佛の御力にのみ依るとも終に得る所は無いであらう。それは宛も底の抜けた器にいかにも水を酌み入れても、器に滿つることは無いのと同様なことである。○一切衆生を度脱するに住すべし 先づ以て『吾は一切衆生を救ふの大任を果すべきものである』と決心し、此の決心を動さぬことが肝要である。僧肇は『一切を化することに住すれば則ち其の心廣大なり其の心を廣大にすれば往く所として難きこと無し。此れ佛の功德力に住するの謂なり』といつ

たが能く其の意を得て居る。○何をか除くべき 衆生の苦を除くのが菩薩の志であるが、衆生の苦は種々無量である果して何れの苦よりして之を除くべきかを考へなければならぬ。○其の煩惱を除く 煩惱あるが故に種々の苦が起るのである。故に其の本たる煩惱を除くことが眞に彼を救ふ所以である。○何をか行ずる所とすべき 暗を除かうとすれば光りに依らなければならぬ。煩惱を除くには如何なることを實行すべきであるか。○正念を行はずべし 正念とは正憶念の義である。正憶念とは心に正理を觀じて終始之を離れぬことである。菩薩たる者先づ自ら正念を行じ、而る後に衆生を教へて其の煩惱を除かしむることに力を盡すべきである。自ら正理を觀じ得ずして人を教へ導くことは出来ぬ。○當に不生不滅を行すべし 常住不變なるものを稱して『不生不滅』といふ例も多くあるが、此處で不生不滅といふのはそれとは意味がちがふ。此處では『生ぜざるべきもの』と『滅せざるべきもの』といふ意に用ゐてある。僧肇は『正念とは謂く正心に法を念じて其の善惡を審にし、善なるものは増して滅せず、惡なるものは滅して生ぜざらしむるなり』といつた。○何の法か不生なる 此處にいふ法とは一切の事物のことである。不生なるべきものは何ぞ、不滅なるべきものは何ぞとの問である。○不善は不生なり 善法は不滅なり 一切の不善なるものは之を滅して再び生ぜしめぬやうにしなければならぬ。一切の善たるものは之を長じて、永久に滅失せしめぬやうにしなければならぬのである。其の善とは正理に合するもの、其の不善とは正理に反するものである。正理を觀じ得たりとも其の善を長じ其の惡を滅することに力を盡さうといふ覺悟がなければ、眞に正念を得たるものとはいはれぬのである。○身を本と爲す 吾等が此の身體を有し、相集つて社會を作つて居るので、善惡の差別が生じて來るのである。萬有の本原たる理に於ては固より善惡の別のあるべきではない。○慾貪を本と爲す 既に肉體があつて、外界より種々の刺激を受くる以上は快不快の別が生ずる、好惡愛憎の別も亦隨て起る。其の快なるものを求め其の好むものを取らんとする慾望が生ずる、其の慾望よりして貪愛の念が起り、愷惜の念が起り、種々の紛争が生ずるのである。○虛妄分別 吾等が共に生活して居る間に自他の別、親疎遠近の別が生じ、隨て利害得失の區別も生じて來る。之によつて自己を利せんが爲には他を排撃し、親しきものに厚くして親しからぬ者に薄くするといふやうになり、人は本來相扶け相保つて共に生きて行くべきものであるといふことを忘るゝやうにもなる。これが即ち虛妄の分別である。○顛倒の想 人の本性に背反したる考へを顛倒といふのである。相保ち相扶け、相俟ち相補ひ、共に生き共に進歩して行くのが人の本性であつて、道といひ教へといふも畢竟之に基いて立てられたるもの

観衆生品

である。是れは獨り人の本性たるのみならず、萬有を一貫する所の不變の理である。之を辨へざる故に顛倒の想が起つて來るのである。○無住を本と爲す 無住とは無所住といふも同じ意で『定まりたる差別無し』といふことである。萬有の根源は永遠に變ること無き一の理である之を眞如といつても宜いのである。その一理が種々の縁によつて限り無き差別を生じ來るのである。吾等の心身も其の差別の中に存するのであるが、此の身の力にも心の力にも皆限りがある。限りある力を以て觀察し思惟しても、容易に眞理を捉へることは出來ず、兎角に眼前の事にのみ囚はれ、親疎遠近の別のみを考へるやうになる。是れが惑の本であり苦の本である。○無住は則ち本無し 道生が『無住は則ち無本の理なり』といつた通り、絶對の理より以上には何物もないのである。○無住の本より一切の法を立つ 其の根本はたゞ一理であるが此より分れて萬有となるので、一切事物の差別は際限もなく起る。然るに佛は絶對の覺を得て居らるゝのであるから、佛を信じ、佛の教へたまへる所を深く思ひ、之を篤く身に行ふことに力を盡して怠らなければ、斯る差別に囚はるゝ念が自然と掃ひ去られて、一切衆生を救護すべき力も自然と具はるやうになるにちがひ無い。

此の一段は吾等の如く新に志を立て大乘の教へを學ばんとする者に取つて、特に有難い教訓

である。佛と吾等との間に非常なる懸隔のあるのは申すまでも無いが、前々から説かれたやうな高德の菩薩と比べて見ても、吾等は餘りに距離の遠いのを感ずるのであるが、吾等は決して失望落膽してはならぬ。たゞ吾等は勤め求めて怠らざるべきである。中庸にも

君子は道に遵ひて行く。半途にして廢するも吾已むこと能はず。

といふ孔子の言が出て居る。廢するとは身體が疲れて用を爲さぬことである。孔子は如何に疲れても道を進むことを已めまいといふ決心を語られたのである。吾等が大乘を學ぶのも亦此の心を以てしなければならぬ。但し懈怠の戒むべきと共に更に大に戒むべきことがある。若しあまりに心が急であつて、覺を得ることの一日も速ならんことをのみ望むものは、心が散亂して却て覺を得ることが出來ぬものである。佛の弟子二十億に對して與へられたる訓戒は何人にも極めて有益である。

二十億といふ人は佛が祇園精舎に居たまへる時に御弟子となり、晝夜殆んど眠らずして勤學したが、いつ迄も其の心の煩惱を掃ひ去ることが出來ず頻りに苦悶を續けた。彼は終に堪へられなくなり、『是れ程勤めても得る所が無ければ、もはや見込みは無い。吾が家は極めて富んで居るから、家へ歸つて近所のものに折々布施でもして善根を積むことにしやう』と決心した。

佛は之を察せられて、二十億を召し寄せ「汝は家に在りし時に琴を弾じて樂んだといふことであるが、若しその絃が急であれば愛すべき聲が出るか」と問はれた。二十億は「否」と答へた。「然らば絃があまりに緩き時は如何」と問はれ、彼は又「其の聲愛し樂むべからず」と答へた。「然らば緩急其の中を得る時は如何」と問はれて彼は初めて「其の聲愛し樂むべし」と答へた。佛は佛道の修行も亦其の通りであるとして、

極めて大精進すれば心亂る。若し精進せざれば心に懈怠を生ず。若し其の中を得れば必ず解脱することを得べし。

と諭されたといふ。(中阿含經) 吾等は急がず又懈らず、一步より一步と堅固に進んで行くべきのみである。

今此の段の初めに文殊師利のいふ通り、吾等はたとへ大乗を學んでも容易に生死を離るゝ境界にはなれぬ。然らば之を如何にすべきかといへば佛の御力に依るより外はない。冷いものを温くするには火の上へ置くのが最もよい。熱いものを冷すには氷の上へ置くのが最もよい。佛は全く生死の外に立ち、常に安穩快樂で居たまふのであるから、吾等が生死の累を脱せんとすることを望むに於ては、佛の御力に依るより外によい道のないことは明かである。併し如何に

佛を信じ、佛の教へを學んでも急に其の效の見えるものではないから、前の例にあげた二十億の如く「見込みがない」と短氣を起す恐れがある。されば修行の初めに於て先づ確たる理想を立て、如何なることがあつても途中で廢せぬやうに自ら勵まし自ち獎むることが殊に肝要である。

文武の政は布きて方策に在り。其の人存すれば則ち其の政舉がり、其の人亡すれば則ち其の政息む。

と孔子の言にもある如く、何事も人である。佛法に於ても亦その通りである。如何に佛の教へが貴くても、之を世に弘め之によつて一切衆生を救はうといふ志を有する人が出なければ、此の貴い教へは終に光りを發せずして止むの外は無い。されば釋尊御入滅の時の遺訓にも

我が滅後諸の弟子相傳へて自利利他の法を行すれば、如來の法身は常に在りて滅せざるなり。(佛遺教經)

とある。此の「諸の弟子」といふ中には勿論吾等も含まれて居る、必ずしも高德の菩薩達のみに限られたことではない。苟くも佛法を學んで佛の洪大なる御恩に感激するものであれば、共に此の遺訓を身に體するといふ念を起さなければならぬ筈である。

佛は申すまでもなく、一切の利害得失の念より超越し、一切衆生を哀愍するの念よりして貴い教へを吾等に遺されたのである。吾等は未だ心中の煩惱を掃ひ盡すことの出来ぬ者ではあるが、佛恩に感激する念が胸中に昂まり來るに隨ひ、利害得失の打算にのみ專であつた卑い考へは漸く其の影を潛むるのである。此の如く淨らかな心になつて居る時の言行は、必ずや吾等の周圍に良い感化を與へ、多少なりとも周圍の人々の心を淨くする力をもつて居るに違ひない。斯う考へて來ると吾等は決して自ら輕んずることは出来ぬといふ氣になる。吾等は凡夫であつても貴い佛の御教へを學ぶことによつて、些かづゝでも功德を積んで行くことが出来るのである。中庸の中に天地の道を説いて

天地の道は博なり、厚なり、高なり、明なり、悠なり、久なり。

といふと共に更に

今夫れ天は斯の昭々の多きなり。其の窮まり無きに及びては日月星辰繋り萬物覆はる。今夫れ地は一撮土の多きなり。其の廣厚なるに及びては華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩さず、萬物載せらる。

といつてあるのは大に味ふべき所である、吾等如きものが假令功德を積み得たとて、それは一撮みの土か一寸四方の空氣ぐらゐの程度に過ぎまいが、此の微弱なものも悠久なる天地の一部分を成すものには違ひない。若し吾等が皆怠つて居れば貴い佛法も終に廢れ果て、此の穢土はいつ迄も穢土のまゝで居るであらう。又吾等は今遽かに佛菩薩の境界に進むことが出来ずとも吾等の生命は此の肉體と共に朽つるものではなく、永遠に續くものであるから、貴い佛法に縁を繋いで居さへすれば何時かは佛菩薩の境界に入ることも出来るであらう。此の點から考へても吾等は決して自ら輕んじ自ら悔つてはならぬのである。

但しいかに永遠の生命であればとて、それは今日の一日の續きに外ならぬものであるから、此の一日を決して輕々しく思つてはならぬわけである。殊に吾等は今生に於て佛法を學ぶことが出来るのである。吾等が佛の在世に生れ合せなかつたのは誠に惜しいことであるけれども、佛の説き遺されたる教へは儼として今に存し、此の中に佛の御心が宿つて居るのである。

此の中には已に如來の全身有す。(法華經)

とさへいはれてあるから、吾等が誠心誠意を以て之を學び之を信じさへすれば、親しく佛の説法を聽聞すると同様の結果が得られるのである。吾等は斯る幸福を與へられたことを心から感謝し、此の貴き教へを學び得べき今日の一日を空しく過ぎぬやうに自ら勵まなければならぬ。

涅槃經に

此の生空しく過ぎて後に悔ゆるとも及ぶことなし。

とあるは眞に吾等に適切なる訓戒といふべきである。二千數百年のむかし釋尊の御生れになつた同じ土の上に、今吾等は生れて居るのである。此の不思議な縁を空しくしてはならぬ。釋尊は吾等に貴い教へを與へらるゝと共に、吾等が必ず之を實踐躬行すべきことを命せられ、また吾等が他の人をも勸めて共に之を實踐躬行せしむべきことを命せられた。

能く此の事を考へて見ると、吾等は今日の一日の眞に貴いことを感ぜざるを得ぬわけである。前からも度々いつたことであるが、吾等人類が皆佛の教へをその身に體し、互ひに淨き心を以て相對する時に、此の娑婆世界に淨土が實現するのである。吾等の今日一日の生活は淨土を此の地上に實現するための用に立つ所の一日である。之を重んじ貴ばなければならぬ。此の一日に於て吾等の心が佛の御心と一致し、清淨であり安穩であるならば、此の日に於ける吾等の一舉一動は盡く貴い意義をもつわけである。吾等は自ら信ずる所を人に傳へて、吾等と同信の人を一人でも多く作らなければならぬのであるが、之を人に傳へんとするには言語に依り動作に依らなければならぬ。勿論特に佛法に就て説くばかりが説法ではない。心に思ふことは自ら言

語にも動作にも現はれるものであるから、吾等の心が清淨であれば、顔つきにも手つきにも、足つきにも、不用意にいつた言葉の中にも周圍の人を感化すべき力が自ら籠つて居るのである。

言は身より出て民に加はり、行は邇きに發して遠きに現はる。言行は君子の樞機なり。

と易の繫辭にいつてあるのは、眞に吾等の共に心に銘すべき所である。

土の中へ深く根を張つて居る樹の葉は一枚毎に皆活々として、いつも變らず色もよく艶もよいが、此の樹から切り放されたる枝について居る葉は、同じ葉でありながら久しからずして艶も失せ色も變つてしまふ。吾等の心が佛の御心に通つて居ると、佛から離れて行くのとちがひによつて、吾等の顔つき身體つき、言葉つきが皆此の通りにちがつて行くのである。是れは自然の變化であつて、繕ふことも飾ることも出来ぬ。前に引いた心地觀經の語に、

慚愧の水を以て塵勞を洗へば身心俱に清淨の器と爲る。

とあるが、清淨の器とは世を濟ひ人を導く用に立つことをいつたのである。心に煩惱が無くなれば身心共に清淨の器となるのである。顔も手も足も皆清淨の器となるのである。言ふことも爲すことも皆周圍の人に益を與へ、貴い佛法を世に弘むる役に立つのである。此の如くに吾等

の身は貴いものでありながら、心一つの持ち方が間違つて來れば、此の身が有らゆる罪惡を生み出す元ともなる。

心は體を以て全く、又體を以て傷る。

と禮記にあるのは眞に名言である。不淨なる心は此の身を使役して多くの罪を作らせ。其の罪を多く作ることが習はしとなつて來ると、心は愈々亂れ愈々汚れて來る。心と身と互ひに因となり果となつて、愈々多くの惡業を作るのである。

身は是れ機關の主にして塵の風に隨ひて轉ずるが如し。六賊中に遊戯して自在にして罣礙なし。

とは觀普賢經の中の語である。機關の主といふは種々の働きが身よりして出で來ることである。六賊とは六根に伴つて生ずる種々の煩惱のことである。功德を積むも此の身であるが、惡を重ね世に累を及ぼすも亦此の身である。維摩詰が文殊の「善不善は何を本とするか」と問へるに對して「身を本と爲す」と答へたのは尤もなことである。

更に文殊が「身は何を本とするか」と問へるに對して維摩詰の答へは「貪慾を本と爲す」とある。是れは凡夫の身に就ていつたのである。所謂清淨の器となる爲には道を修め教へを學ば

なければならぬ。習はず學ばぬまゝの凡夫の身は慾貪によつて動くのみである。法華經の譬諭品にも凡夫の状態を説いて、

深く苦の因に著して暫くも捨つること能はず。

といひ、更に

諸苦の所因は貪慾これ本なり。

といつてある通り、貪ると惜むとの念に役せられて、絶えず争つて居るのが凡夫の常態である。勿論今までも屢々いつた通り、吾等凡夫でも佛菩薩となり得べき本性をもつて居るのであるが此の本性は磨かずして光りを發するものではない。

大空には日輪が美しく輝いて居る。又清淨なる空氣が充ち満ちて居る。此の日光も空氣も地上の凡ての物を照し、地上の凡ての物の間に通つて居て、少しも一部分の物に私するといふことはない。併しながら小さい狭い一室に戸を閉ぢて引き籠り、いつ迄も寢て居れば、日の光りは僅かに戸の隙間から射すだけであるから、室内は薄暗く又空氣も腐つて汚くなるから、自然氣分が悪くなつて來る。凡夫の状態は正しく此の通りである。小さい室に引き籠つて互ひに氣分が悪く悪いといひながら、起つて戸を明けることもせず、不愉快な毎日を送つて居る者のみが軒

を並べて住んで居るのが今の世の有様である。法華經の方便品に於て、釋尊は斯る輩に對する哀愍の念を述べられて

我知んぬ此の衆生は未だ曾て善本を修せず。堅く五慾に著しく痴愛の故に惱みを生ず。諸慾の因縁を以て三惡道に墜墮し、六趣の中に輪廻して備さに諸の苦毒を受く。受胎の微形世々に常に増長し、薄徳少福の人として衆苦に逼迫せらる。

とあるが、正しく其の通りである。吾等は人として此の世に生れ出た時に決して完全なる身心をもつて居たのではない。又吾等の生れ出たる此の世の中も決して完全なものではない。又吾等の祖先以來傳はつて來た風俗習慣等も決して完全なものではない。されば吾等は不完全なる天性を祖先より傳へ、不完全なる身心をもつて生れ出たもので、而も不完全なる世の中で養育されて行くのであることを自ら知らなければならぬ。それ故に特に佛法の如き優れたる教へによつて、不完全なる自己を漸々に完全にして行くことを努めずして、たゞ周圍の人々の爲す所をのみ見習ひ、周圍の風俗習慣に順應して行くことのみを旨とし、『成るべく世間を上手に渡つて行かう』とか、『成るべく少く骨を折つて多く利益を收めるやうにしたい』とかいふ心のみを持つて毎日を送るやうになるならば、最初に持つて生れた不完全な性質が愈々益々不完全にな

り、此の經文に『受胎の微形世々に常に増長し』とある如く、たゞ常に衆苦に責められて居るより外はなくなるのである。

宛かも小さい一室の中へ戸を閉ぢて引き籠つたやうに、身も不完全であり、心も不完全であつて、小さく一身の利害得失の打算のみに役せられて居る吾等の有様を哀愍し、佛は此の小さい室の戸を叩いて『明けよ明けよ、戸を明けて日光を入れよ、清い空氣を入れよ』と教へらるゝのである。此の聲に驚かされて戸を開くならば、室の中は明るくなり、又汚れた空氣も清い空氣と入り換るのであるが、其の戸を開くのは自分の手で開かなければならぬのである。寢て居て『外から明かけてくれ』と返事するやうな了簡ではならぬ。此の大奮發がなければ、折角の貴い教へがあつても之を學ぶことも出來ず、信ずることも出來ず、結句凡夫にして終らなければならぬ。よし窓の戸を全く明け放たずとも、少しでも戸を明けて日の光りが入つて來れば、今まで暗い所に寢て居た吾が愚かさ知らるゝと共に、戸を叩かれても未だ窓を明けぬ隣の人の愚かさを心から氣の毒に思ふやうになるであらう。維摩詰が『一切衆生を度脱するに住すべし』といつたのは此の事である。吾等是一日も早く、否一刻も早く、自ら良き縁を求むると共に、他の人にも良き縁を與へてやるやうに力を用ひなければならぬ。方便品には

法は常に無性なり、佛種は縁によりて起る。

とある。良き教法を學び得ることが良き縁である。縁次第で良くもなり又悪くもなるから「無性」といふのである。良き縁を得て、愈々心に歡びを増し、愈々努力を積めば、同じ方便品に漸々に功德を積み、大悲心を具足して皆已に佛道を成ず。

とあるやうに、終には佛の境界に到達することも出来るにちがひ無い。

時維摩詰室有一天女。見諸大人。聞所說法。便現其身。即以天華散諸菩薩大弟子上。華至諸菩薩。即皆墮落。至大弟子。便著不墮。一切弟子神力去華。不能令去。爾時天女問舍利弗。何故去華。答曰。此華不如法。是以去之。天曰。勿謂此華爲不如法。所以者何。是華無所分別。仁者自生分別想耳。若於佛法出家。有所分別。爲不如法。若無所分別。是則如法。觀諸菩薩。華不著者。已斷一切分別想。故譬如人畏時。非人得其便。如是弟子畏生死故。色聲香味觸得其便也。已離畏者。一切五欲無能爲也。結習未盡。華著身耳。結習盡者。華不著也。

(時に維摩詰の室に一天女有り。諸の大人を見、所説の法を聞きて便ち其の身を現じ、即ち天華を以て諸菩薩と大弟子との上に散ず。華諸菩薩に至れば即ち皆墮落す。大弟子に至れば便ち著きて墮ちず。一切の弟子神力をもて華を去らんとするも、去らしむること能はず。爾の時に天女舍利弗に問ふ、何が故に華を去ると。答へて曰く、此の華不如法なり、是を以て之を去ると。天曰く、此の華を謂ひて不如法と爲すこと勿れ。所以は何。是の華分別する所無し。仁者自ら分別の想を生ずるのみ。若し佛法に於て出家し分別する所有れば、不如法と爲す。若し分別する所無ければ、是れ則ち如法なり。諸の菩薩の華の著かざる者を觀るに、已に一切の分別の想を斷せるが故なり。譬へば人の畏るゝ時に非人其の便を得るが如し。是の如く弟子生死を畏るゝが故に、色聲香味觸其の便を得るなり。已に畏を離れたる者には一切の五慾能く爲すこと無し。結習未だ盡さざれば華身に著くのみ。結習盡きたる者には華著かざるなりと。)

菩薩道に就ての問答に一段落を告げ、此に至つて又局面に一轉換が起る。此よりは其の所謂菩薩道の實行は、世間の實生活と隔絶したるものでなく、如何なる地位、如何なる境遇に在つても出来るものであることを示すのである。而して之が爲に妙齡の佳人を黠出したのは非常に面白い。概していへば女人は男子よりも機根の下れる者と考へられて居る。又年少の者は思慮

分別の足らぬものと考へられて居る。然るに此處では年少の一婦人が大乘の教へに就て縦横に論辯し、釋尊門下の先輩として推されたる舍利弗をして舌を卷いて感嘆せしめたのである。此の事は大に注意すべきことである。眞に大乘を學んで覺を得るといふ上に於て、男女の別のあらう筈もなく、又老若の差のあらう筈もない。能く學び能く信じ、佛の御心と吾が心と通じあふやうになれば、誰でも皆佛の境界に近づき得べきに定まつて居る。若しそれが出來ないとなれば

一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。(法華經)

と仰せられた佛の御言葉は反故になつてしまふ。一切の衆といふ中に女人の含まれぬ筈はない又老人のみに限らるゝ筈は勿論ない。然るに種々の經論の中に婦人を罪惡の本であるかの如くに説かれて居る場合が少くない。それは皆方便の教へに外ならぬのである。

其の方便には大體に於て二種ある。其の一は青年の比丘等の墮落を防がんか爲である。其の二は婦人等に反省を與へんが爲である。出家して佛法を學ぼうといふのは特志の者であるには相違ないが、其の心中の煩惱が容易に掃ひ盡されるものではないから、時としては過失を犯すことを免れぬ。殊に青年の輩に在つて陥り易いのは色慾の過である。釋尊が此の事に就て如何

に苦心せられたかは、戒律に關する書を讀んで見ると實に能く分る。その苦心は實に勿體ないほどである。實は肉食を禁せられたり、五葷を食ふことを禁せられたのも、其の重大なる理由の一として、卑しい慾情を發せしめぬことが考へられて居るやうである。

大火人を焼くも是れ猶ほ近づくべし。清風形無きも是れ亦捉ふべし。虺蛇毒を含むも猶ほ亦觸れつべし。女人の心は實を得べからず。(智度論)

といふやうに嚴しく戒められて、女人に近づかぬやうに心を用ゐられたのは、専ら青年の比丘の中途にして業を廢することを防がんが爲であつたと思はれる。又法華文句の中に記する所に依ると、

阿難佛に問ひたてまつる。如來の滅後に女人を見ること云何せん。佛言はく、與に相見ること勿れ。設ひ見るとも共に語ることを勿れ。設ひ共に語るとも當に專心に佛を念すべし。

とあるが、佛の居らるゝ間は兎も角も、佛の入滅後になつては特に僧侶の墮落が心配だと思はれて、斯く戒められたものであらう。

第二の理由として擧ぐべきは、佛が婦人に反省を促さんが爲に、殊更に訶責の言を出されたことで、これは佛の大慈悲心の發露として見るべきである。何れの國でもさうであるが、特に

當時の印度などでは婦人の教養の程度が男子に比して著しく低かつたやうである。男子は婦人よりも多く責任ある地位に立ち、多くの困難なる仕事を引受け、社會の表面に立つて活動して居たのであるから、概していへば婦人よりも教養があり、又婦人よりも上の地位を得て居た筈である。婦人は男子よりも低い地位に甘んじなければならず、又概して教養も足らぬ故に、其の心が僻んだり、ねじくれたりして來るのも據ないことである。佛は勿論一切衆生をして共に佛の境界に到達せしめんとし御心であるが、それには皆共に菩薩の道を勵ましめなければならぬ。然るに婦人は概して思慮分別も淺く、又其の心が僻んで居るのであるから、菩薩道を實行しやうといふやうな健氣な心を起し難いのである。佛は深く之を哀愍せられ、婦人等をして大に反省し、又大に發憤して其の性の僻める所を去り、男子と共に慈悲を行じ、世のため人のために力を盡さしめやうとの御心から、殊更に婦人に對する訶責の語をも發せられたのである。されば眞に佛法に歸依した婦人に對しては、少しも男子と差別することなく、其の言ふことをも、其の行ふことをも、一切衆生の範として推稱せられた。それは前にもいつた通り、勝鬘夫人の言を聽かれて、全く佛の御心と一致したるものであるとまで稱讚せられ、長老阿難を召し出して「今此の勝鬘のいつたことを普く世間に説き弘めよ」と命せられたる例によつても能く

分ることである。されば涅槃經に

一切の女人は皆是れ衆惡の所住の處なり。

とある如き語も、隨分多く種々の經典の中にあるけれども、法華經には龍王の女を稱揚して衆生を慈念すること猶ほ赤子の如く、功德具足して、心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり慈悲仁讓志意和雅にして能く菩提に至れり。

とまでいつてある。殊に人の母としての婦人の恩愛の情の貴きことは諸經の中に屢々説かれたる所で、心地觀經に

其の恩德は天に聳ゆる山岳も及ばず、大海もなほ淺し。若し悲母の教に順隨して違ふことなれば諸天之を護念し。福德盡くること無かるべし。

といひ、若くは

諸の世間に於て何者か最も富み、何者か最も貧しき。悲母堂に在る、之を名けて富めりとし悲母在らざる、之を名けて貧しとす。悲母在る時を名けて日中とし、悲母死する時を名けて日没とす。悲母在る時を名けて月明とし、悲母亡き時を名けて闇夜とす。

とあるが如きは其の一例である。

若し母が子を愛する心を擴めて天下の人に及ぼせば即ち大慈大悲の働きも其の中から生み出されるわけである。婦人たるもの決して自ら輕んずべからず、又男子たるものも妄りに婦人を輕んじてはならぬ筈である。されば夫婦の道を教へらるゝ場合でも、佛は妻の夫を敬ふべきことを説かるゝと共に、夫の妻に對する心得としても

正しき心をもて之を敬ひ、其の意を恨まず、他情有らず。(善生子經)

といふやうに教へられた。又増一阿含經の中には阿那邠邸長者の女の事が記されてある。此の長者の女は至て心正しく姿も端麗であつたので、隣國の滿財長者は佛の御許しを得て其の長子の爲に之を娶つた。然るに其の國の制度として他國から女を娶ることは禁制であつて、若し強ひて他國から娶る場合には六千人の婆羅門に饗應をしなければならぬことに定まつて居た。是れは實に夥しい費用であつた。併し滿財長者は「吾が子の爲に良き妻を得るのであるから、如何なる費用も惜むには足らぬ」といひ、六千人の婆羅門を招くことにした。其の婆羅門の人々は半身を露はし、極めて無作法の姿をして長者の家へ來た。長者は其の嫁をして彼等を迎へ、彼等を拜せしめんとしたが、嫁は斷然之を拒絶し

佛常に我等に告げたまはく、慚愧無き者は父母兄弟宗族五親を分別せずと。彼の婆羅門は慚

愧無き者なり、我は禮拜せず。

といつた。婆羅門の人々は大に怒り直ちに歸り去つた。此等の婆羅門は國內に於て大に勢力のある者であるから、如何なる祟りがあるかも知れぬと、滿財長者は非常に心配して居た。時に修拔といふ婆羅門が偶然來訪したので、長者は事の仔細を語つて、如何にすべきかと尋ねたが修拔は思慮深き人であつたから之に答へて「少しも心配するには及ばぬ。佛は大なる威徳のある方であるから、六千人の者共は之を如何ともすることは出來まい」といつた。長者は之を聞いて大に喜び、その嫁に「汝の師なる佛を迎へ來れ」と命じた。やがて佛は人々に迎へられて滿財長者の家に入り、長者及び近隣の人々の爲に説法せられた。六千人の婆羅門は此の事を聞き、

沙門佛今此の國に入れり、我等速かに此の國を去らん。

とて、禽獸の如くに馳せて皆國外に去つたといふ。此の話は一少女の信心の力によつて一家が幸福になつたのみならず、其の國にまでも大なる影響を及ぼしたことを示すものである。婦人といふものが決して輕んずべきものでないことを證すべき適例といへるであらう。此等の事を彼此考へて來ると、天女が大乘の教へを説いて舍利弗を屈服せしめたといふのも、別段不思議

ともいへぬわけである。

○諸の大人 菩薩は將來佛となつて一切衆生を救護せんとの心を有するものであるから、之を稱して『大心の士』といひ、それを略して『大士』ともいふのであるが、此處では菩薩のみならず、舍利弗等の大弟子までを併せて大人といつたのであらう。○天華を以て 讚嘆若くは感謝の意をあらはす爲に花を散ずるといふことは印度の昔からの習はしで、今もなほ廢れずに居る。佛の説法の時に天上から華が降つたといふやうなことは多くの經論の中に見ゆる所である。○皆墮落す 諸菩薩は執著の念がないから、花も其の身に著かずして直ちに落ちてしまふのである。○不如法なり 出家の人は一切の飾りを去るべきものである。又一切の美しい物に執著をもたぬ筈である。然るに美しい花が其の身に著いて離れぬのは、出家に似合はしからぬことであるから之を去らんとしたのである。○是の華分別する所無し 華には親疎好惡等の情がないのであるから、或人の身には著かぬといふやうな差別はないわけである。花を指して如法であるの不如法であるのといふのは間違つて居る。○自ら分別の想を生ずる 出家は一切の執著を去るべきものであると知りながら、心の底には未だ親疎を分ち好惡を分つの念が去り盡さずにあるのである。それ故に其の心が自ら華に感じて、華は身について

離れぬのである。○分別する所有れば不如法 佛は平等の大慈悲を以て一切衆生に接せらるゝのである。出家して佛弟子となつた者は、勿論佛の御心を以て吾が心としなければならぬ。然るに種々の分別を生じ、好惡を分ち親疎を分つが如きは出家の身に似合はしからぬことである。○一切の分別の想を斷せる 世間の利害得失に心を惹かれざるは勿論のこと、惡人と雖も之を憎まず愚者と雖も之を輕んぜず、盡く皆慈悲の念を以て之に接し、共に佛道に入らしめんとして力を盡すのである。此の如きを一切の分別の想を斷せる者といふべきである。○非人其の便を得 非人とは人の姿に似て實は人ならぬもの、例へば惡魔とか修羅とかのことである。其の心に於て畏るゝ所なき者は、如何なる惡魔も其の隙を窺つて障礙を興ふことは出來ぬ。○結習未だ盡きず 種々の煩惱のことを結といふのは、吾等の心を結縛して自由を得しめぬの意である。其の煩惱を制して起らしめぬやうにしても、煩惱を起すべき心の傾向は容易に除き去られぬものである。之を稱して結習未だ盡きずといふのである。

此の一節に於て大乘と小乗との差がまことに明かに示されてある。小乗を學んだのみでは未だ煩惱を除き盡すことは出來ぬ。大乘を學ぶこと久しきに及んで初めて煩惱を除き盡すことが出来る。煩惱の數は非常に多いけれども、要するに小さき自己に執著するのが其の根本である。

小乗の教へを學んで一切世間の名利を厭ひ、世俗を離れて獨り自ら潔くするものは、全く執著のないやうに見えるが、世間の凡俗と自己との間に嚴しい差別を立て、獨り自ら高しとして満足を感じるのは、全く執著を離れ盡したものとはいはれぬ。凡夫が利を求むるは富の力に於て自己が他の人を凌がんとするの念より起る。又其の名を求め勢力を求め地位を求むるのも、其等のもによつて他の人を壓倒せんとするの念に出るもので、之によつて種々の紛争が生ずるのである。佛法を學んだ者が若し自己が聖者の流に入ることが出来たとて、自己を世間の凡夫と嚴しく區別し、世間の凡夫が種々の苦みを受けて居るのを冷然として見下して居るならば、彼の名を求め利を求むるの徒と多く擇む所なきものではないか。羅什は

二種の習あり。一は結習なり。一は佛法の中の愛習なり。

といつたが、小乗を學んだのみにして、未だ世間の凡夫を哀愍し、之が救護の爲に力を盡さうといふ念の無いものは、なほ執著を脱し得ぬ者として排斥されなければならぬのである。勿論如何に高德の菩薩と雖も、佛の境界に到達せぬ間は全く煩惱が無くなつたとはいへぬけれども、自ら佛の御心を以て吾が心となし、常に衆生を救護することを其の志として居るのであるから、其の煩惱は次第に勢力を失ひ、更に累ひとならぬのである。羅什が

菩薩は結習ありと雖も器淨きを以ての故に習氣起らざるなり。

といつたのは能く當つて居る。

大乘を學ぶこと久しきものは其の心が次第に濶くなつて、何事にも囚はれぬやうになるのである。名利を求むるに汲々たるは勿論見苦しいことであるが、又故らに名利を避けんとするは固陋の至である。名利に囚はれぬ心をもつて居れば富むも亦よし、貧しきも亦よし、貴きも亦よし賤しきも亦よし。必ずしも求むるに及ばず、又必ずしも避くるに及ばぬわけである。人に稱揚せられたいと望むのは卑しいが、人の感謝するのを強めて排斥するにも及ばぬことである。多くの經典の中に、佛を稱讚し佛に感謝する者があつた場合には、佛は決して之を拒絶せられず、其の感謝の語を受けて満足して居らるゝさまが寫し出されてある。佛たるものが稱讚せられ感謝されたとして、之が爲に特別の悦びを感ぜられやう筈はないが、心から佛に感謝する程度になつた者は、佛の御心が充分に能く分つたもので、即ち其の久しき間の修行の効果があらはれて來たのであるから、佛は御自身の爲よりも、寧ろ彼の爲に之を悦ばるゝのである。孔子の如きも顔淵を評して、

回や我を助くる者にあらず、吾が言に於て悦ばざる所無し。

といった。孔子の言に一々心服して更に質問などをせぬから、孔子は其の爲に特に工夫を疑すやうなことも無いので、彼は我を助くる者ではないと評されたのであらう。然るに朱子は之を解釋して

顔子は聖人の言に於て默識心通し、疑問する所なし。故に夫子然かいふなり。其の辭憾むこと有るが如くにして、其の實は乃ち深く之を喜ぶなり。

といった。是れは實際孔子の心中を能く見抜いた評である。孔子は顔子の如き弟子を有し、顔子の如き人に深く心服せられて居るのに満足を感じられたのである。孔子は聖人であるから他人に稱讃せられて悦ぶことはないが、併し久しい間教育を施したかひがあつて、顔子が孔子の心をスツカリ明かにするだけの力を有するやうになつたのを見ては満足を感じられた筈である。

今此の天女が諸菩薩及び大弟子の上に華を散じたのは、其の相共に大乘の教へに就て談論する所を聞いて歸依の念を起したので、其の意を現はさんが爲であつた。それは畢竟佛法を重んじ佛法を仰ぐの情より出るものであるから、維摩をはじめ諸菩薩は之に對して満足を感じたに相違ない。若し釋尊が其の座に居られたなら、同じく満足を感じられたことであらう。併しな

がら佛菩薩は天女が大乘の眞の精神を知り、之に歸依する念を起すまでになつたことを悦ばるゝのであつて、之によつて自ら得意を感じるといふやうなことは決して無い。彼の天女の散じた花が諸菩薩の身に著かずして直ちに落ちたといふのは、天女の志を受けて、而も之に執著せぬが爲である。然るに舍利弗迦葉等の人々は未だ達せざる所があるから、華を避けんとして却て華を去ることが出来なかつたのである。道生が

夫れ飾華を制するは本其の好むの情を除かんと欲してなり。苟くも好飾に情無くんば、終日己に在りとも豈に犯すことあらんや。

といったのは道理ある言である。出家の人は美しい色香に心を惹かれぬやうに努めなければならぬのであるが、若し其の心に全く執著が無くなれば、如何なる美色に對し、如何なる美聲を聞いても何の影響をも受けぬ筈である。今天女が折角に讚嘆の情をあらはさんが爲に華を散じたのに對して、之を避けんと思ふのは、其の心の底になほ執著の存するあつて、自ら之を恐るゝが爲である。天女が「是の華分別する所無し、仁者自ら分別の想を生ずるのみ」といつたのは誠に痛快なる批判である。

又其の言に「己に畏れを離るゝ者は一切の五慾能く爲すこと無し」とあるも大に味ふべきも

のである。此處に「畏れあり」といふは、其の爲に影響せらるゝ畏れのあることである。若し其の畏れがなければ、五慾を動すべき物に對しても平然として居らるゝわけで、孔子が子路に對して

堅きをいはずや、磨すれども磷がず。白きをいはずや涅すれども緇まらず。

といはれたのも此の意である。但し自分の心の執著の除き切れぬを嘆いて、如何に獨りでクヨクヨと考へて居ても、容易に其の弊が除き去らるゝものでは無い。常に務めて菩薩道の實行に力を盡し、世の苦めるもの惱める者を救ふことに努めて居れば其の結果として自然に心中の執著が薄らいで行くのである。前にも度々引いた語であるが、

衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。(觀普賢經)

といふは名言である。霜露を一々掃ひ去らうとしても出來ることではない、智慧の日の輝き來ると共に霜露は自ら消え去るのである。

舍利弗言。天止此室其已久如。答曰。我止此室。如耆年解脫。舍利弗言。止此久耶。天曰。耆年解脫亦何如久。舍利弗默然不答。天曰。如何耆舊大智而默。答曰。解脫者無所言說。故吾於是不知所云。天曰。言說文字皆解脫相。所以者何。解脫者不内不外。不在兩間。文字亦不内不外。不在兩間。是故舍利弗。無離文字說解脫也。

所以者何。一切諸法是解脫相。舍利弗言。不復以離姪怒癡爲解脫乎。天曰。佛爲增上慢人。說離姪怒癡爲解脫耳。若無增上慢者。佛說姪怒癡性卽是解脫。舍利弗言。善哉善哉。天女汝何所得。以何爲證。辯乃如是。天曰。我無得無證。故辯如是。所以者何。若有得有證者。卽於佛法爲增上慢。

(舍利弗言く、天此の室に止まること其れ已に久しきやと。答へて曰く、我此の室に止まること耆年の解脫の如しと。舍利弗言く、此に止まること久しきやと。天曰く耆年の解脫亦何如か久しきと。舍利弗默然として答へず。天曰く、如何ぞ耆舊大智にして默せると。答へて曰く、解脫は言說する所無し。故に我是に於て云ふ所を知らずと。天曰く、言說文字皆解脫の相なり。所以は何。解脫は内ならず、外ならず、兩間に在らず。文字も亦内ならず外ならず。兩間に在らず、是故に舍利弗、文字を離れて解脫を説くこと無かれ。所以は何。一切諸法は是れ解脫の相なればなりと。舍利弗言く、復た姪怒癡を離るゝを以て解脫と爲さざらんやと。天曰く、佛は増上慢の人の爲に、姪怒癡を離るゝを解脫と爲すと説きたまふのみ。若し増上

慢無き者には姪怒癡の性、即ち解脱なりと説きたまふと。舍利弗言く、善哉善哉、天女汝何の得る所ぞ。何を以て證と爲して辯ずること乃ち是の如くなる。天曰く、我得ること無く證すること無し。故に辯ずることは是の如し。所以は何若し得ること有り證すること有れば、即ち佛法に於て増上慢たればなりと。

天女のいふ所は極めて徹底的であつて、大智と稱せられた舍利弗も言を容るゝ所がなかつた。因て更に端を改めて、天女が維摩詰の教へを受くること既に久しきや否やを問ふのである。舍利弗は今まで文殊と維摩との問答を聞いて啓發せらるゝ所多く、今更ながら維摩の學徳共に秀でたるに敬服したのである。然るに今此の室の中に突然姿を現はしたる妙齡の一人婦人がまた舍利弗等を驚かすやうな説を吐いたのであるから、是れは必ず維摩の薰陶を受くること既に久しきものであらうと推察したわけである。然るに天女の答ふる所は更に一步を進め、菩薩の志とすべき所を説くこと更に親切である。殊に其の増上慢の弊を指摘せる語はさまで長くはないけれども、佛法を學ぶ者には極めて貴い教訓である。増上慢とは自ら知り盡さるることを、知り盡せるが如くに信じて慢心を懐くことで、俱舍論の中に未だ證得せざる殊勝の徳の中に於て、已に證得せりと謂へるを増上慢と名く。

とあるので能く悉されて居る。法華經の方便品にも此の増上慢の徒のことが出て居る。釋尊は舍利弗等が三たびも懇請したる誠心を認められて、此より佛が此の世に出現せられたる因縁を説き出さんとせられたが、その時五千人の者が坐を立つて退いた。其の退いた理由を經文には此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證得せざるを證せりと謂へり。此の如き失あり。是を以て住まらず。

とある。彼等は今までに學び得たる所を以て足れりと爲し、此より以上に何も聽聞する必要はないと思つたので、其の坐を立つたのである。釋尊は彼等の立ち去るのを默然として制止せられなかつた。而して

舍利弗、是の如き増上慢の人は退くも亦佳し。

と仰せられた。佛は一切衆生を哀愍し、平等の御心を以て法を説かるゝのであるから、此の増上慢の者共を憎まるゝ筈は勿論ない。然るに彼等の去るに任せて、之を止められなかつたのは深き意義がなければならぬ。察するに釋尊は彼等が他日後悔して、また道を求めて來べきことを豫め洞見して居られたのであらう。今此處で彼等を引止めて強めて聽聞せしむるよりも、彼等が今より後に種々の困難にあつて之を解決すべき途に窮し、その時初めて自ら力の足らぬ

ことに氣がつき、其の慢心を悔んで再び教へを求むるに至るのを待つ方が良いと思ひ定められたのであらう。即ち其の教へざるは實に大に教ゆる所以であつたと思はれる。

又同じ法華經の勸持品に、末世に及んで佛の正法を世に弘めんとする者の一身に種々なる迫害の集り來るべきを説かれた中にも、

惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。とある。末世になれば世間が非常に忙しくなり、靜かに自己を反省する暇が少くなつて來るから、たとへ教へを學び道を求むるにしても、深くも考へて見ずに自分で勝手な解釋を施し、それで佛の御眞意を得たるものゝ如くに思ふ者が多くなるのは免れ難い事であらう。斯る増上慢の者は佛の正道の弘まる妨げとなるものであるから大に戒めなければならぬのである。孔子が紫の朱を奪ふを惡む、鄭聲の雅樂を亂るを惡む。

といひ、又

道に聽きて塗に説くは徳をこれ棄つるなり。

といはれたのは道理である。佛意に合せざる佛法を世に弘むるものがあれば、正しい佛法は之が爲に遮られて世に弘まらぬ。譬へば老いたる馬が舊い車を牽いて、ヨロ／＼と道の眞中を行

けば、後から如何に速度の勝つた自動車が行つても、路は更にはか取らぬであらう。若し吾等が増上慢の病に罹つて自ら之に氣付かず、正しい佛法の世に弘まる妨げをして居るならば、佛に對して大なる罪を犯して居るわけである。互ひに深く戒慎しなければならぬ。

○此の室に 其の説く所によつて推するに、此の天女は深く大乘の妙旨に通せる者である。故に其の如何に久しく此の室に止まりて、維摩の教へを受けたかを問ふのである。維摩以外に此の天女を教化して斯くまでの悟りを得しむるものがあらうとは思はれぬ。○耆年の解脱の如し耆年とは長老といふと同様の意で、此處では舍利弗を指していふのである。舍利弗が釋尊の御弟子中の長老として重んぜられて居たことは、前にもいつた通りである。又此處に解脱といふのは左まで深い意味でなく、凡夫の境界を脱して聖者の列に入つたことである。舍利弗は未だ菩薩道を學び盡したのではないが、聲聞としては最もすぐれたる人であつた。○此に止まること 天女のいふ所の意味が未だ能く分らなかつたので、舍利弗は重ねて問うたのである。

○默然として答へず 何時から煩惱を離れたかと問はれても、ハッキリと答へられるものではない。又久しく學んだから必ず悟れると定まつたものでもない。舍利弗自身でも「我は解脱を得てより以來若干年である」などいふ記憶はなく、宛かも暗闇がいつか少しづつ明くなる

やうに、いつとは無しに煩惱が消えて行つたのである。○言説する所無し 心に得たる所の悟りを言語や文字を以て現はし盡すことの出来るわけは無い。○言説文字皆解脱の相 絶対の理は言語文字によつて現はし得らるゝものではない。併し其の絶対の理は佛菩薩の吾等に與へらるゝ貴い教へによつてのみ窺ひ得らるゝのである。而して其の貴い教へは言語文字に依らずして傳へらるゝものではない。斯う考へて見ると言語文字はまことに貴ぶべきものである。又吾等が自ら佛法を學び得たる悦びを感じ、他人を誘うて同じ悦びを味はしめんとするには、言語文字の力に依らなければならぬ。言語や文字は絶対の理を現はし盡すことの出来るものであるが、さりとて言語文字を離れて絶対の理を觀ずることは出来ぬのである。○解脱は内ならず外ならず 佛の貴い教へを深く心に信じ、之を日常生活の上に於て實行することによつて、眞の解脱が得らるゝのである。たゞ心に信ずるのみで、實行が之に伴はなければ決して悟り得らるゝものではない。故に内ならずといふのである。さりながら心に深く信ずる所なくして、實行に努むるといふことの出来るものではない。故に外ならずといふのである。内外一致の結果として解脱が得らるゝのである。其の中間に在るといふわけではない。○文字も亦内ならず外ならず 心に思ふことが文字に現はれて、初めて文字に深い意義がある。文字のみでは詰らぬも

のである。併し文字に現はれなければ心にのみ思つても之を人に傳へることは出来ぬ。内外相應じて文字の文字たるかひがあるのである。○一切諸法は是れ解脱の相 一草一木の姿にも絶対の理が現はれて居る。風雨寒暑一として天地の妙用を示すものならぬは無い。吾等の見聞する所のものは盡く皆佛の説法の一部であるとして解すべきである。斯く解する時に、其の凡てが吾等の解脱を得べき助けとならぬものは無いといふことが明かになる。言語文字も亦一切諸法の中のものである。されば僧肇は「萬法殊なりと雖も解脱の相にあらざる無し。豈に文字のみ獨り異らんや」といつた。○姪怒癡を離るゝを以て 貪瞋癡といふと同じことで、是れが所謂三毒である。種々無量の煩惱は此の三者を本として生じ來るのである。○増上慢の人の爲に 増上慢の者は自ら佛の御眞意に達し得たりと信じ、而も實は充分に解し得ぬのであるから、一切の煩惱を掃ひ去ることが出来ぬのである。故に佛は此等の人々の爲に所謂三毒を除かなければ解脱は得られぬと説き、其の反省を促されたのである。○増上慢無き者には 増上慢無き者は假令自ら解し得たる所があつても、之を以て自ら足れりとせず、佛の境界に到達せぬうちは決して修行を怠らぬ者である。此の如き人々の爲には、煩惱を起す心が即ち佛智を具ふる心であるといふことを明さるゝのである。○何を以て證を爲して 證とは即ち證悟の義である。「如

何なる悟りを得て』といふと同じ意である。○得ること無く證すること無し 佛の境界に到達せぬ間は自ら満足せぬのである。故に假令得る所ありとも自ら得たりとは思はず、悟る所ありとも自ら悟れりとは思はぬのである。○佛法に於て増上慢 若し我は得る所あり、我は證する所ありと思へば、心が緩んで修行を怠ることになる。それでは折角佛弟子となつて佛法を學んだかひの無いもので、即ち増上慢に陥つてしまふのである。

此の一段に於ては二つの最も大切なことが示されて居る。其の一は日常の生活を離れて佛法が存在するのではないといふこと。其の二は苟くも佛法を學ぶものは、必ず佛の境界に到達することを理想としなければならぬといふことである。此の二つは共に極めて大切なことなのであるが、動もすれば其の一方に偏して一方を忘れ易い。人の心は兎角に偏し易いものである。

舜帝が位を禹に傳ふる時の語に

人心惟危じんしんご、道心惟微だうしんご。惟精ご、惟一ご、允みことに其の中ちゆうごを執とれ。

とあるは古來能く知られた所であるが、宋の蔡沈は之に解釋を下して、

心は人の知覺、中に主にして外に應ずるものなり。其の形氣に發するものを指していへば則ち之を人心と謂ひ、其の義理に發するものを指していへば則ち之を道心と謂ふ。人心は私な

り易くして公なり難し、故に危し。道心は明なり難くして昧み易し、故に微なり。惟だ能く精にして以て之を察し。而して形氣の私を雜へず、一にして以て之を守り、而して義理の正しきに純なれば、道心常に之が主と爲りて人心命を聽く。則ち危き者安く、微なる者著はれ動靜云爲自ら過不及の差なく、而して信に能く其の中を執る。

といつた。吾等の心の中に於て二つのものが常に對立して居ることは今までも屢々いつた。佛教の方の語でいへば、それが煩惱と佛性とであるが、儒教の方の語でいへば即ち人心と道心とである。其の人心が道心に制せられ、道心が充分に其の力を發揮するやうになれば、其の言ふ所も行ふ所も能く中を得て、決して一方に偏することは無いのである。

然るに凡夫の常として何れも性僻があつて、何事も一方に偏するを免れぬ。されば其の道を求め教へを學ぶに當つても、或者は徒らに高遠なる理を求むるに偏して、實行に疎くなり、又或者は其の學んだ所を直ちに實際に行ふことにのみ急にして、深く究竟の理を追求するといふ點に缺くる所がある。此等は何れも一方に偏せるものである。又或者は自己と佛との距離のあまりに遠く、自己の缺點のあまりに多きことをのみ嘆いて、進取の氣象に於て乏しき所がある又或者は佛法を學び得たることを深く悦ぶのあまりに、全く自分と世間の者とは類のちがふ者

であると考へ、自ら反省して自己の缺點を知らんとする用意に於て足らぬ所がある。此等も亦それ／＼一方に偏したるものである。併し大乘の精神が能く分れば、必ず中庸の道に依るやうになるのである。佛法は吾等の實生活を離れて存在するものではないが、又此の實生活にのみ限られたものでもない。例へば此の地上の草木鳥獸山川國土は一として太陽の光りに浴せぬものとは無い。吾等人類はいふ迄もないことである。斯く吾等が身に受けて居る日光以外に別に日光があるわけでは無い。併し吾等の身に受けて得るのが日光の全部ではなく、日光は吾等の想像の及ばぬ所までも遠く照り渡つて居るのである。自ら日光に浴して居るのに氣附かずして、別に日光を求むるは甚だ愚なことであるが、此の地上を照すのみが太陽の働きの全部であると思ふのも亦愚の至である。佛法を學ぶに當つても、此等の點に深く意を用ゐなければならぬ。

今此の天女が『言說文字皆解脱の相なり』といひ、更に言說文字のみならず、『一切諸法は是れ解脱の相』といったのは、吾等の實生活を離れて別に佛法を求めんとするものゝ妄を啓く力ある説である。吾等は眼前の一事一物の中に至道の存することを知り、妙理の存することを知らなければならぬ。眼前の事物の中から貴い佛の教へを見出さなければならぬ。而して吾等

の日々の業を勵み、日々の務めを果すことによつて吾等の本來具有せる佛性を發揮し、此の世を淨土とするために聊かつゝなりとも貢獻して行かうといふ覺悟をもつべきである。勿論此の如き精神を長養し持續して行くためには、忙しい中に僅かの暇を竊んでなりとも常に法を聞く（若くは讀む）ことが肝要である。涅槃經の中には、

四種の法ありて大涅槃の爲に近き因となる。一には善友に親近するなり。二には専心に法を聽くなり。三には懸念思惟するなり。四には法の如く修行するなり。聞を以ての故に大涅槃を得るにはあらず。修習するを以ての故に大涅槃を得るなり。

とある。大涅槃を得るとは即ち眞の覺を得ることである。それには法を聞くことも必要であるが、其の聞いた所を實行することが最も大切である。

斯く實行は最も大切のものであるが、實行を重んずるのあまりに、唯だ實行し易いことのみを學び、深入りせぬといふ弊が往々にして見らるゝやうである。宗教の弊害が常に此の邊から生じて來る。教へを説く者もたゞ一般の人々の實行し易いことのみを説き、教へを聽く者も容易に實行し得べきことのみを喜んで聞く。斯ういふ風ではいつ迄も佛の理想とせられたことが實現されやう筈はない。吾等は一步一步と歩みを進めて行く間に、眼を遠い高嶺の頂につけて

居なければならぬ。吾等は今凡夫であるけれども佛と成り得べきものである。それは吾等が勝手に考へたことではなく、佛が吾等に對して屢々仰せられたことである。其の實例は今までも幾度となく引いたが、梵網經の中にも

我は是れ已に成せる佛なり、汝は是れ當に成すべき佛なり。

とある如きは最も明白なる言ひ方である。佛と成り得べき本性をもつて居ながら、いつ迄も佛の境界に近づくことの出来ぬのは、全く自己の努力の足らぬためであると常に自ら反省しなければならぬ。法華經の中に出て居る不輕菩薩のことは以前にも引いたが、其の行きあふ人々を皆禮拜して

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以は何、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつたのは、單に人々の皆具有して居る所の佛性を重んずるといふ意義のみではなかつた。それは實に行きあふ人々に對する嚴しい警告であつた。『汝等は皆貴い佛性を具へて居る。汝等は皆菩薩道を行じて怠らなければ、必ず佛と成り得べきものである。然るにそれだけの努力を積まぬ。爲に、いつ迄も凡夫で居るのは惜いことではないか。折角持つて居る貴い寶を空しく

してはすむまい』といふ意で之を合掌禮拜したのだといふことである。

吾等は自ら輕んじてはならぬが、又輕々しく自ら満足してもならぬ。たとへ吾等の言行が周圍の人々に仰ぎ見らるゝほど立派なものになつても、佛の境界に到達するまでは決して自ら足れりとしてはならぬ筈である。天女が「若し得ること有り證すること有れば、即ち佛法に於て増上慢たればなり」といつたのは實に此の意である。自ら輕んずると自ら慢ずるとは、一見して相反することの如くに見えるが、實は其の根本に於て相通ずるものである。若し「我は佛ともなり得べきものである」と知つて、常に自ら重んずることを失はぬならば、たとへ周圍の人々から如何に持てはやされても「此のくらゐの事で満足してはならぬ」といふ考へが起る筈である。自ら慢ずるものは畢竟自ら任ずる所の大ならざるものである。天台大師は金陵の瓦官寺に住し、大乘の經論を講じて夥しい歸依者を得、非常なる聲望を博したのであるが、三十八歳の九月斷然此の得意の生活をやめ、天台山に入つて法華の研鑽に全力を注いだ。其の山中の生活は以前と全く異り、至て貧しいものであつて、時には食物が全く缺乏し橡の實を拾うて飢を凌ぐことさへあつた。此の苦勞によつて法華經が普く東方に流布する機運が作られたのである。若し天台大師が金陵に於ける得意の生活に満足し、ウカ／＼として其の晩年を送つたなら

ば、法華經はいつ迄も世に流布すること無くして終つたかも知れぬ。前にも傳教大師が浅きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり。浅きを去りて深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す。

といつたことを引用したが、天台大師が易きを捨て難きに就いたのは全く増上慢の念が無かつたからである。大師が多く歸依者を得ても更に自ら慢ずる所なかつたのは、眞の佛法を世に弘めやう、佛の御心に一致するやうな教へを世に弘めやうといふ大なる理想をもち、いつも自ら重んじて居られたからである。

前に引いた法華經方便品に出たる五千人の増上慢の徒に就て、釋尊はなほ次の如くに之を評して居らるゝのである。

比丘比丘尼の増上慢を懐くこと有る、優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる、是の如き四衆等其の數五千有り。自ら其の過を見ず、戒に於て缺漏有りて、其の瑕疵を護り惜む。是の小智は已に出ぬ。

彼等は自己の行に於て不完全な所がありながら敢て之を自ら改めんとはせず、却て自ら完全

なるものゝ如くに考へて、之に安んじて居るのである。此の如き徒に對して其の缺點を數へて之を改めんことを勸むる時は、往々にして怒りを發し、其の親切なる忠告に報ゆるに罵詈を以てし迫害を以てすることがある。末世に及んでは此の如き徒が多い。之を忍んで佛の正法を弘むる者こそ眞の佛弟子と稱せらるべきものであつて、

當に知るべし是の人は如來と共に宿するなり。如來の手をもて其の頭を摩でたまふことを爲ん。(法師品)

とまで釋尊が稱揚せられたのは尤もである。吾等は決して困難を恐れてはならぬ。其の苦が多ければ多いほど、其の功德も亦大なるものである。

舍利弗問天。汝於三乘爲何志求。天曰。以聲聞法化衆生故。我爲聲聞。以因緣法化衆生故。我爲辟支佛。以大悲法化衆生故。我爲大乘。舍利弗。如人入瞻葡林。唯嗅瞻葡。不嗅餘香。如是若入此室。但聞佛功德之香。不樂聞聲聞辟支佛功德香也。舍利弗。其有釋梵四天王諸天龍鬼神等。入此室者。聞斯上人講說正法。皆樂佛功德之香。發心而出。舍利弗。吾止此室十有二年。初不聞說聲聞辟

支佛法。但聞菩薩大慈大悲。不可思議諸佛之法。舍利弗。此室常現八未曾有難得之法。何等爲八。此室常以金色光照。晝夜無異。不以日月所照爲明。是爲一未曾有難得之法。此室入者。不爲諸垢之所惱也。是爲二未曾有難得之法。此室常有釋梵四天王他方菩薩。來會不絕。是爲三未曾有難得之法。此室常說六波羅蜜不退轉法。是爲四未曾有難得之法。此室常作天人第一之樂。絃出無量法化之聲。是爲五未曾有難得之法。此室有四大藏。衆寶積滿。周窮濟乏。求得無盡。是爲六未曾有難得之法。此室釋迦牟尼佛。阿彌陀佛。阿閼佛。寶德寶炎寶月。寶嚴難勝。師子響。一切利成。如是等十方無量諸佛。是上人念時。卽皆爲來。廣說諸佛秘要法藏。說已還去。是爲七未曾有難得之法。此室一切諸天嚴飾宮殿。諸佛淨土。皆於中現。是爲八未曾有難得之法。舍利弗。此室常現八未曾有難得之法。誰有見斯不思議事。而復樂於聲聞法乎。

(舍利弗天に問ふ、汝三乘に於て何の志求をか爲せると。天曰く、聲聞の法を以て衆生を化するが故に、我聲聞と爲る。因縁の法を以て衆生を化するが故に、我辟支佛と爲る。大悲の法

を以て衆生を化するが故に、我大乘と爲る。舍利弗、人の瞻蔔林に入りて、唯だ瞻蔔を翫ぎて餘香を翫がざるが如し。是の如く若し此の室に入りぬれば但だ佛の功德の香のみを聞きて聲聞辟支佛の功德の香を聞くことを樂はざるなり。舍利弗、其れ釋梵四天王諸天龍鬼神等有りて、此の室に入る者は斯の上人の正法を講説するを聞き、皆佛の功德の香を樂ひ、發心して出づ。舍利弗、吾此の室に止ること十有二年、初より聲聞辟支佛の法を説くを聞かず、但だ菩薩の大慈大悲、不可思議諸佛の法のみを聞く。舍利弗、此の室常に八の未曾有難得の法を現す。何等をか八と爲す。此の室常に金色の光を以て照し、晝夜異ること無し。日月の所照を以て明と爲さず。是を一の未曾有難得の法と爲す。此の室に入る者は諸垢の爲に惱まされず。是を二の未曾有難得の法と爲す。此の室常に釋梵四天王、他方の菩薩有りて來會して絶えず。是を三の未曾有難得の法と爲す。此の室常に六波羅蜜不退轉の法を説く、是を四の未曾有難得の法と爲す。此の室常に天人第一の樂を爲して、絃より無量法化の聲を出す。是を五の未曾有難得の法と爲す。此の室四大藏有りて衆寶積滿せり。周く窮まりて乏しきを濟ふ。求め得ること盡ること無し。是を六の未曾有難得の法と爲す。此の室釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、阿閼佛、寶德寶炎寶月、寶嚴難勝、師子響一切利成、是の如き等の十方の無量の諸

佛、是の上人の念ずる時即ち皆爲に來り、廣く諸佛秘要の法藏を説きたまひ、説き已りて還り去る。是を七の未曾有難得の法と爲す。此の室一切の諸天嚴飾の宮殿、諸佛の淨土、皆中に於て現ず。是を八の未曾有難得の法と爲す。舍利弗、此の室常に八の未曾有難得の法を現す。誰か斯の不思議の事を見て、而も復た聲聞の法を樂ふこと有らんやと。

此の一段に於て維摩の室に種々の不思議の事の集つて居るさまが委しく説き明さるゝのである。抑も文殊師利等が此の室に入つてから種々の不思議なことが續いて起り、人々は今更ながらに維摩詰の智徳共に秀でたるに驚いたのであるが、此に至つて更に天女の説明があり、大乘の貴きことが一層明かになる。其の天女の説明に入るに先ち、眞の佛法はたゞ大乘のみであることが簡明に説かれてある。前段に於て天女は増上慢に就て最も明快に説いた。之によつて天女の志す所は大乘を學んで、佛の境界に到達することに在るとは察せらるゝのであるが、併し大小乗の關係に就て如何に考ふるかを未だ一言も語つて居ない。因て舍利弗は『汝の三乘に就て見る所如何』と問ひ、天女が之に答ふるのである。其の大體の意は法華經方便品に

十方佛土の中には唯だ一乘の法のみ有り、二も無く亦三も無し。佛の方便の説を除く。

とあるに一致して居る。小乗といひ大乘といふも歸する所は一でなければならぬ。大乘を離れ

て小乗を考ふることは畢竟意味をなさぬ。譬へば東京から京都へ行くためには東海道の各地を経なければならぬが、其の各地は京都へ行くために通過するのであるから、旅客はいつも此の事を心に止めて居なければならぬ筈である。其の途中には名古屋もあり静岡もあつて、それぞれに繁昌して居るのであるが、若し旅客が其等の地の繁昌に心を惹かれて、いつ迄も此處に滞在して居やうと考ふるならば、其の旅行の目的はいつ迄も達せられぬであらう。併しながら静岡をも名古屋をも経過せずして、東京から一足飛びに京都に達することは出来ぬのである。京都に着いた人は必ずや東海道の宿々を通つて來たことを深く感謝するであらう。前にもいつた通り、佛の小乗の教へを聽いて覺を得た者の中の最上が阿羅漢である。阿羅漢とは殺賊の意で、一切の煩惱の賊を殺し盡したものである。其の阿羅漢の中に於て殊に秀でたる迦葉等は、釋尊が法華經を説きたまへるを聽聞し、菩薩道の極めて貴きことを知り、自分等が阿羅漢となるために努力したのは、更に進んで菩薩道を修むべき準備として最も有力なものであることを知り、『今よりは菩薩道を勵んで必ず佛の境界に到達しやう』といふ大決心をした。而して佛の大恩を深く感謝して、

我等今は眞に阿羅漢なり。諸の世間天人魔梵に於て、普く其の中に於て供養を受くべし。世

尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまふ。

といつた。阿羅漢たるに止まつて更に進まぬならば、切角阿羅漢となつたかひは無い。進んで菩薩となり、更に進んでは佛ともなり得る者が眞の阿羅漢である。迦葉の一語は能く此の意を明かにして居る。今天女の答ふる所も亦能く此の意と一致して居る。

天女は舍利弗の問に答へ、更に之に續いて維摩詰の方丈の室が如何に貴いものであるかを語つた。維摩詰は能く佛の御本意を辨へ知れる者であるから、其の説く所は盡く大乘佛敎の深意を發揮するものであつた。

此の室に入る者は斯の上人の正法を講ずるを聞きて皆佛の功德の香を樂ひ發心して出づ。

とあるは即ち此の意である。なほ天女は此の方丈の室に八種の不思議あることを説いたが、其の八種の不思議といふは、要するに菩薩の具ふる所の徳の洪大なることを證するに外ならぬものである。華嚴經には

譬へば迦楞頻伽鳥は殻の中に在る時すら大勢力ありて、餘の鳥の及ばざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。生死の殻の中に於て菩提心を發せば、功德勢力は聲聞緣覺の及ぶ能はざる所なり。

とある。生死とは前にも屢々いつた通り、人生に於ける有らゆる變化を指していふのである。

生死に支配せらるゝものは即ち凡夫である。生死の殻の中に在るといふは、全く凡夫の境界を脱し切れぬことである。菩薩とは大乘を學ぶ者のことであるが、たとへ大乘を學んでも、最初から凡夫の境界を脱することの出来るものではない。最初は種々の煩惱が其の心中に群り起るを免れぬのである。併し是非とも大乘を學んで、世をも人をも教へ導く身になりたいといふ決心が動かなければ、たとへ其の修行の途中に在つても、なほ聲聞緣覺等に比べて遙かに勝れる者といふべきである。何となれば此の心が即ち佛の御心と一致するからである。況してや次第に修行を積んで智徳共に優れたる菩薩となれば、其の尊きこと世に比すべきものなく、法華經にも『諸佛の歎めたまふ所なり』といひ、又『一切の天人皆供養すべし』といつてある通りである。維摩詰の如きは眞に在家の菩薩の範として仰ぐべき人であるから、其の室に種々の不思議が現じたといふのもまことに當然の事といふべきである。

○三乘に於て 三乗とは前にもいつた通り、聲聞乘と緣覺乘と菩薩乘である。天女は『得る所無く證する所無し』といつたけれども、其の説く所は極めて意味深きものであつて、久しき修行を積んだもので無ければ到底説き得ぬ所である。故に『三乗の中の何れを究めたのであるか』

と問うたのである。○我聲聞と爲る 天女自身は大乘を學んで居るのであるが、最初から大乘を説いても分らぬやうな、程度の至て低い者に對しては「我も小乗を學んで聲聞の覺を得た者である」といひ、彼を誘うて行くのである。○因縁の法を以て 因縁とは前に出たる十二因縁のことである。十二因縁の理を深く觀じ、煩惱を離れて清淨なる生活に入り得たものが辟支佛即ち緣覺である。○我辟支佛と爲る 若し十二因縁の理を説いて覺を得しむべき程度の者に對する場合には「我も亦緣覺の身である」といつて彼を誘ふのである。○大悲の法を以て 大悲とは即ち佛の御心で、大悲の法とは大乘である。○我大乘と爲る 最初から大乘を説いても分らぬやうな者には小乗を説くけれども、終には悉く皆大乘を學んで佛の境界に到達し得るやうにしてやるのである。其の時に初めて「實は我も大乘を學んだ者である、今迄語つたのは方便に過ぎぬ」と打明くるのである。○瞻蔔 金色花樹または黃花樹といふ。其の花の香至て高く玄應音義には「樹形高大にして其の花亦甚だ香し、其の氣風を逐ひて彌々遠し」とある。○斯の上人 維摩詰のことである。上人とは上徳ある人の義で、増一阿含經には「夫れ人の世に處して、過有れば能く自ら改むる者を上人と名く」とある。○發心して出づ 自分も共に大乘を學んで、佛智を具ふるやうになりたいといふ決心をして其の室を出るのである。○十有二年 古

代の印度に於て十二年を以て修學の一期としたことは種々の記録に出遊十二年とか、苦難十二年とかいふことが見えて居るので推想が出来る。○未曾有難得の法 此處でいふ法とは事實といふ義である。他の所では到底出逢ふことの出来ぬやうな、未曾有な貴い事實が此の室には多く存在するのである。○金色の光 金は尊貴の意を表はすので、金色の光とは即ち佛の具へたまふ徳の光である。大乘を説く所の室であるから、常に此の貴き光に照されて居るわけである。○諸垢 種々の煩惱のことである。○他方の菩薩 此の娑婆世界以外の方々の世界に住する菩薩である。○六波羅蜜不退轉の法 前にもいふ通り六波羅蜜は即ち菩薩道である。常に菩薩道を勵んで退轉せぬものは終に佛の境界に到達し得べきである。六波羅蜜不退轉の法を説くとは即ち佛と成るべき法を説くのである。○法化の聲 其の聲を聞く者は皆心清淨なるを得て、諸の煩惱を除くので之を法化の聲といふのである。○四の大藏 これは菩薩の四攝法に比したものである。四攝法のことには前に出て居る。○周く窮まりて 世界の果てまでも周く其の施が行き渡ることである。○十方の無量の佛 東西南北と其の四隅と上方と下方と、併せて十方に無量の世界があつて、無量の佛が在すと信せられて居る。併し何れの佛の説きたまふ所も畢竟一に歸するのであるから、維摩詰の心は常に十方の諸佛と相通じて居るわけである。○念する時

道生は『佛の理常に其の心に在り、之を念すれば便ち至る』といつた。○復た聲聞の法を樂ふこと有らんや 大乘を説く所の維摩の室が斯くも貴い所であることを知る者は、誰も皆大乘を學ばんとの念を發すべきである。

天女の説く所に依れば、維摩詰は常に大乘を説いて多くの人々を誘うて居た爲に、其の室に入る者は皆共に大乘を學んで、佛の境界に到達したいといふ志を懷くやうになつたとある。此の如き室はいつも金色の光を以て照されて居るのである。佛の具へたまふ所の三十二相の中に『身金色相』といふあり、また『常光一丈相』といふもある。佛の御身は金色であつて、其の御身より發する所の金色の光は其の周圍を照すといふのである。是れは佛の具へたまふ所の洪大無邊なる徳が自ら其の形に現はるゝことをいつたもので、無量壽經の中に出たる阿彌陀如來の四十八願の第三に

設たごひ我佛われぶつを得たらんに、國くにの中の人天にんてん悉ことごとく眞金色しんこんじきならずんば正覺しやうかくを取らじ。

とあるも、要するに國中の人が悉く佛の感化によつて、惑を去り徳を成ずることを理想とせらるゝの意である。又金光明經といふ經が平安朝に於ては頗る重んぜられて居たが、是れは佛の正法に基いて國を治むる時には諸天も之を護り、その國に災難なく國民は永く安樂であるとい

ふことを説かれた經で、その國が金光明に照さるゝことは即ち佛の威徳によつて常に照されて居るの意である。聖武天皇が諸國に國分寺を置かれたのは即ち此の經に基かれたもので、正しき稱呼は『金光明四天王護國之寺』といふのであつた。勿論此の寺に於ては金光明經が斷えず讀誦せられ講説せられて居たものである。此の國分寺は國司の居る所（即ち國府、今の府縣廳所在地の如きもの）に置かるゝのが原則であつた。而して國分寺に住するものを僧綱といひ、學徳共に高き人を選んで之に補せられた。奈良の東大寺は總國分寺であるから特に重んぜられて居た。各國共に國司は政治を掌り國內の平和を謀り、國分寺に於ては風教を掌り、國內の凡ての人を善導することを旨とし、政治と宗教と相俟て國家の健全なる發展を促すことを理想としたものである。

傳教大師は此の金光明經を法華經及び仁王經と併せて鎮護國家の三部經と定め、叡山に於て之を讀誦講讚した。其の精神は佛の正法を世に弘めて國家を永く隆昌ならしめんとするに在る大師の選したる『長講金光明經會式』の結願の文には

永ながく業道ごふだう一切さいの患うれひ、乃至なほ煩惱ぼんなん及び所知しよちを離はなれ、多聞たもんの薰習くんじゆ念々ねんねんに増まし、威光みくわう増益ぞうやくして恒つねに叡山えいざんの道場だうぢやうの正法藏しやうぽうざう、大日本國たいにほんこく及び九院くうゐんを守護しゆごし、佛法ぶつぽふを興隆こうりやうして後際ごさいを盡つくし、恒つねに一乘じちやうを説

きて群生を利せん。

とある。特に今迄の例を破つて此の國を呼ぶに『大日本』といったのは頗る注意すべきことである。佛法は印度から支那を経て吾が國に入つたのであるが、必ずや吾が國に遍く弘まつて、やがては他に及び、吾が國が萬國を指導すべき地位に立つべきことを確信したればこそ、特に大の字を冠したものであらう。是れは餘談に涉つたが、金色の光を以て佛徳を表した例は此等によつて明かであらう。維摩詰の室は常に大乘をのみ説き、而も其の説く所は盡く佛の御心に叶へるものであつたのであるから、常に金色の光によつて護られて居たといふも尤もな次第である。

又此の室には帝釋梵天四天王、及び他方の菩薩が常に來會するといつてあるが、前にも屢々いつた通り、佛法は獨り吾等人類のみならず、苟くも生ある者は皆歸依すべきものと考へられて居る。天上界は苦惱なく憂愁なき所であるといふが、苦惱に充ち憂愁に充ちたる此の地上の生活を離れて天上界に生を受くることが出來たなら、その當座は大なる悦びを感じるでもあらうが、苟くも生ある者は皆活動したいといふ自然の要求をもつて居る。無事平穩といふだけでは決して満足すべきで無い。眞に意義ある生き方がしたいと思ふならば、天上界の者と雖も共

に佛法を學び、佛法の流布に力を致すことに於て深き悦びを感じるやうにならなければならぬ既に佛法に歸依せる以上は、佛法の爲に力を盡す所の菩薩に對しては感謝の念をもつべきである。されば法華經寶塔品には、末世に出て此の經を弘むる者の徳を稱へて

佛滅度の後に能く其の義を解せん、是れ諸の天人世間の眼なり。 恐懼の世に於て能く須臾も説かんは一切の天人皆供養すべし。

とあり、又安樂行品にも

衆生見んと樂ふこと賢聖を慕ふが如くならん。 天の諸の童子以て給使を爲さん。

とある。此の如くであるから常に大乘を説く室には諸天も來會すべき筈である。

又十方の世界に如何に多くの佛が在して、如何に多くの法を説かるゝとも、其の歸着する所は畢竟一であるべきこと、前に引いた法華經の文によつて明かである。吾等が釋迦牟尼佛に歸依するは即ち十方世界の凡ての佛に歸依することである。吾等が釋迦牟尼佛の教へを弘むる爲に力を盡すならば、十方世界の凡ての佛が共に満足せらるべきことである。此の娑婆世界の菩薩は十方世界の多くの菩薩と友たるべきものである。菩薩は何れも佛の御心を以て吾が心と爲し、一切衆生の救護を以て自ら任ずるものであるから、固より互ひに相敬し相重んずべきであ

る。されば法華經安樂行品には

是の佛子法を説かんに、常に柔和にして能く忍び、一切を慈悲して懈怠の心を生ぜざれ。
十方の大菩薩の衆を愍むが故に道を行ずるに、恭敬の心を生ずべし、是れ則ち我が大師なり
と。

といつてある。娑婆世界の菩薩が此の如くに他方の菩薩を尊敬するのであるから、他方の菩薩も亦此の娑婆世界の菩薩の苦勞を察し、常に雙方の心が相通じて居るべきである。

次に此の室に四つの大なる藏があつて、其の中に蓄へられたる財寶は世界の果てまでも凡ての人の求めに應じて施與しても、なほ盡くることが無いとある。此の四つの藏は四攝法に譬へたものであるが、四攝法は前にもいつた通り世間の人を導いて佛の正法に歸依せしむるために最も有効なる四種の方法である。此の四は皆是れ大なる慈悲心の發現したるものに外ならぬ。財を施し若くは教へを施して困厄の中に在るものを救ひ、之を縁として佛法に歸依せしむるは布施攝であるが、慈悲の心なくして出来ることでは無い。仁愛柔和の語によつて惱める者を慰め、之を縁として佛法に歸依せしむるは愛語攝であるが、慈悲の心なくして徒らに言語を柔和にするとも人を動すことの出来るものではない。利行攝は吾が行ひによつて周圍の人々を感化

し、それに利益を與へ、之を縁として佛法に歸依せしむることであるが、是れとても慈悲の念無くして出来ることでは無い。同事攝とは世間の迷へる人々と共に住み共に働きながら、次第に彼等を導いて佛法に歸依せしむること、所謂和光同塵である。日輪は高く天上に懸り、清く美しい光りを放つて居るが、如何なる汚れた物の上にも其の光りを惜まぬ。凡そ此の地上に於て日光に浴し得ぬといふものは無い。此の事を『光を和らげ塵に同うす』といふのである。是れは元來老子が聖人の徳を稱ふるために用ゐた語であるが、佛教に於ては此の語を佛菩薩の徳を形容するために用ゐて居る。同事攝を實行するには和光同塵の心をもたなければならぬ。要するに大なる慈悲の發現に外ならぬものである。斯く考へ來ると、四攝法なるものは皆慈悲心の發現に過ぎぬので、此の慈悲心は有らゆる人に光被するのである。慈悲に漏るゝものは一人も無い筈である。『求得無盡』とは眞に能く之を説明したる語である。而も斯る洪大なる働きはたゞ一心の中より發したるものにはすぎぬ。

又此の室に十方世界の諸佛が常に來つて説法せらるゝといふことであるが、十方世界の諸佛の説かるゝ所と釋迦牟尼佛の説かるゝ所とは畢竟同一である。それ故に法華經の方便品に於ては釋尊自ら其の一代化導の跡を語りたまへる後、

舍利弗當に知るべし、諸佛の法是の如し。

と仰せられた。されば釋尊に歸依するものは即ち十方の諸佛に歸依するのであるから、其の得る所の力は非常に大なるもので、

復た諸の疑惑無く、心に大歡喜を生じ、自ら當に作佛すべしと知れ。

とあるも道理である。今維摩詰は深く佛法を知り、又深く佛法を信じ、其の説く所は能く釋尊の御心と一致するのであるから、其の所説を聽聞したものは、之を釋尊はじめ十方の世界の多くの佛が聲を同うして説かれたものであると信じて、少しも間違ひではない。隨て此の室中に諸佛の淨土が現はれて居るとも感せらるゝ筈である。

舍利弗言。汝何以不轉女身。天曰。我從十二年來。求女人相。了不可得。當何所轉。譬如幻師化作幻女。若有人問。何以不轉女身。是人爲正問不。舍利弗言不也。幻無定相。當何所轉。天曰。一切諸法亦復如是。無有定相。云何乃問不轉女身。即時天女以神通力。變舍利弗。令如天女。天自化身。如舍利弗。而問言。何以不轉女身。舍利弗以天女像。而答言。我今不知何轉。而變爲女身。天曰。舍利弗。若能

轉此女身。則一切女人亦當能轉。如舍利弗非女而現女身。一切女人亦復如是。雖現女身。而非女也。是故佛説一切諸法非男非女。即時天女還攝神力。舍利弗身還復如故。天問舍利弗。女身色相今何在。舍利弗言。女身色相。無在無不在。天曰。一切諸法亦復如是。無在無不在。夫無在無不在者。佛所説也。

(舍利弗言く、汝何を以てか女身を轉せざると。天曰く、我十二年より來、女人の相を求むるに、了に不可得なり。當に何の轉ずる所かあるべき。譬へば幻師が幻女を化作するが如し。若し人有りて何を以てか女身を轉せざると問はは是の人正問と爲すべきや不やと。舍利弗言く、不なり。幻には定相無し、當に何の轉ずる所かあるべきと。天曰く、一切の諸法も亦復た是の如し、定相有ること無し。云何ぞ乃ち女身を轉せざること問はんと。即時に天女神通力を以て舍利弗を變じて天女の如くならしめ、天自ら身を化して舍利弗の如くにし、而して問ひて言く、何を以てか女身を轉せざると。舍利弗天女の像を以てして而して答へて曰く我今何んか轉せるかを知らず、而も變じて女身と爲れりと。天曰く、舍利弗若し能く此の女身を轉ずれば、則ち一切の女人も亦當に能く轉ずべし。舍利弗の女に非ずして而も女身を現

するが如く、一切の女人も亦復た是の如し。女身を現すと雖も而も女に非ず。是故に佛一切の諸法は男に非ず、女に非ずと説きたまふと。即時に天女還りて神力を攝む。舍利弗の身還復して故の如し。天舍利弗に問ふ、女身の色相今何れの所にか在ると。舍利弗言く、女身の色相、在も無く不在も無しと。天曰く、一切の諸法も亦復た是の如し。在も無く不在も無し夫れ在も無く不在も無しとは佛の所説なりと。

前段に於て天女の説いた所は眞に能く大乘の精神を盡し、舍利弗をして驚嘆せしむるに足るものであつた。舍利弗は之を聞いて、是れ程の智慧辯才ある者が女人の姿であるのは似合はしからぬことであると思つた。それ故に『汝の如くに大乘に通達し、大乘を弘むることに力を盡し、大なる功徳を積んだものは女身を轉じて男子と爲ることも出来る筈ではないか』と問うたのである。前にもいつた通り、當時に於ては一般に女は男よりも卑しいものと考へられて居た法華經の提婆品にも、舍利弗が龍女にいつた語に

女身は垢穢にして是れ法器にあらず、云何ぞ能く無上菩提を得ん。

とあり、又女人の身に五障ありといふことを擧げた。それは梵天王となることを得ず、帝釋となることを得ず、魔王となることを得ず、轉輪聖王となることを得ず、佛となることを得ぬと

いふのである。此の如くに一般には女人を卑しんで居たのであるが釋尊は決して女人を疎外されなかつた。女人と雖も佛性を具へて居る以上は、其の佛性を開發せしむるための努力を積みさへすれば必ず佛の境界にも到達し得べきこと疑ひなき所である。尤も釋尊の叔母憍曇彌が出家して御弟子になることを願つた時には容易に許されず、阿難が種々に懇願したのでやうやく許されたといふことが傳はつて居る。これは決して釋尊が女人を疎外されたといふことでは無い。當時の印度の状況を考へて見ると、女人は卑しいものとなつて居て、世間の責任ある地位にも立たず、隨て各種の教養も男子に比すれば大に劣つて居たのであるから、餘程奮發しなれば男子と同様な努力を續けて行くことは出来さうにも思はれぬ。然るに出家して佛弟子となり、種々の修行を積むことは容易な業ではない。憍曇彌は最も賢明なる婦人ではあつたが、それでも其の種々の苦難に堪へ得るか否か、隨分疑はしいことであつたであらう。釋尊が容易に其の出家を許されず、阿難の骨折りで當人の決心をも充分に確かめ、然る後に出家を許されたといふことは、眞に其の用意の周到なるを見るべきである。

されば法華經に於ては憍曇彌も、また釋尊の太子であつた時の夫人耶輸陀羅も、共に佛の境界に到達すべきことを認められ、

菩薩の行を修し、大法師と爲り、漸く佛道を具し、善國の中に於て當に作佛することを得べし。(勸持品)

と仰せられた。一切衆生は固より皆佛の境界に到達すべきものであつて、男女の區別を云々すべき筈はない。

我本誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。(方便品)

と仰せられた、其の一切の衆といふ中には固より女人をも含まれて居るのである。此の天女の語に『佛一切の諸法は男にあらざ女にあらざと説きたまふ』とあるは眞に能く佛の御心を現はして居る。

○了に不可得なり 女人と男子と何處が異なるかを考へて見ても、其の異なる點は見出されぬといふのである。男となり女となるは畢竟現世に於ける短い間の差異にすぎぬ。共に佛性を具へて居る以上は、共に皆佛と成るべきものである。此の如くに達觀すれば、女身を轉ずるの要はないわけである。○幻女を化作する 幻術によつて女の姿を現はすのであるから、固より其の實體があるわけでは無い。○一切の諸法も 吾等の眼前に現はれ來る一切の事物は、皆刻々に變

化して暫くも止ることなきものである。それは幻術師が現はし出したる幻像の定まる所なきと同様である。されば吾等は斯る現象界に心を牽かるゝこと無く、その變化窮まりなき中を一貫して永遠に存する所の理を明かにせんことを期すべきである。○云何ぞ女身を轉せざることを男女の別もまた形體上の差であつて、男は尊く女は卑しといふは現在に於ける世間の定まりにすぎぬものである。男女共に佛性を具へて居るのであるから、菩薩道を行じて怠らなければ共に佛と成ることが出来る。佛となれば何れの佛も皆同等であつて、その間に尊卑上下の別のあらう筈はない。されば天女が男子となることを求めず、女身のまゝで居たとて更に不思議に思ふべきではない。○天女の如くならしめ 形は天女に變へても心は元の舍利弗である。形の變化は深き意義あるものではない。○我今何んか轉ずといふことを知らず 自分の外形は女身となつても心は元のまゝであるから、男子に生れ變るべきやうも無いのである。○一切の女人も亦當に能く轉ずべし 舍利弗は釋尊大弟子の一人であつて、此より菩薩道を勵んで後必ず佛と成るべきものである。故に外形が男であつても乃至は女に變つても、更に顧るには及ばぬのである。一切の女人も終には佛と成るべきものと知れば、現に男子の姿であらうが但し女人の姿であらうが、それは深く問ふに及ばぬのである。今舍利弗は女身に變じながら、女身を轉ず